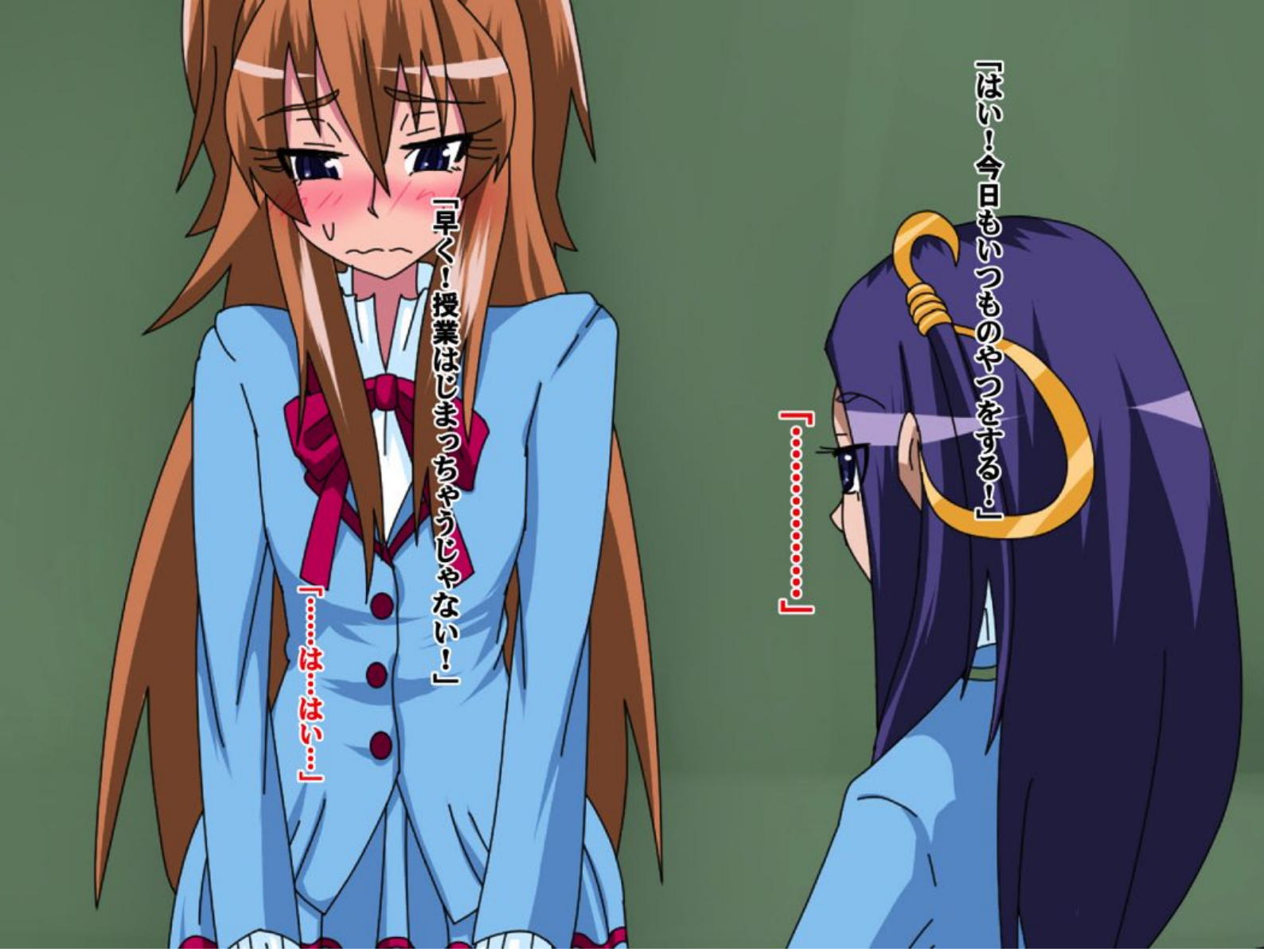
ダイニング

1.「序章」


「はい！今日もいつものやつをする！」
「……」
「早く！授業はじまっちゃうじゃない！」
「……は…はい…」

アリア学園二年…北条響。

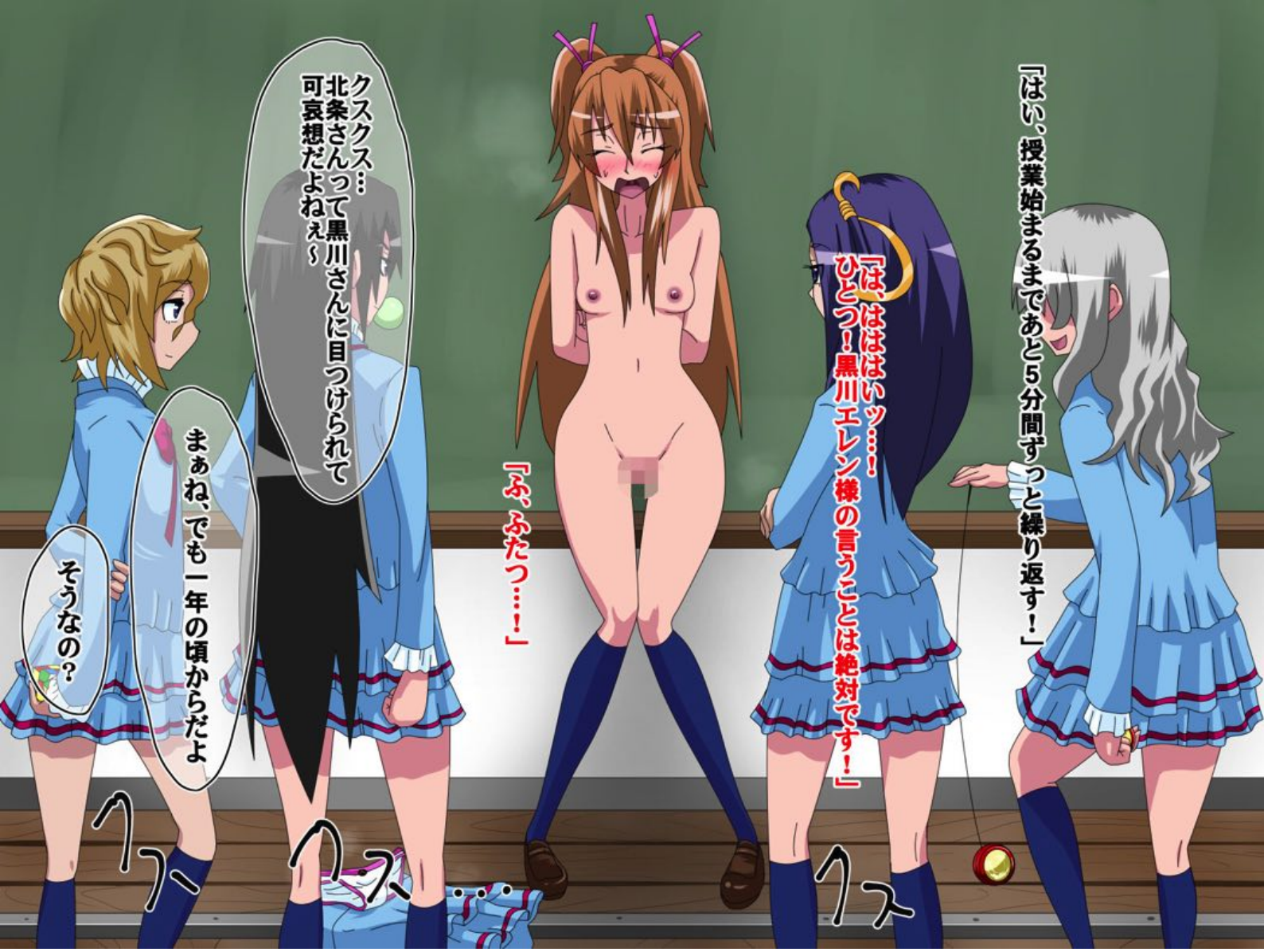
彼女の一日は、学園の女王、黒川エレンと
その取り巻き達にいびられるところからはじまる。

響は毎朝のように、ホームルームが始まる前に
黒板の前に立たされるのだ。

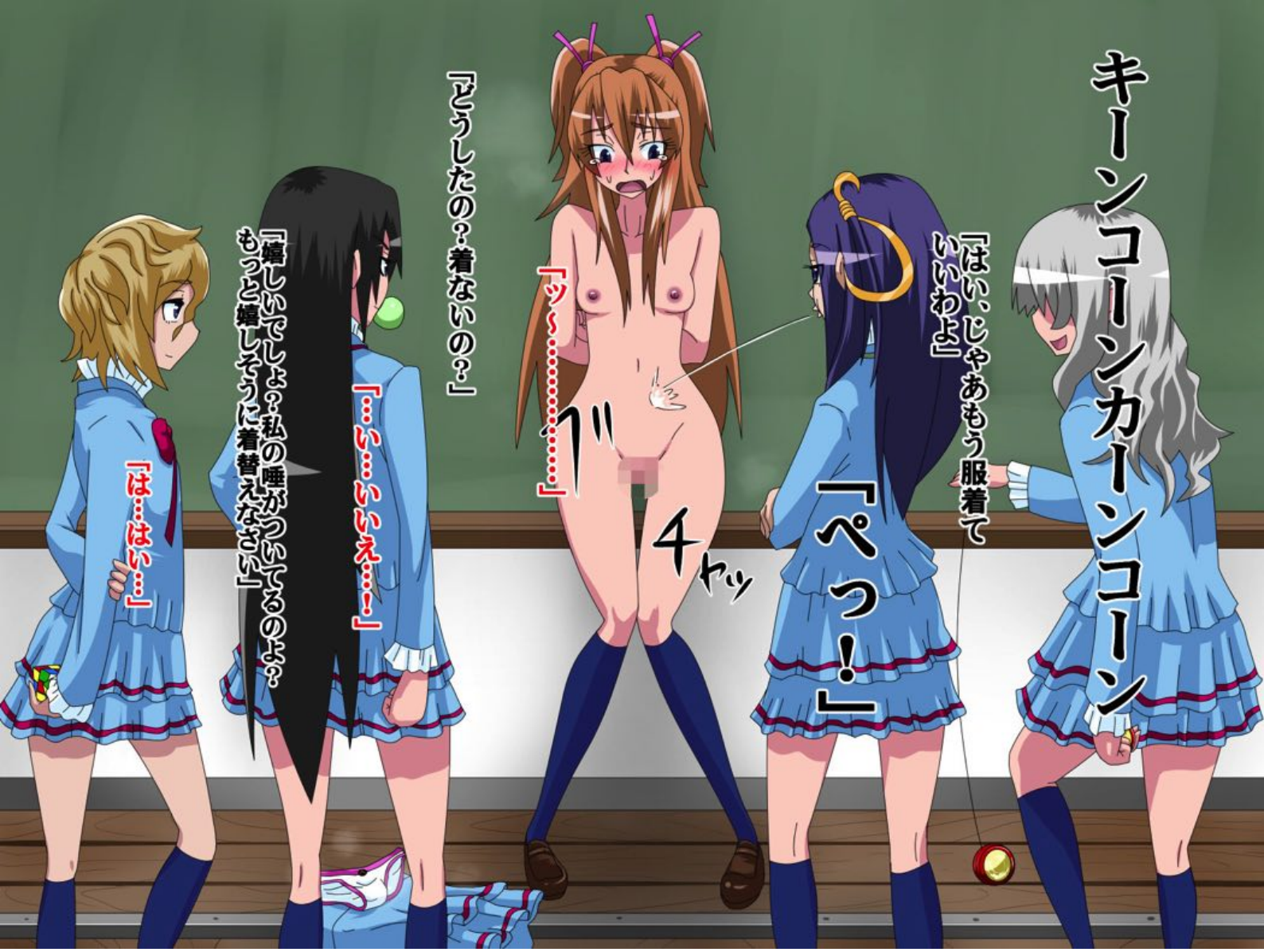
ヌギヌギ……
ストン……
「ひゅ～～っ
響ちゃんのヌードえっろ～！」
「アハハ！」
「ッ～……！」

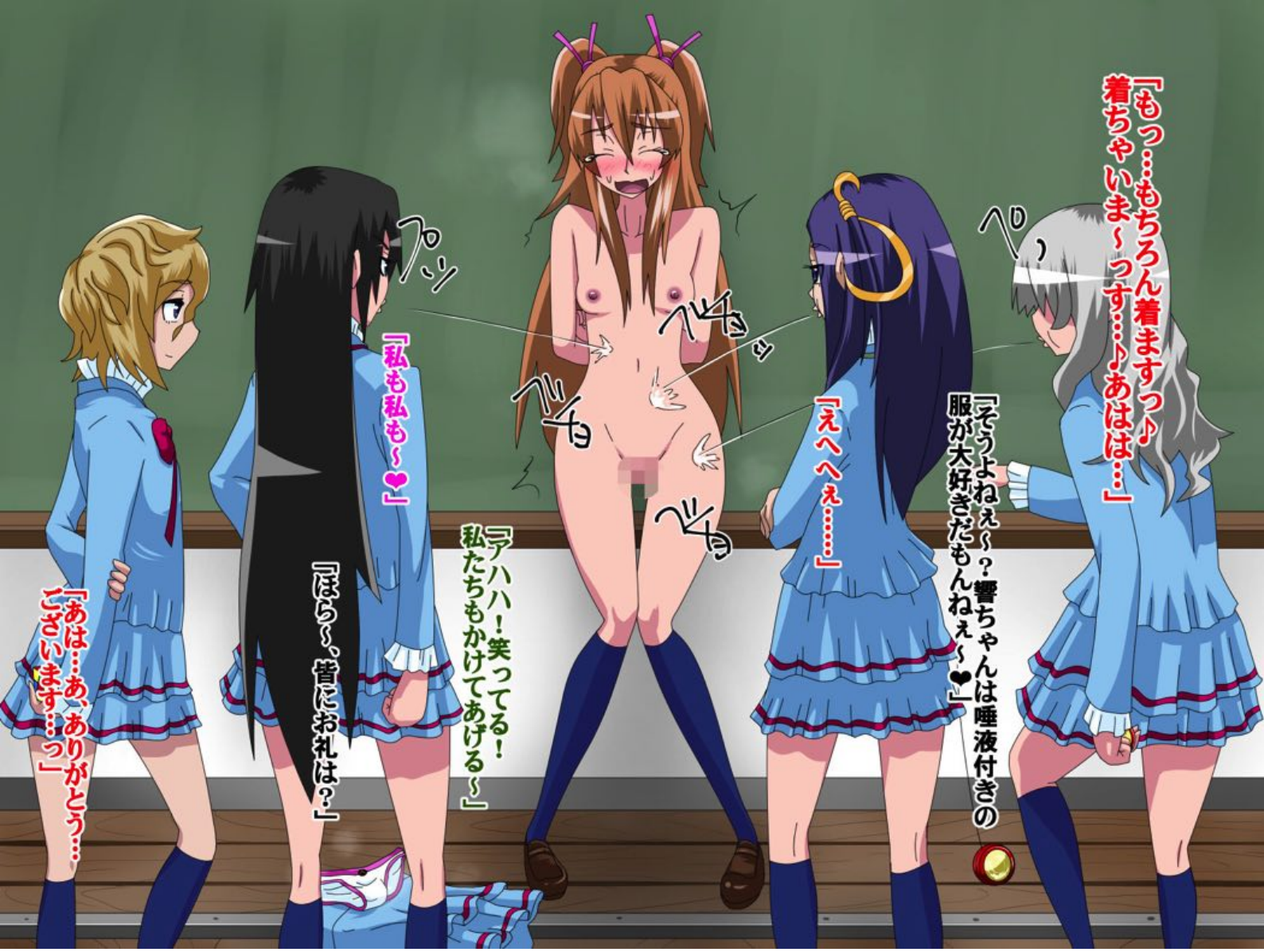
そしていつも躾けられているように、
彼女は皆の前で裸になり、しかも靴下とローファーは
履いたままという恥ずかしい格好で立たされる。
その格好のまま、いつものように言わされるのだ。

「ひっ…ひとつ！
黒川エレン様の言うことは絶対です！
エレン様の言うことには逆らいません！」
「ふたつ！
私は人間のクズです！」
「クズの私をこのクラスの一員として置いて
くださっている皆様への感謝を忘れません！」
「みっつ！私はブスです！
この学年で一番のブス女です！」


「はい、授業始まるまであと5分間ずっと繰り返す！」
「は、はははいッ…！ひとつ！黒川エレン様の言うことは絶対です！」
「ふ、ふたつ…！」
クスクス…北条さんって黒川さんに目つけられて可哀想だよねぇ～
まぁね、でも一年の頃からだよ
そうなの？
クス
クス
クス

一年の途中で転校してきたのが黒川さん
それですぐに当時学園のボスだった
中絵野レイディーズを押さえつけて
どうも気に入らない北条さんをいじめに
かかったってわけ
黒川さんってあの黒川財閥の
ご令嬢だもんねぇ
誰も逆らえないよねぇ～
そうそう 教師も皆
見て見ぬフリ！腐ってるよねぇ
でもなんで北条さんなんだろ？
さあ？明るくて運動できて 皆の
人気者だしなんか気に障ったんでしょ？
はぁ～…私凡人でよかったわ～


キーンコーンカーンコーン
「はい、じゃあもう服着ていいわよ」
「ぺっ！」
「ッ～……」
4ヤッ
「どうしたの？着ないの？」
「…い…いいえ…！」
「嬉しいでしょ？私の唾がついてるのよ？もっと嬉しそうに着替えなさい」
「は…はい…」


「もっ…もちろん着ますっ♪
着ちゃいま～っす…♪あはは…」
「そうよねぇ～？響ちゃんは唾液付きの
服が大好きだもんねぇ～♥」
「えへへぇ……」
「アハハ！笑ってる！
私たちもかけてあげる～」
「私も私も～♥」
「ほら～、皆にお礼は？」
「あは…あ、ありがとう…
ございます…っ」
ペロ
ベロ
ベロ
ベロ
プッシ

授業が終わって放課後になると、
ほぼ必ず響は女子トイレへと呼び出される。

「やっと来たわね」

「あ、あはは…ごめんなさいっ、ちょっと帰り支度に手間取っちゃって…！」

あくまで笑顔を絶やさない。
それはこの一年間で、彼女が身に着けた処世術であった。

「ヘラヘラするんじゃないわよ」

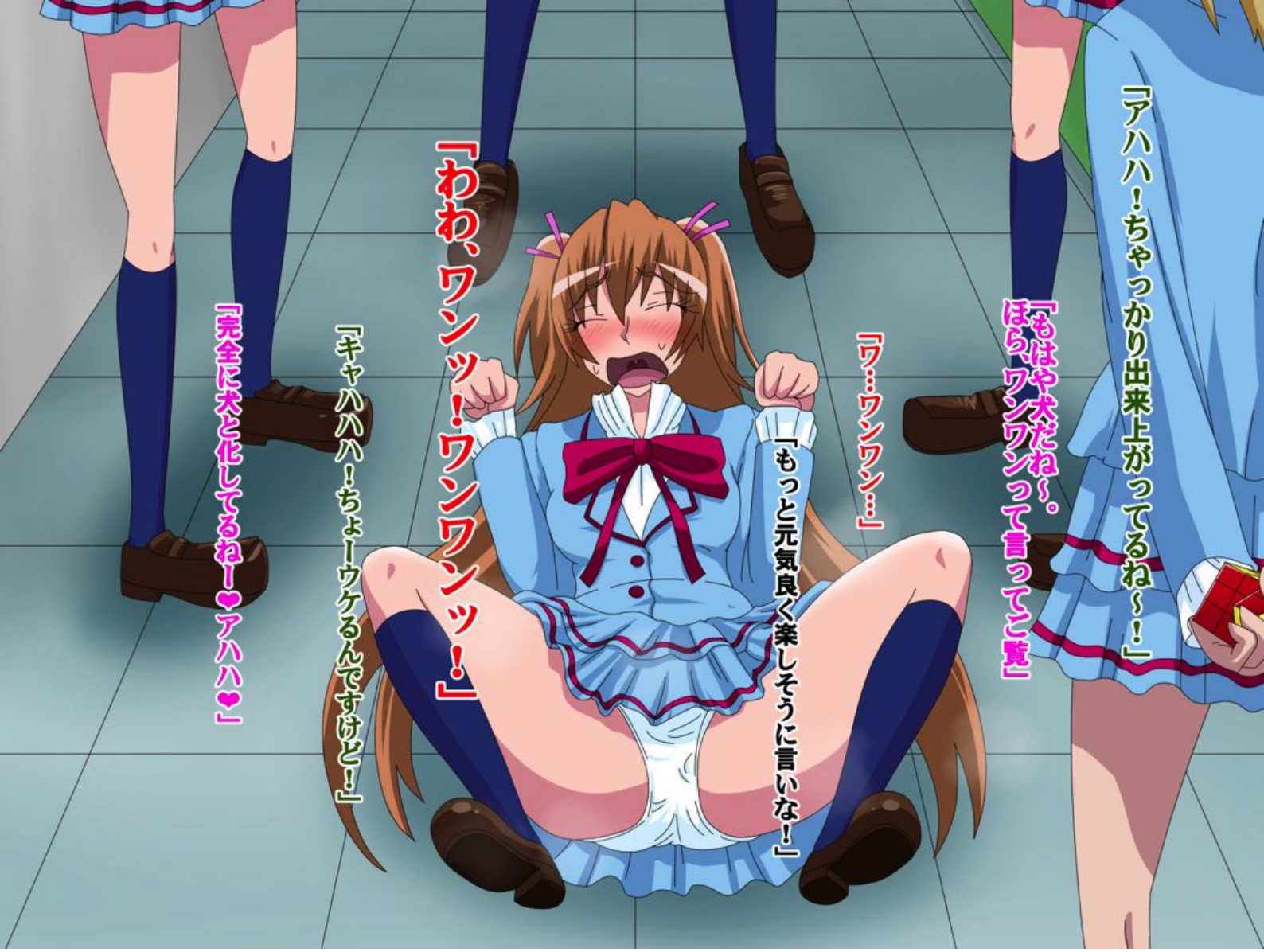
「ご…ごめんなさい…」

「もういいから、ほら早く、**服従！**」

ゴロン…
「…はいよろしい♥」
「……っ…」

「服従」と言われたら即座にその場にお腹を見せて寝転ばなくてはならない。

これも響がエレン達に言いつけられた躾けのひとつである。


「アハハ！ちゃっかり出来上がってるね～！」
「もはや犬だね～。ほら、ワンワンって言ってご覧」
「ワ…ワンワン…」
「もっと元気良く楽しそうに言いな！」
「わわ、ワンッ！ワンワンッ！」
「キャハハハ！ちょーウケるんですけど！」
「完全に犬と化してるねー♥アハハ♥」

「なんだか私もよおしてきちゃった。ここトイレだし、いいよね？」
「おしっこしちゃお～っと❤」
「ッ～……!?」
「あ～！黒川さんだけずるい～！私もする！！」
「私も私も～！❤キャハハ❤」
「よかったわね、全員してくれるそうよ？さ、口をお開け」
「は……はい……っ……」

ぐぽっ……
「そうそう。小便器みたいに大きく口を開けてなさい」
ドキ…ドキ…
「んっ…」
「出るわよ」

プシャッ…ジョロロロロロロロロ…

「ンガッ……!?」

「クスッ…。ほぉら、こぼさずしっかり飲みなさいよ？小便器みたいにね」

ジョロロロ

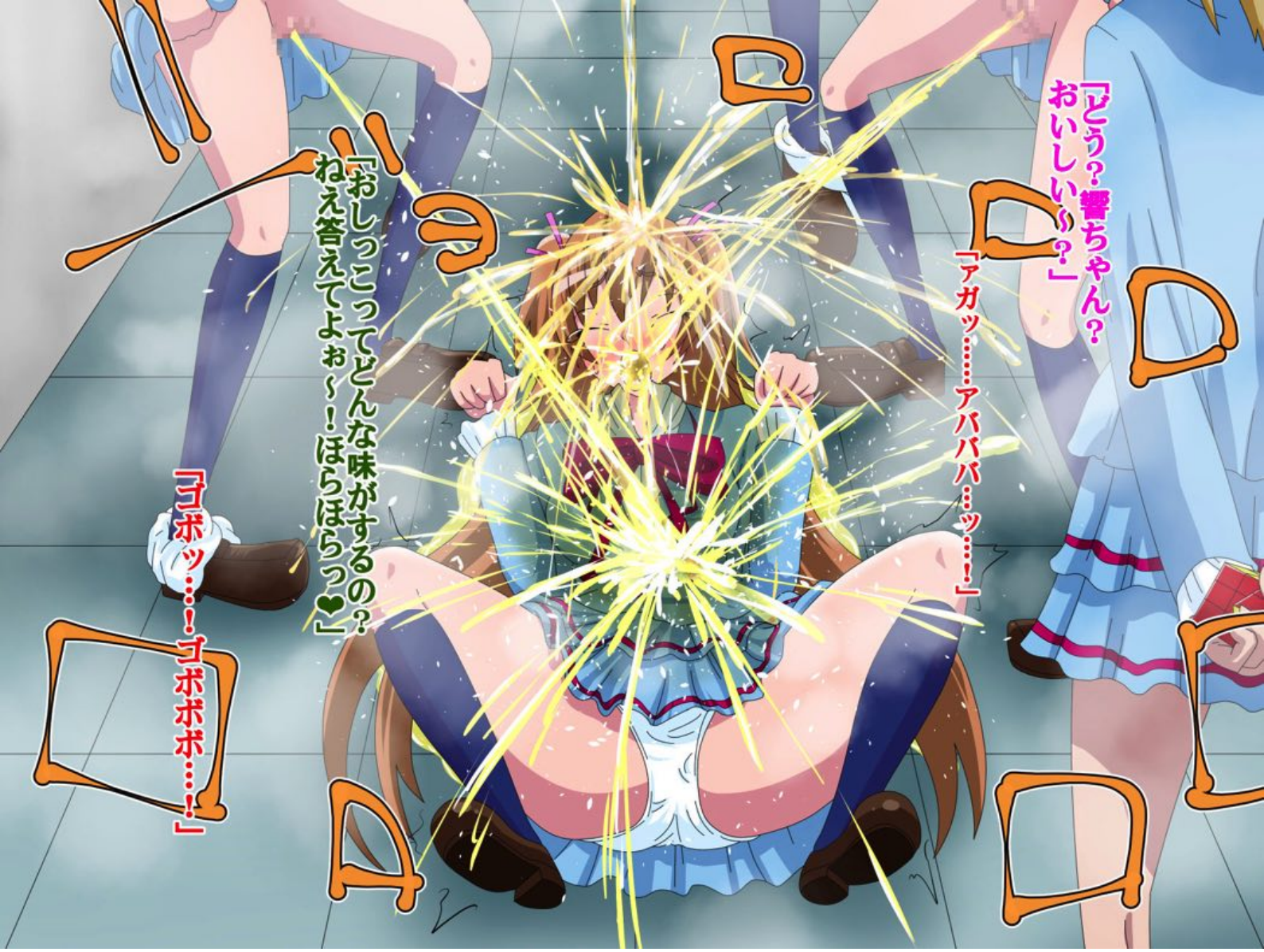
ミリロロ

「ほらほらぁ～❤おいしい？アハハハ❤すごい～！本当飲んでる～！❤」

「本物の便器みたい～❤そして私達男子になった気分❤」

「そ～れおしっこピュッピュ♪おしっこピュ～～ッ❤アハハハハ❤」

「ッ～～～～……！」

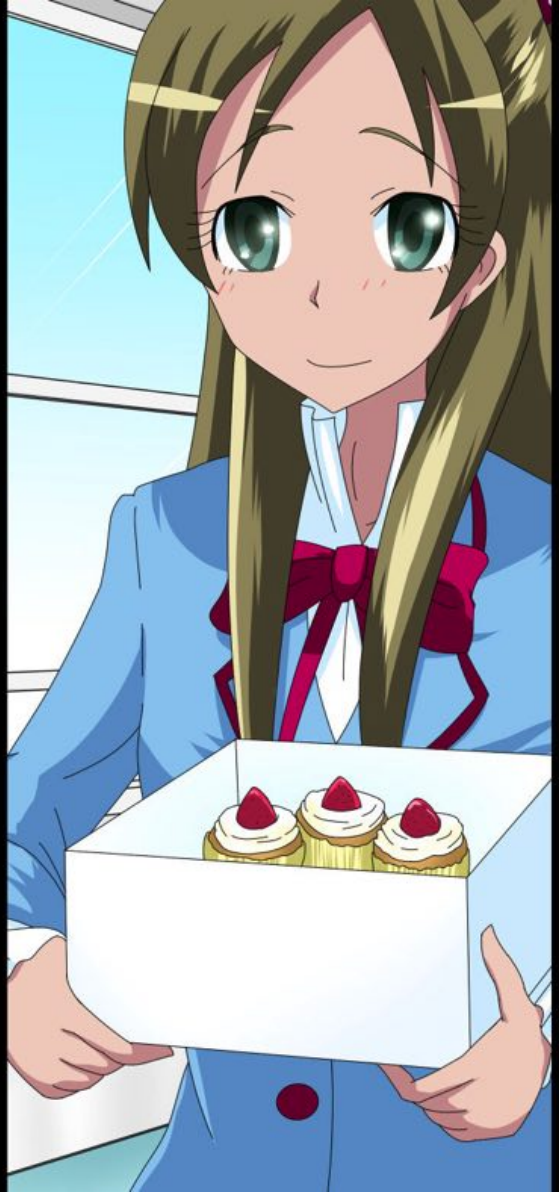

「どう？響ちゃん？おいしい～？」
「アガッ……アバババ…ッ……！」
「おしっこってどんな味がするの？ねえ答えてよぉ～！ほらほらっ♥」
「ゴボッ…！ゴボボボ…！」

びゅっ！びゅっ！
びゅっ！
びゅびゅっ！
「っ……」
「あ～スッキリした❤」
「ひぇ～っ、響ちゃんションベンくさ～！」
「響ちゃんというか、もはや汚物って感じ」
「アハハ！言えてる言えてる！」

「どう？おいしかったでしょ？」
「ふ…ふぁい……」
「返事はワンでしょ？」
「わっ…ワンっ…！」
「アハハハハ！マジうける響ちゃん～❤」
「嫌だったら反抗してもいいのよ？」
「もっとも…その次の日には、あなたのパパは路頭に迷い、ママも音楽界を追われることになるけどね？フフ…❤」
「し…しません…。私は…黒川様の従順な犬…です……」
「そ。それはよかったわ」
「響ちゃんマジ親孝行娘！アタシ泣けてきちゃう！」

パパ……ママ……
私きっと耐え抜いてみせるからね……
守りきって…みせるから……
パパ……
ママ……

「ねえ響、響のために私カップケーキ作ったんだよ。食べて」
「か…奏……？」
―奏…急にどうしたんだろ…？
普段は皆みたいに、私のこと侮蔑した目で見てきてるのに…。
「ねえ、せっかく作ったんだから、食べてよ」
「う…うん」



「うっ、うわぁ～…！おいしそう…！
…だ、だけど……本当にいいの…？」
「なんで？響と私の仲じゃない。いいに決まってるでしょ？」
「そ…そっかぁ～…！」
―やっぱり奏…私のこと……。
「いただきまぁ～～っす！」
ムシャムシャ……パク…

ギュルルルル～～～～～…
ゴロゴロ…
ピィ～～……
か…奏に…
盛られた…～～～!?

「え～、つまりここの計算はXの二乗であるからして～…」
ギュルルル～～…
グピッ…
「ふぅ…！ふぅ…～！」
ま、まま、まずいいいいいいい…！
痛いよおおお…！！！お腹痛いいいいいい…～！！！
出ちゃう～～！！！出ちゃうよぉぉぉぉぉ…！！！
噴き出しそう…！
お尻の穴からう○ち噴き出しちゃうぅぅっ！
ギュルゥゥゥゥゥ～～…
「うぅぅぅぅ～～…！」

も、もうお尻…力入らないっ…！！
がんばれぇぇ～…！授業あと十五分…！！！
ヒク…
ヒク…
ピク…ピク…！
だめぇぇっ～～！！出ちゃだめぇぇ～…！！
今一瞬でも力抜いたら噴き出す…！
洩らしてたまるか…！我慢…！我慢…！
ピク…
ピクッ
グルルルリュウウウウウ…
「んこっ…！」
ト…トイレに…ッ！
で…でもダメ…！もう立ち上がれない…！
ギュルルルルル…
が……ま……ん……～～ッ！！！

ブビッ

ビュビュッ…ブリブリブリブリッ…！
ブチャチャ…！
ブッ！
『……』
ブリリリ…ブリリリリリリ…
……

ブリュリュ……

ブリュッ……

ブウゥゥゥゥ……

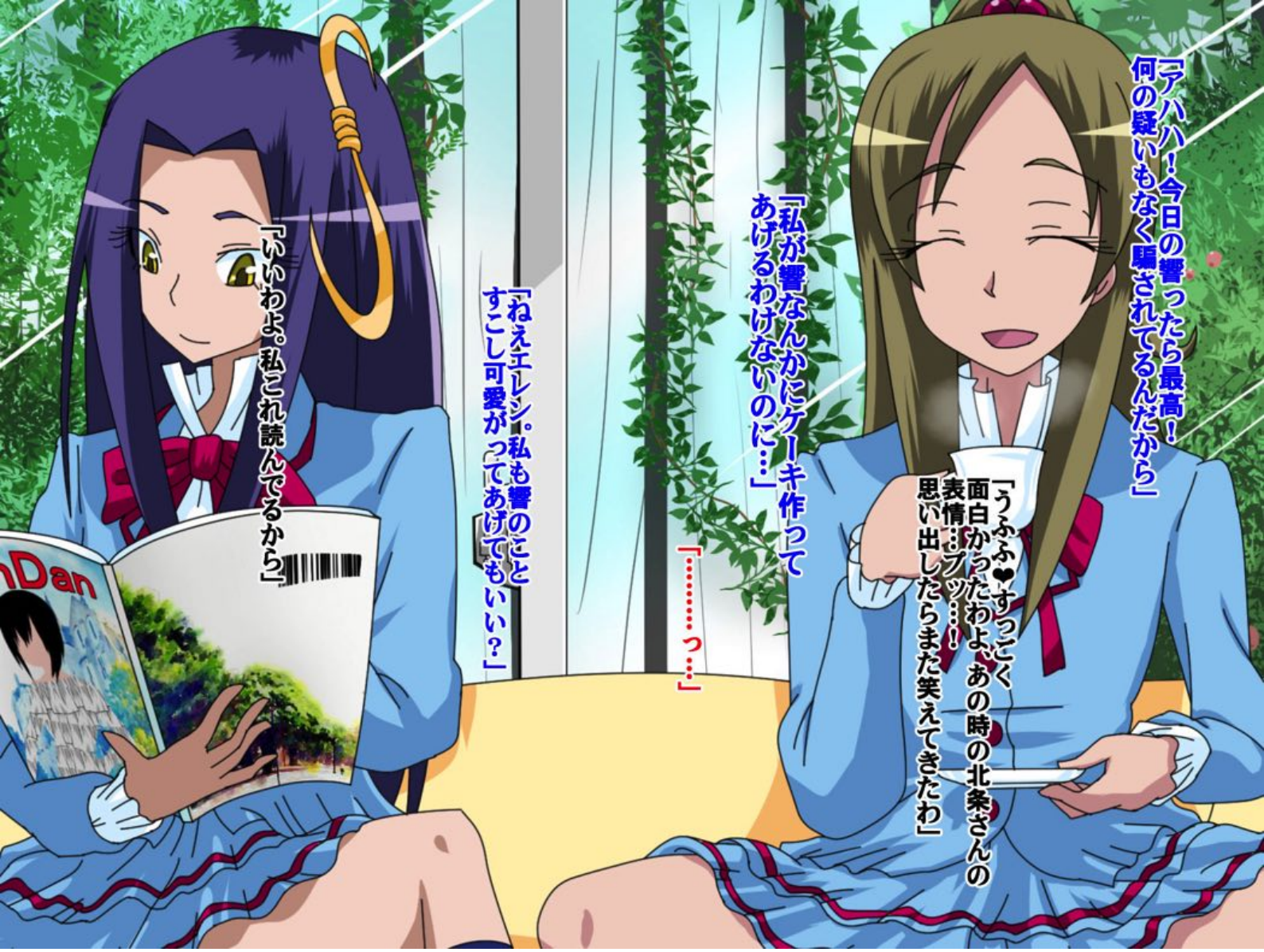
…洩れちゃった……

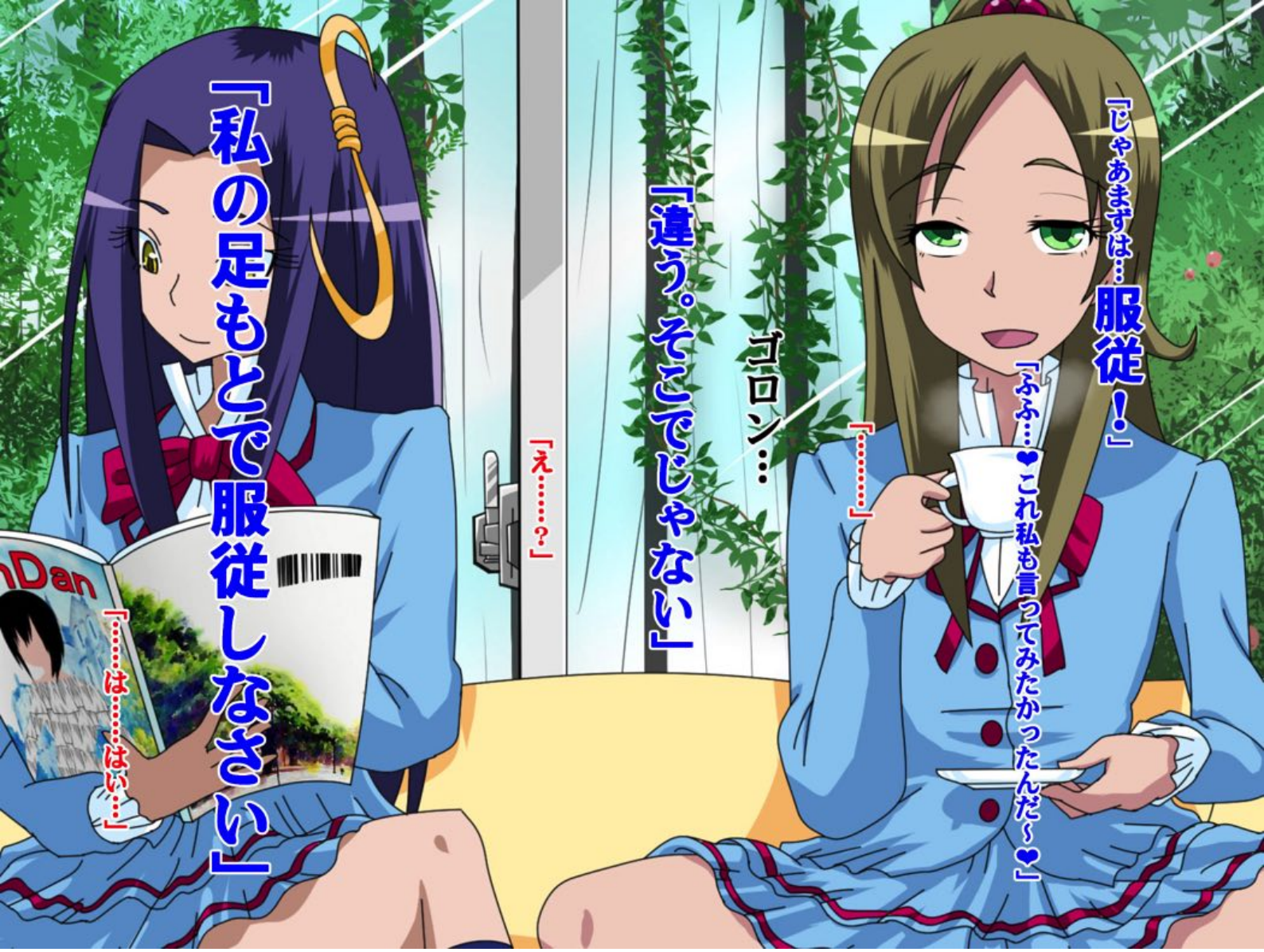
「クスクス…」

「アハハ」

ねえ…今の……
…というかこのニオイ…
誰かう○こ洩らしたーーー！
ブル…
ブル…
ブル…
「……ッ…」
誰だよクセーな！窓全開にしろー！
何食ってんだよ臭すぎだろー
ねえ…さっきの音…北条さんの方から…
しっ！
あっ…

ねぇねぇ…絶対あれ北条さんだよねぇ？
教室でう○こ洩らすとかどんだけよ…
あークサいクサい！クサすぎて授業に集中できない！
つか早くう○こ処理すればいいのに…
クスクス…バレてないと思ってるんでしょ？
ブル…
ブル…
ブル…
「おーい！授業再開するぞー！黒板に集中しろー！」
「は～～い」

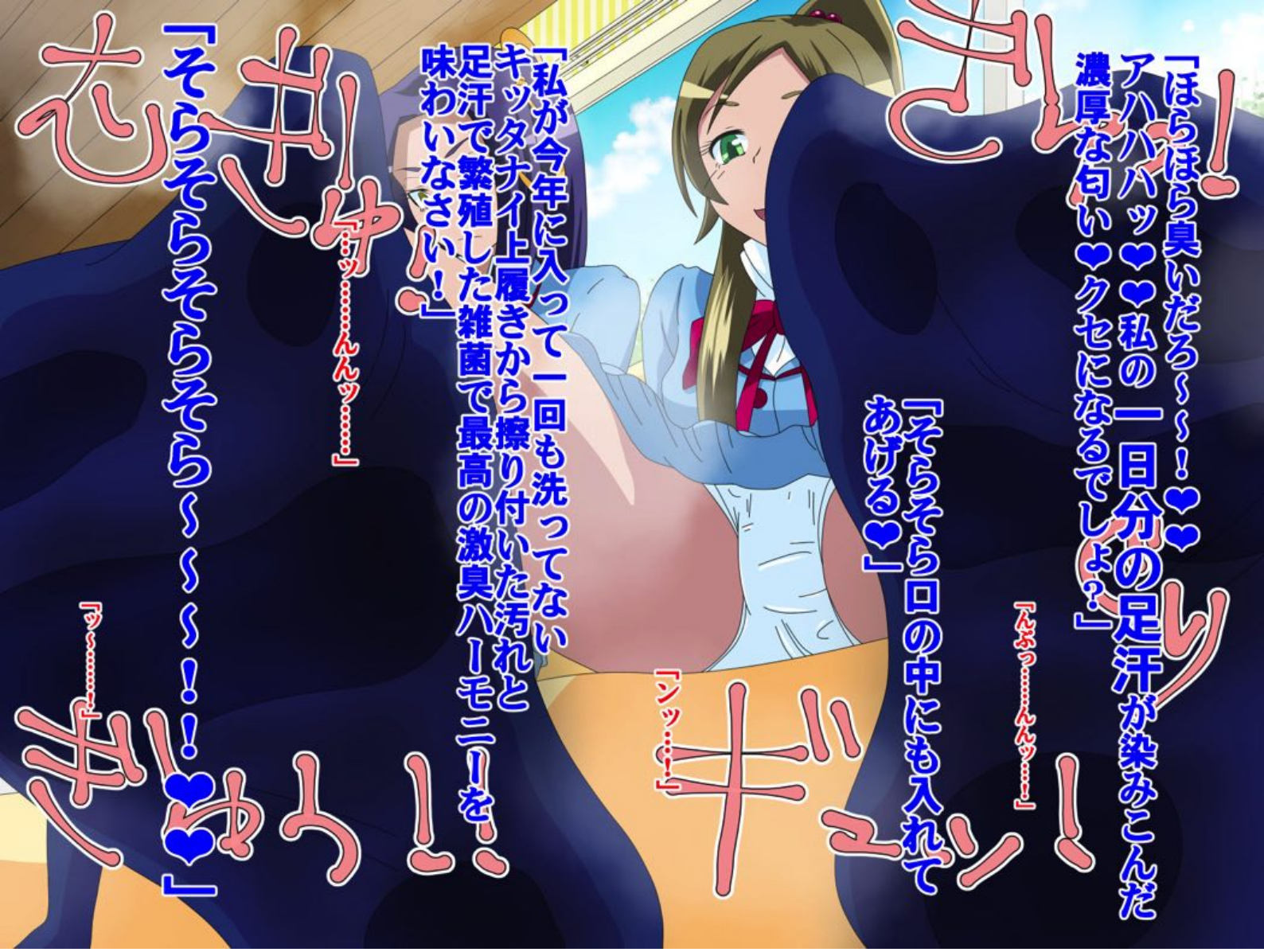

「アハハ！今日の響ったら最高！何の疑いもなく騙されてるんだから」
「うふふ❤すっごく面白かったわよ、あの時の北条さんの表情…プッ…！思い出したらまた笑えてきたわ」
「私が響なんかにケーキ作ってあげるわけないのに…」
「……っ…」
「ねえエレン。私も響のことすこし可愛がってあげてもいい？」
「いいわよ。私これ読んでるから」

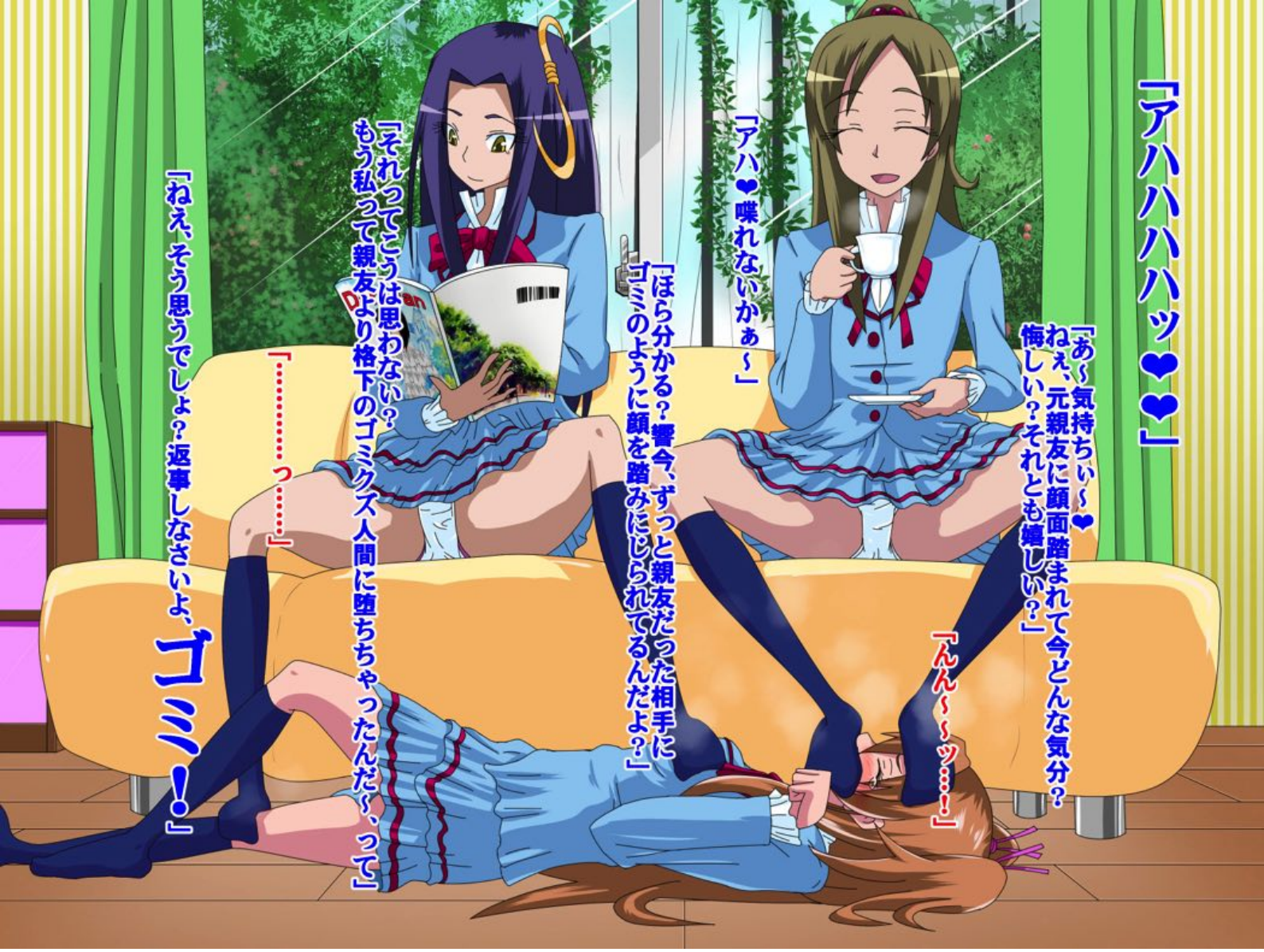

「じゃあまずは…服従！」
「ふふ…❤これ私も言ってみたかったんだ～❤」
「……」
ゴロン…
「違う。そこでじゃない」
「え……？」
「私の足もとで服従しなさい」
「……は……はい…」

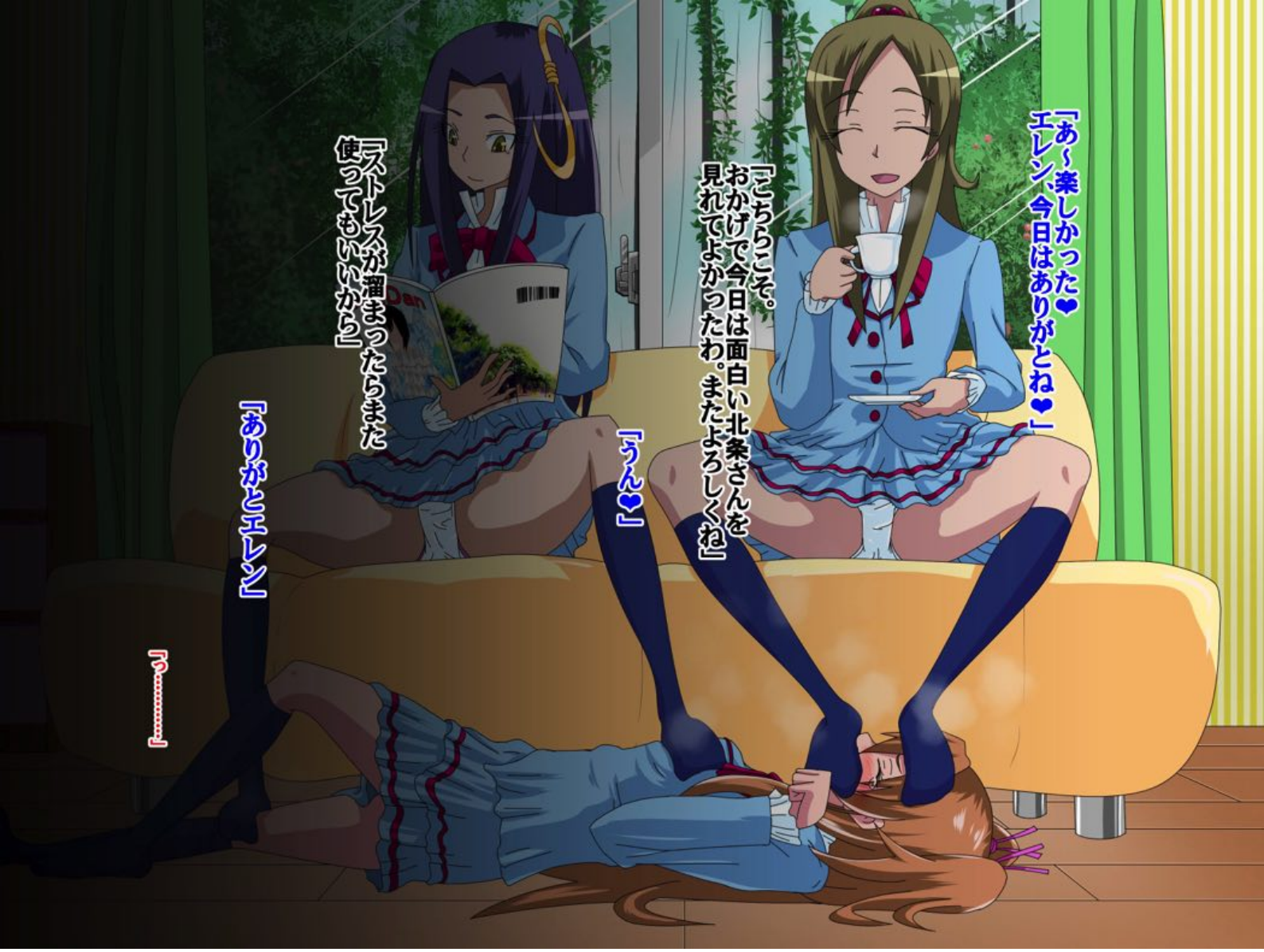
「ふふっ…♥」
むわんっ…
「ッ……!?」
「今日の一時間目は誰かさんのう○このせいで臭かった～…そのお返し！」
「そんな…！だってあれは奏が…！」
「気安く名前呼ばないでもらえる？」
「ッ～……」

「だって私、響みたいなウ〇コ女と友達だなんて思われたくないも～ん♥」
「アハハハハハ♥」
「くぅ…っ…」
「あれぇ～？泣いちゃった？ う〇ち洩らしたのそんなに恥ずかしかった？アハッ♥」
「や～い、ウ〇コ女～～～～♥」
「…ぐすッ……」
「も～…本当に泣き虫さんなんだからぁ～… しょうがないなぁ～」

ムギュッ
「んぷっ…!?」
「涙を拭いてあげるね❤」
ギュッ！ギュッ！
「んんっ…!!ん～～ッ！」
グリグリグリ…！
「アハハハハ！❤響超ブサイク！アハハ！
ほらほら！もっと泣きなよ！いっぱい拭いて
あげるから❤」
グリグリ…！
「ん～～ッ！！」


「ほらほら臭いだろ～～！♥♥
アハハハッ♥♥私の一日分の足汗が染みこんだ
濃厚な匂い♥クセになるでしょ？」
「んぶっ……んんッ……！」
「そらそら口の中にも入れてあげる♥」
「ンッ…！」
「私が今年に入って一回も洗ってない
キッタナイ上履きから擦り付いた汚れと
足汗で繁殖した雑菌で最高の激臭ハーモニーを
味わいなさい！」
「ッ……んんッ……」
「そらそらそらそら～～～！！♥」
「ッ～……！」
ぎゅう！！
ぎゅう！！
ぎゅう！！


「アハハハハッ❤❤」
「あ～気持ちぃ～❤ねぇ、元親友に顔面踏まれて今どんな気分？悔しい？それとも嬉しい？」
「んん～～ッ…！」
「アハ❤喋れないかぁ～」
「ほら分かる？響今、ずっと親友だった相手にゴミのように顔を踏みにじられてるんだよ？」
「それってこうは思わない？もう私って親友より格下のゴミクズ人間に堕ちちゃったんだ～、って」
「……っ……」
「ねえ、そう思うでしょ？返事しなさいよ、ゴミ！」


「あ～楽しかった♥
エレン、今日はありがとね♥」
「こちらこそ。
おかげで今日は面白い北条さんを
見れてよかったわ。またよろしくね」
「うん♥」
「ストレスが溜まったらまた
使ってもいいから」
「ありがとエレン」
「う……」

『じゃあ、屋上で待ってるから。
早く来ないと…制服破いちゃうからね？』
「アハハハハ！」
「響ちゃん全裸下校？」
…や…やだ……いくら放課後でも…誰か残ってたら…！
早く…早く屋上行かないと…！
早く行かないと…制服破られちゃう…！
もうこんなの嫌だよ…！おうち帰りたい…！
変態
露出狂
ブル
ブル…

でさーそいつが言うわけよー
アハハハ！
まずいッ…！
ウソ!?
誰か来る…！
に…逃げなきゃ…！
フィ
フィ

それでどうなったの？
で結局私が言ってやったわけ
あはははは
やばいやばいッ！！
こっち来んなぁーーッ！！

えっ…!?
ちょ…ちょなにあれ!?
きゃあっ!
えっ!?裸!?
タッ
タッ
タッ
タッ
バレたぁぁ~!
逃げないと…!
とにかく…どこかに逃げないと…!
嘘でしょ!?
裸で走ってる!?
へ…変態だ…
女…だよね…
あれ……

「すいぶん遅かったわねぇ」

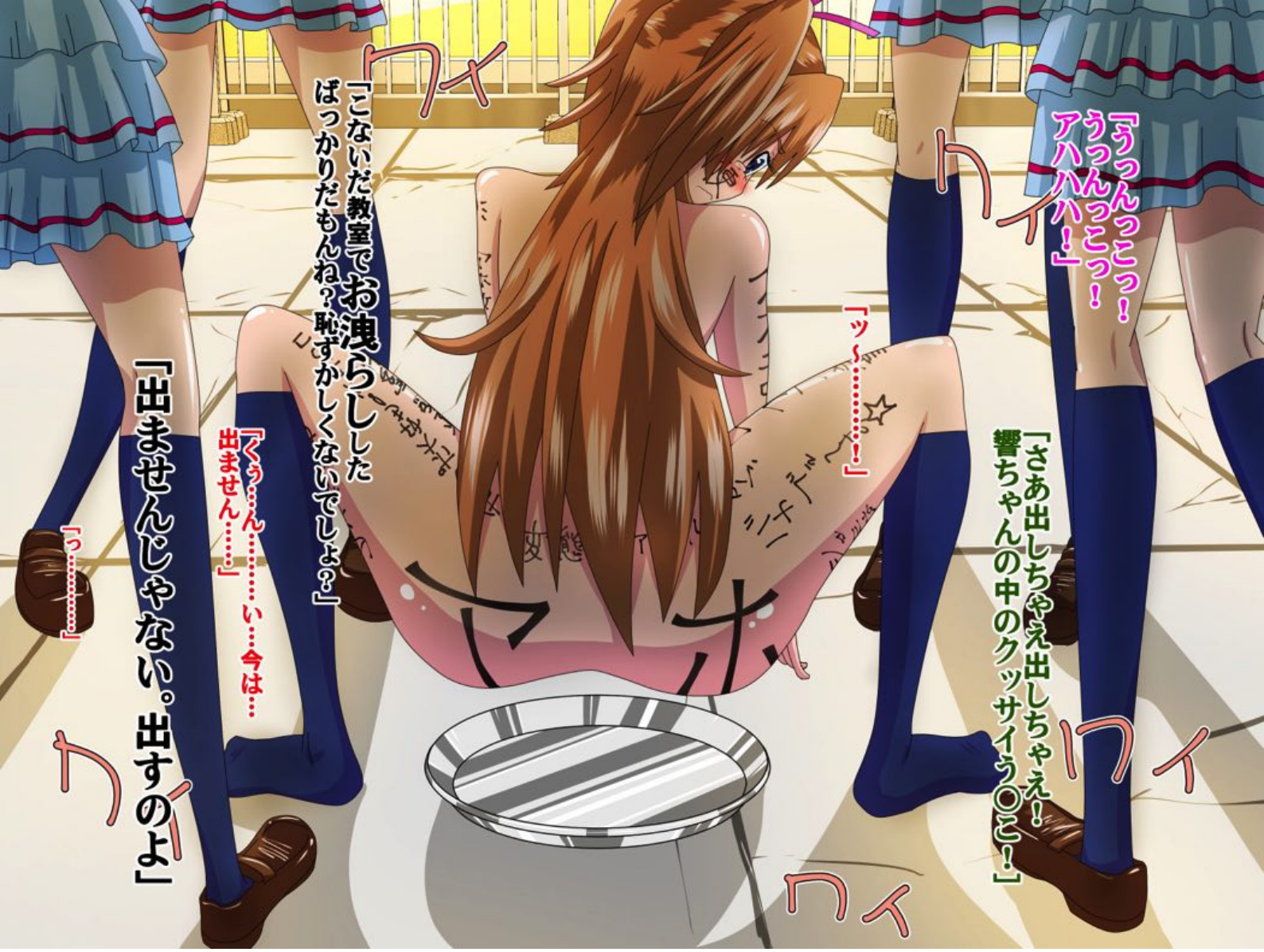
「ご…ごめんなさい…っ…！
途中で見つかりそうになってそれで…」

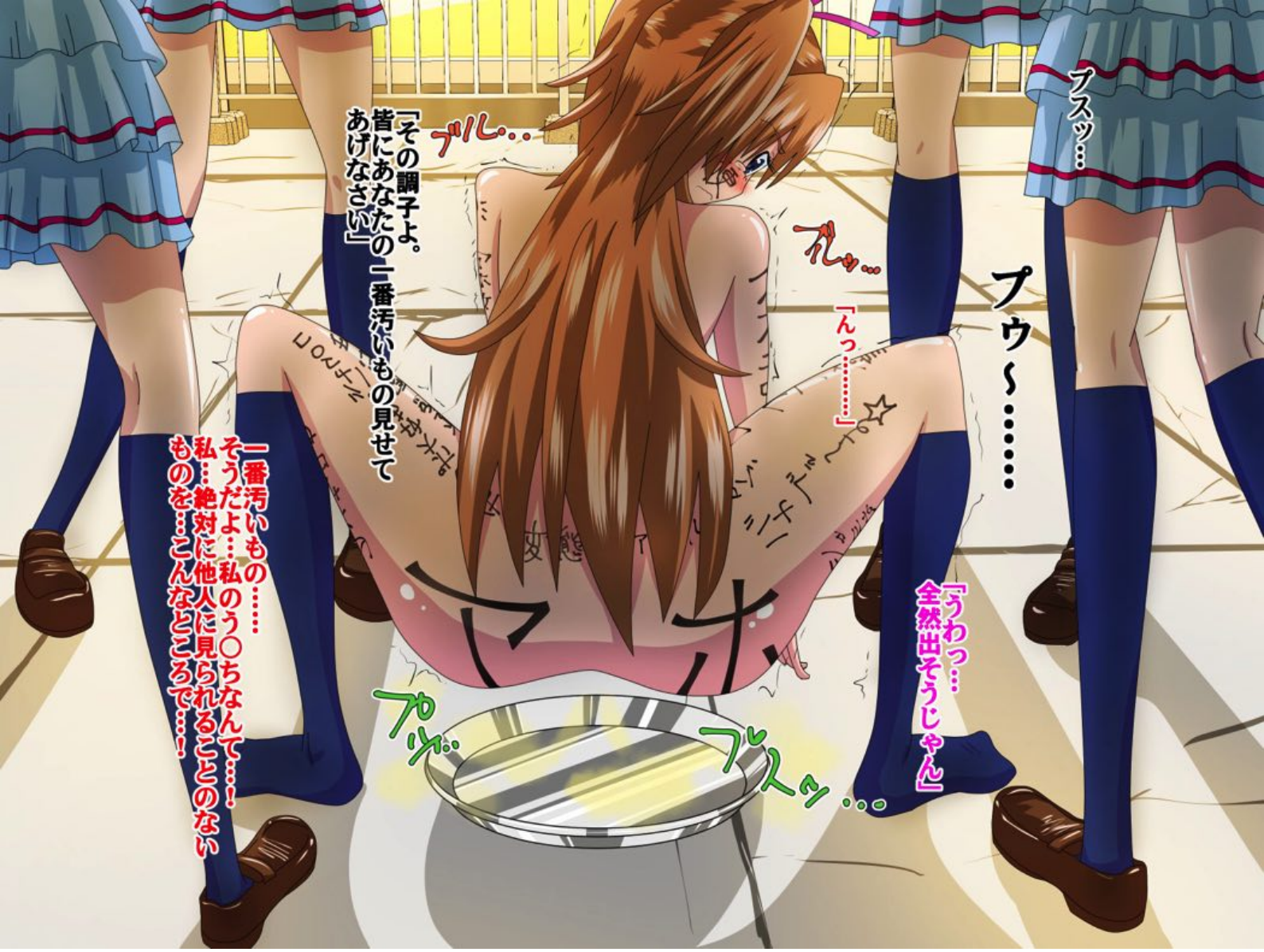
「理由なんて聞いてないの。
いかなる理由であろうとも私達を待たせた、
それがあなたの罪よ」

「……っ…」

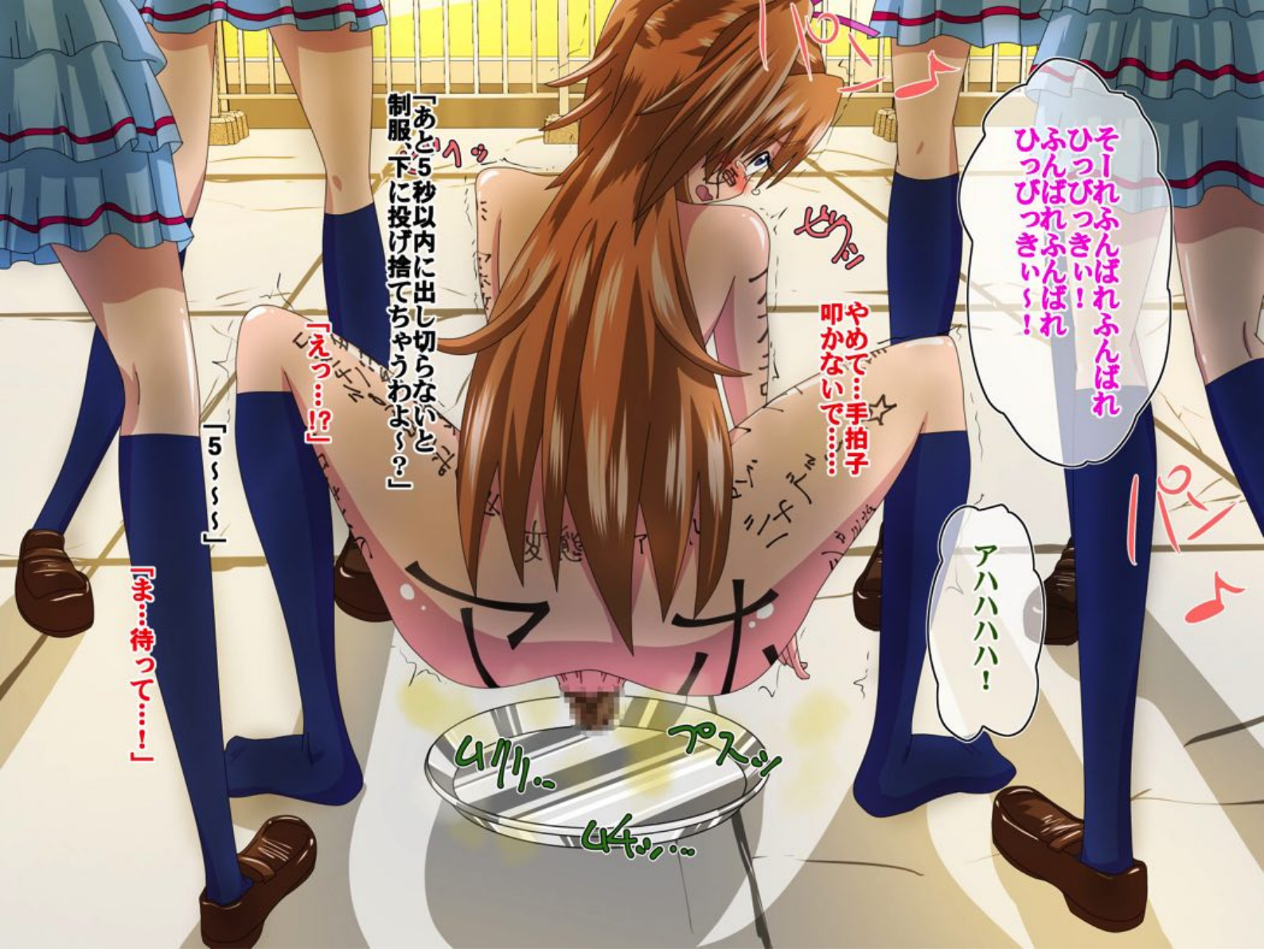
「罰として、これに排便なさい」

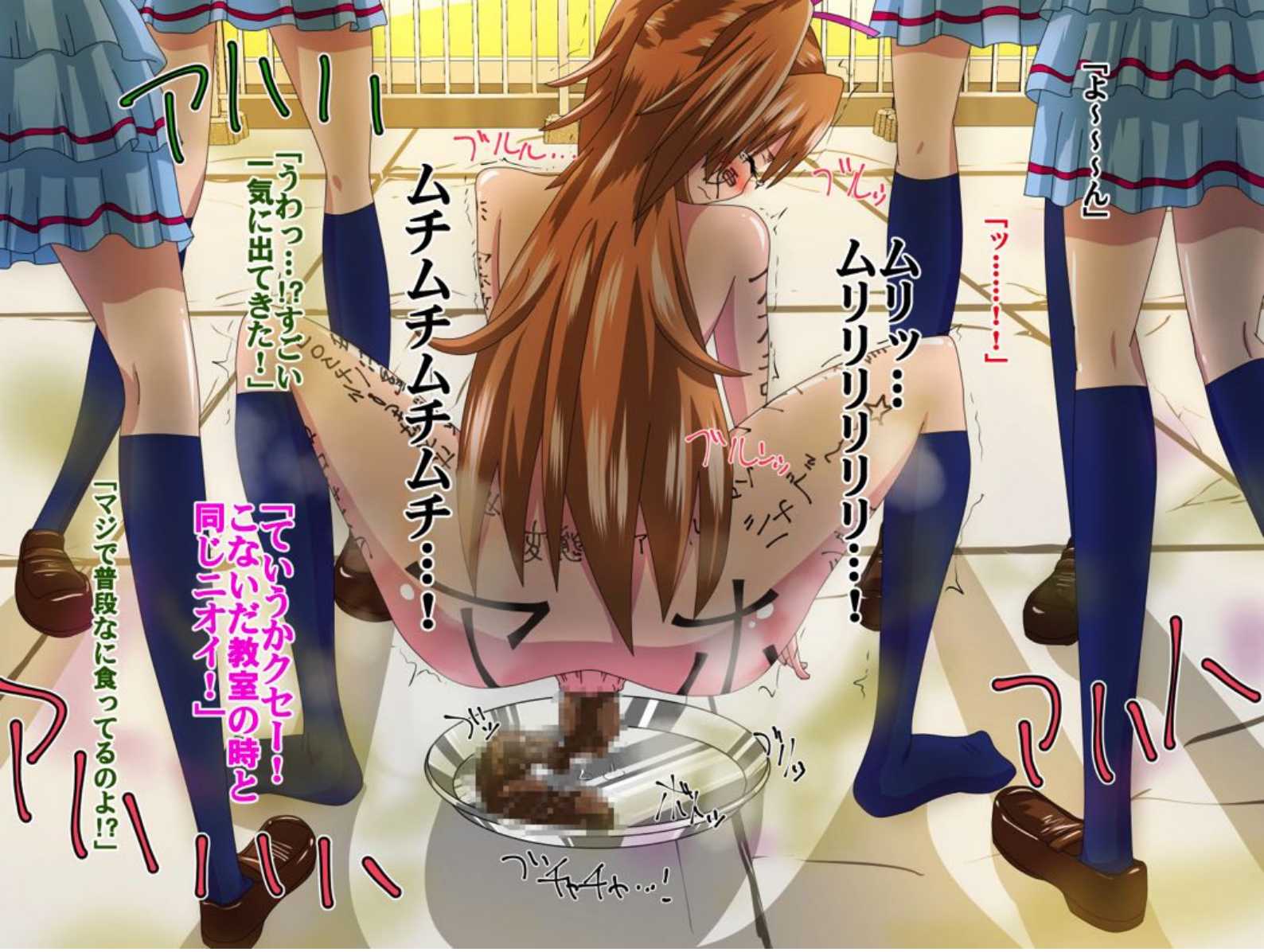
「え…ッ……」

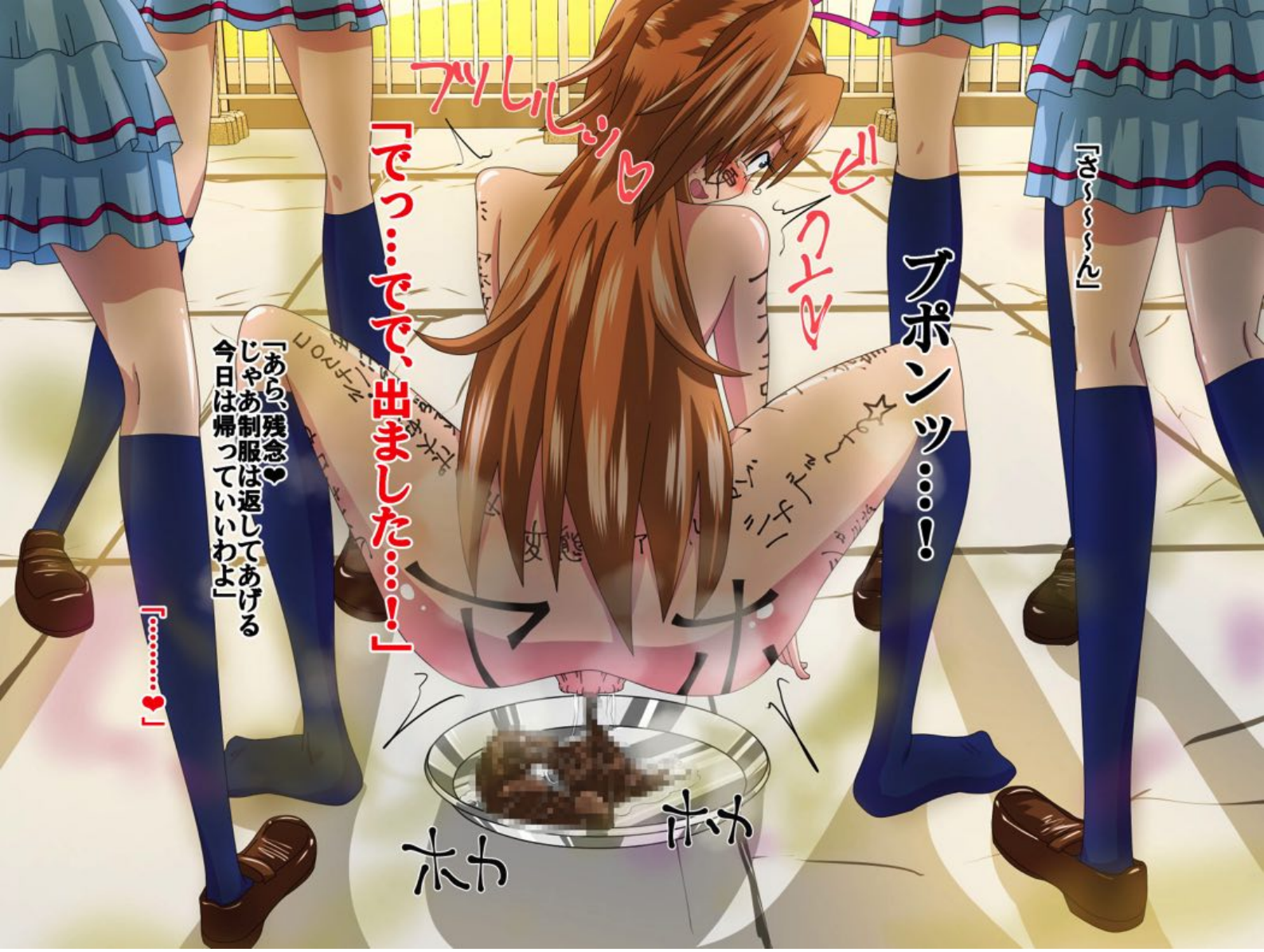

「うっんっこっ！うっんっこっ！アハハハ！」
「さあ出しちゃえ出しちゃえ！響ちゃんの中のクッサイう○こ！」
「ッ～……！」
「こないだ教室でお洩らししたばっかりだもんね？恥ずかしくないでしょ？」
「くぅ……ん……い…今は…出ません……」
「出ませんじゃない。出すのよ」
「っ……」


プスッ…
プゥ～……
「うわっ…全然出そうじゃん」
「んっ……」
ブルッ…
ブリッ…
「その調子よ。皆にあなたの一番汚いもの見せてあげなさい」
一番汚いもの……そうだよ…私のう○ちなんて…！私…絶対に他人に見られることのないものを…こんなところで…！
プリッ…
ブスッ…

「んっ…~~!」
ぶっ…
ブリリ…!
キャー!ほんとに出たぁ~!
全然出るんじゃん!
ムクリ…
プスッ
ムチッ…


そーれふんばれふんばれ
ひっぴっきぃ！
ふんばれふんばれ
ひっぴっきぃ～！
アハハハハ！
やめて…手拍子
叩かないで……
「あと5秒以内に出し切らないと
制服、下に投げ捨てちゃうわよ～？」
「えっ…!?」
「5～～～」
「ま…待って…！」
ムクリ…
プスッ
ムチッ…


『よ～～～ん』
「ッ……！！」
ブルッ
ブルッ
ムリッ…
ムリリリリリリ…！
ブルッ
ムチムチムチムチ…！
ブルル…
「うわっ…!?すごい
一気に出てきた！」
「ていうかクセー！
こないだ教室の時と
同じニオイ！」
「マジで普段なに食ってるのよ!?」
アハハ
アハハ
アハハ
ブリッ
ブリッ
ブリッ
ブリチャチャ…！


『さ～～～ん」
ブポンッ…！
ビュッ
ブリルルッ
「でっ…でで、出ました…！」
「あら、残念❤
じゃあ制服は返してあげる
今日は帰っていいわよ」
『……❤」
ホカ
ホカ

翌日…

わっ…なにあれ…!?

う…う○こ…!?

きゃあっ…!!

あの学生証って…

ある日の放課後…
いつものように響はエレンからトイレへ
呼び出しをくらう。

そこにはいつものメンバーはおらず、エレン
一人だけが待っていた。

「あの……皆は……？」

「もう帰ったわ」

「そ…そう…ですか……」

「私ね、あなたをいじめるの、もう飽きたし、
そろそろ終わりにしようと思ってるの」

「え…!?」

響の心に嬉しい驚きが湧きあがる。

「だからね、私がこの一年以上、どうして
あなたをいじめていたのか、その理由を教えて
あげる」

「……!?」

背中を向けて喋っていたエレンがくるりと
振り向いた。

「ッ……!?」

「さあ、記憶を返してあげる。思い出しなさい、真実を」
「ッ～～～…!?」
頭がクラクラして、景色が歪む。
な…なにこれ……意識が……
「ふふ……」
ガクン、
ガクン、

ドサッ……

響の意識は途切れ、気絶した。

2.「感染」

ドオン!!

「ふふ…所詮は新米プリキュアね…。
私が本気を出せばこのザマよ」
「う…っ……うぅ……」
「うぐっ……ぅ…」

「抵抗しようったって無駄よ。
その音符達はハーモニーパワーを吸収するわ」
「力を吸収した音符達はよけいにあなた達の
首を強く絞める…うふふ…」
「勝負アリ、ね」
ま…負けない…！
負けてたまるか…こんなところで…！
絶対に……絶対にあきらめたり
なんか…しない…ッ…！
「あらら？どんどん締め付けが
キツくなってるみたいだけど？
何かまだ頑張っちゃってるの？」

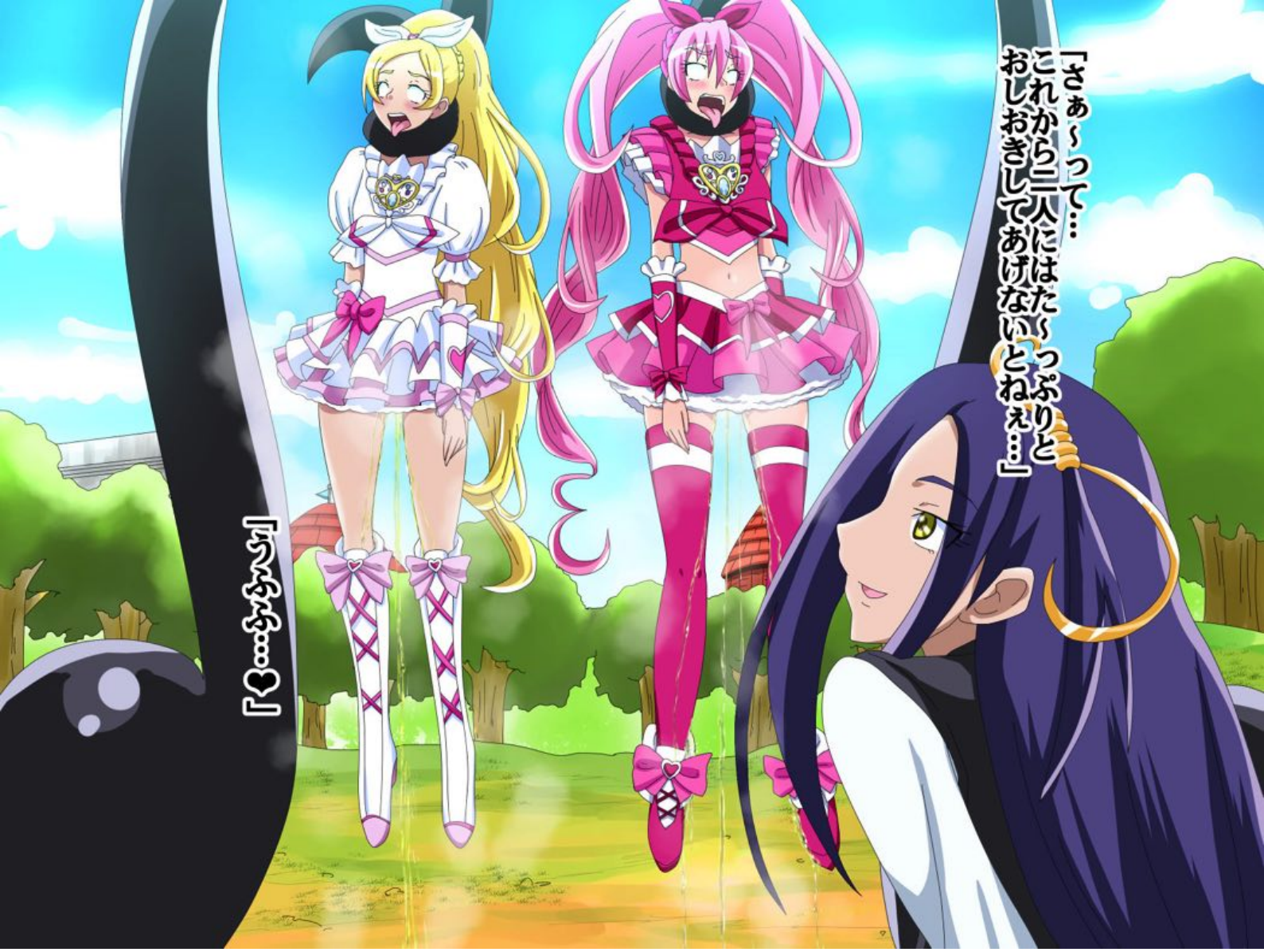
リズム……！
手をとって…！
メロディ…っ…だめ…っ…
もう身体が動かない……！
「ねえ？変身を解いたら
首ゆるめてあげるけどどうかしら？
だってそのままじゃあなた達
死んじゃうわよ？」

もう…だ……だめ…っ…
力が……
はぁっ…はぁっ……
し……死んじゃう……！
メロディ……っ
「ついにエネルギーが尽きたわね…
早くしないと本当に死んじゃうわよ？
というか、もっと恥ずかしいことに
なるかもね？」

あ……もう……
意識……が……
ッ……
「あーあ…せっかくチャンスを作ってあげたのに…残念ね。それじゃあここからじっくり眺めさせてもらおうかしら？」
「あなた達のおもらし姿」

「あ……あ……」
「……」
「ふふ…そろそろかしら…」

ジョロロロロロロ……
「ほーら言わんこっちゃない。意地張ってるから余計にブザマなことになるのよ」
チョロロロロロロ……


「さぁ～って…
これから二人にはた～っぷりと
おしおきしてあげないとねぇ…」
「うふふふ…♥」

「おはよう。ようやくお目覚めね」
「なっ…手足が縛られて身動きが…ここはどこ!?」
「マイナーランドの端っこ付近よ大丈夫、メフィスト様にはバレてないわ」
「なんで…」
「それはね、あなた達は私の手で壊してしまいたいからよ」

「あなた達はメフィスト様の部下になるんじゃダメなの」
「あなた達は私専用のしもべになるのよ」
「なっ…なによそれ…!?」
「あなた専用のしもべ…?」
「そ♥マイナーランドのしもべではなく
私が命じることに忠実に動く私だけのしもべ…
ずっと欲しかったんだぁ」
「誰があんたなんかのしもべになるもんですか！
寝言は寝て言えこのスットコドッコイ！」
「そうよ…！私達はあなたの拷問に負けたりなんか
しない…!!きっと耐え抜いてみせるわ！」
「まあ威勢のいいこと…。
なら、頑張って耐え抜いてみせなさい」

「まずはたっぷりとローションで湿らせておいて…」
どろ
どろ
「はふっ…!?❤冷たっ……」
ぴくっ
「ひぁッ…!?❤」
とろ
とろ
ぴくっ

「しっかりと解きほぐす❤」

ガチュ♡

ガチュ♡

「やっ…くふっ…！やめなさいよくすぐったい…！」

「あら可愛い反応❤大丈夫、すぐに気持ちよくなるわ」

「っ～……！」

「あら、白いほうは割りと慣れた反応ね…もしかして普段からやってるのかしら？」

ガチュ

ガチュ

「ッ!?やっ…やってないわよッ！」

「ぷっ…恥ずかしがらないの♪」

「ッ…～！！！」

「二人とも良い顔してきたわ。そらそら❤気持ち良いなら正直にそう言いなさい❤」
「あぅっ…!?そ…指なんか入れ…!?汚いからやめて…っ…!」
「汚くなんかないわよ。皆やってるわよねぇ？白いほうの…南野奏さん？」
「し、知りません…っ！」
「ふふ…可愛い反応。ねぇ？今プリキュアを辞めて私への服従を誓うならやめてあげるけど？どうする？」
「バ…バカにしないで！このくらいで簡単に諦めるほど私達は弱くないわ！」
「うふふ、そうこなくちゃ。じゃあ本気出してみようかな」
グイッ♡
グイッ♡
グイッ♡
グイッ♡
グイッ♡

一時間後…
「んくぅ…っ…❤んっ…❤はぁ…はぁ…❤」
「はぁ…❤はぁ…っ❤」
「ね？だいぶ気持ち良くなってきたでしょ？これがおなにいってやつよ、北条響さん❤」
「気持ちよくなんか…ないっ…！」
「強がっちゃってぇー、ほれほれ❤」
「はひっ!?❤❤」
「はぁ…❤はぁ…❤メロディ……耐えへ…！イっひゃ…らめ…！」
「へ…？ど…どこに…？はぁ…❤はぁ…❤」
フ…くくく…！
ビクッ
ビクッ♡
ビクッ
ビクッ♡

「ハァ…!❤ハァ…!❤もう…だめ…!おかしくなりそう…!❤はぁ~❤あぁぁ~~~ッ❤❤」
「メロディ…ッ!だ、だめッ…!ハァ…!ハァ…!❤ガマ…んっ❤…はぁぁ~ッ❤❤」
「いいのよ響、恐がらないで。甘い快感に身をゆだねるの」
「いやッ…いや…!❤ハァハァ…ッ❤あぁぁ~ッ…!でも…もうだめぇ…ッ~~~❤❤」
「もうスパートかけちゃお❤」
ほれほれほれほれほれっ❤❤❤」
グチュグチュグチュグチュ!
「おぉぉぉ

「はうううッ！！！！？❤❤❤」
ビクッ❤
「っ～～～～！！！！！！❤❤❤」
ビクンッ❤

「うわぁ…さすがね！二人とも同時に絶頂を迎えたわ！息ぴったりじゃない♪」

ほぇ…？ぜっちょう……？
なんだかわかんないけど……
すごい……私……あたままっしろ……

「ひゅー……ひゅー……」

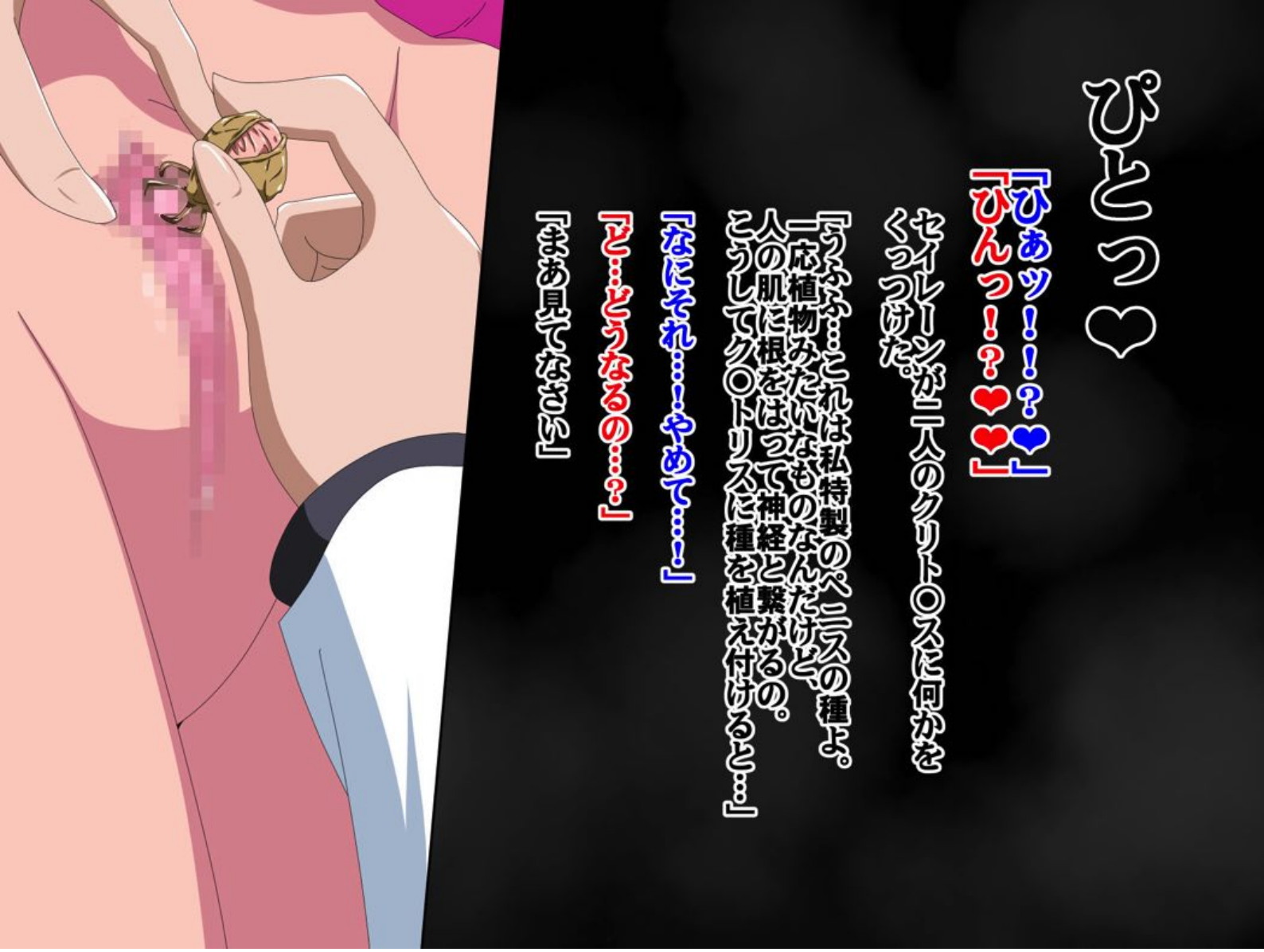
「わらひ…い…イってなんか…いまひぇん…から…っ……」

「あら？じゃあもう一時間ほどやってあげようかしら？」

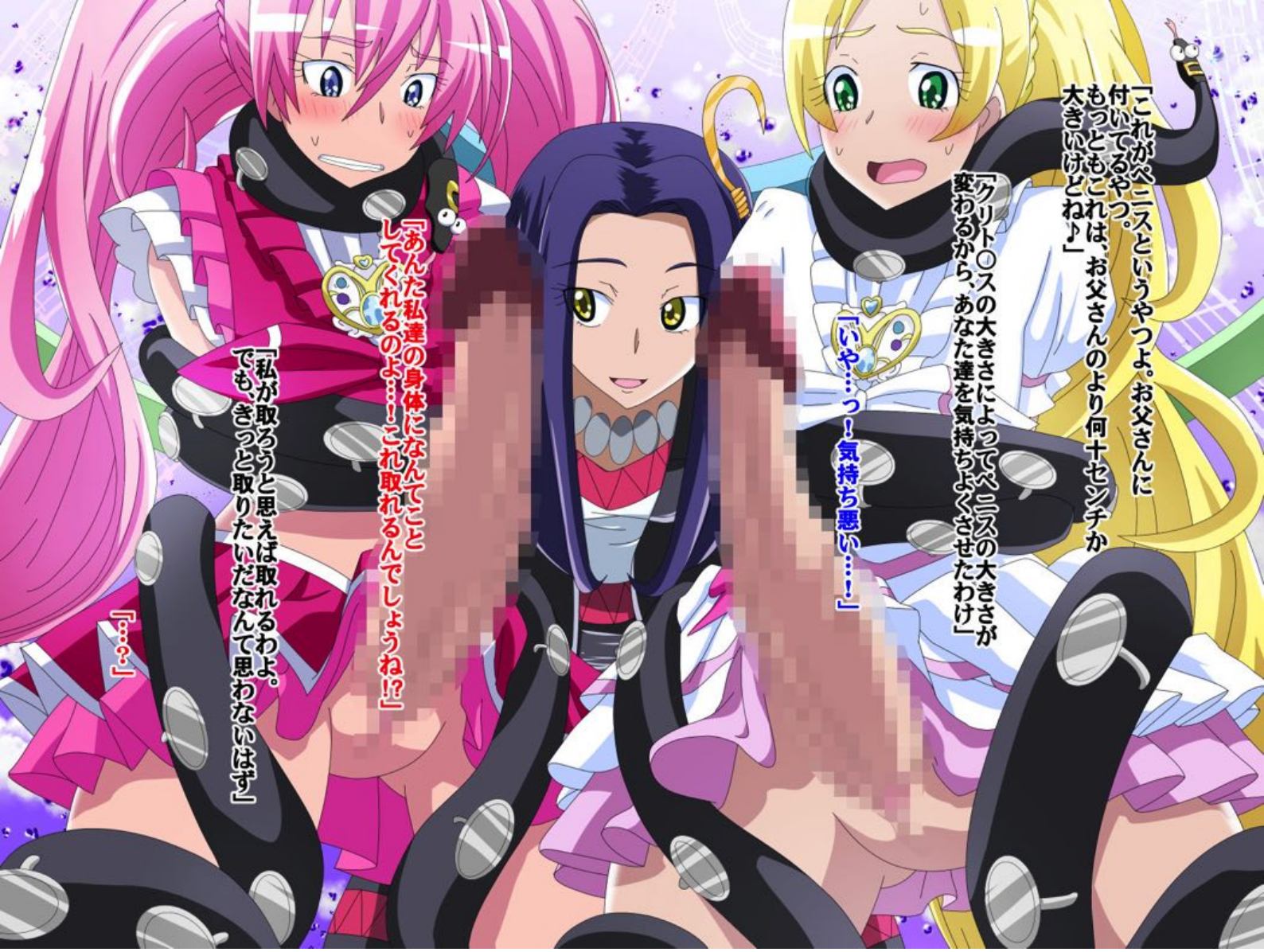
「…ッ～！」

「嘘よ。私はあなた達を気持ち良くしてあげることが目的じゃあないの」

「ここからが始まりよ！」


ぴとっ❤
「ひぁッ！！？❤」
「ひんっ！？❤❤」
セイレーンが二人のクリト○スに何かをくっつけた。
「うふふ…これは私特製のペニスの種よ。一応植物みたいなものなんだけど、人の肌に根をはって神経と繋がるの。こうしてク○トリスに種を植え付けると…」
「なにそれ…！やめて…！」
「ど…どうなるの…？」
「まあ見てなさい」

ムクムクムクムク!
「ひっ…!?ひやぁぁぁぁぁぁッ!!!??
なにこれえええええええッ!!!!!??」
ボキン!!
「ひいいいいいいいいッ!!!!??????」
「はい、クリチ○ポの完成♥」


「これがペニスというやつよ。お父さんに付いてるやつ。もっともこれは、お父さんのより何十センチか大きいけどね♪」
「クリト○スの大きさによってペニスの大きさが変わるから、あなた達を気持ちよくさせたわけ」
「いや…っ！気持ち悪い…！」
「あんた私達の身体になんてことしてくれるのよ…！これ取れるんでしょうね!?」
「私が取ろうと思えば取れるわよ。でも、きっと取りたいだなんて思わないはず」
「…？」

「ほぉれ❤」
「はうっ!?❤」
びくんっ❤
びくっ❤
「ひっ…❤」
「どう？気持ち良いでしょ？これがおちん〇んの感覚よ」
「やめ…！手動かさないで…！」
しゅっ♡
しゅっ♡
しゅっ♡
しゅっ♡

「ほれほれほれほれ❤」
「うほぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ～～！！？❤❤❤」
なにこれ…！？
気持ち良い…！？頭蕩けちゃう…！！！？❤❤
「ほえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！？❤❤❤
ほぉオおぉぉぉぉぉぉッ～～！！！❤❤❤」
しゅ…しゅごっ……！❤
男子ってこんな……おぉぉぉぉぉッ～～！！？？❤
「よかった。お気に召してくれたようね」

「さっきのローションを垂らせば
よりいっそう快感が増すわ」

ドロ

「ひぁっ！！？？？♥♥♥」

「あひんッ！！？？？？♥♥♥」

ドロ

「さあいくわよ！
良い声で鳴きなさい！」

「そらっ！イけイけ！♥」
グチュグチュグチュグチュ！
「きひっ！！？ーーきひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ！！？ーーーー」
「うっはああssssン！！？？？ーーーー」
なななな、なにこれえええええええええッ！？？？？♥
グチュグチュグチュグチュ！

「ひぎっ❤ひぎっ❤ひぎいいいいッ❤❤❤ほぉぉおおっ!!?❤ほぉぉおぉおおおぉおぉッ!!?❤❤❤」
ひゅごぃ〜〜ッ!?❤これが男子の快感!!?ひゅごぎゅぎるぅぅぅぅぅぅッ〜❤❤❤頭の中が蕩けちゃう〜〜ッ!!?❤❤もうだめぇぇぇぇぇぇぇぇッ❤❤❤
「想像以上に良い顔だわ、奏さん❤いいわ、その顔に免じてイクことを許可してあげる❤」
「だれがイくもんでしゅかぁぁぁぁぁぁぁっ❤ひょぉぉおおおぉッ〜!❤❤」
やばい!❤❤やばすぎるぅぅ!!?❤❤頭ぶっ飛んでなにも考えられないよぉぉおぉ〜〜!❤❤
「せぇっ❤せぇっ❤おぉぉぉぉっ!!?❤おほぉぉおおおぉぉっ!!❤ほぉぉおぉおおぉッ!!❤」
「ほら、北条さんも、イっていいわよ」
「メロディッ…!イっちゃらめっ!イっちゃらめやよぉぉお〜ッ!!?❤」
「だから…行くって…どこにいいいいッ!!??❤❤」

「ってわたしがイくっ…♥
ああああああああああああッ♥♥♥

「お……お……♥」
「ヒュー……♥ヒュー……♥」
ビクッ…
ビクッ…
ビクッ…
ビクッ…
「ぁ……♥……ぁ……♥」
「気持ちよかったでしょ？これが男の子ち○ぽの快感ってやつ♥」
「でもまだ終わらないわよ♥」

シコシコシコシコシコシコ！

「おおおおおおおおおおおおおお！？？♥♥」

「このおち◎ぽは普通の男子のそれとはワケが違うの」

「あああああああああああッ！！！？♥♥♥」

「男の子は通常は射精したら興奮と勃起がおさまるものだけど、このち◎ぽは射精しても終わりじゃないわ。身体のたんぱく質や水分をすばやく精液に変換して、干からびるまで永遠に射精し続けることができる。おまけに射精後の敏感期もないわ」

「つまり24時間発情しっぱなしのオス猿みたいになるってこと♥」

「ね？すごいでしょ？♥でも、あんまりやりすぎると睡眠不足になっちゃうゾ♪」

シコシコシコシコシコシコシコシコシコシコ！
「へっ!!?ーへえええええええっーーー
はへえええええええええええッ!!?ーーー」
「んふっ…
すっかり虜ね…」
「ほへっほへえええええええーー
ほおおおおおおおおおおおおおおおッ$ーーー」
シコシコシコシコシコシコシコシコシコシコ！

ビュルッ♥
「おほっ！？♥♥」
ビュッ♥
「あひんッ！？♥♥♥」

「ひ……ひ…ひひ……❤」
ピクッ…
ピク…
「二人とも、とっても可愛かったわよ❤
でもまだこの拷問は終わらないわ」
「い……い……ひっ……❤」
ピク…
「あと99回抜きます❤」
「ひい……っ…」
「ひゃ…ひゃめへ……」

シコシコシコシコシコ！

「おあぁぁぁぁぁッ！！♥♥♥」

「ひぃっ！！？♥♥♥」

ビュルルルルルルッ！♥

「はい一回目♥次っ♥」

「いやッ……！」

シコシコシコシコシコシコシコシコ！

「うひぃぃぃぃぃぃッ♥♥♥」

「はひぃぃぃぃッ！？♥♥」

ビュルルルルルッ！♥♥

「二回♥次行ってみよ～♥」

「もう許しひてぇぇぇぇ……！」

「ダ～メ♥」

シコシコシコシコ！

ビュルッ！♥♥

「ううっ～～！？♥♥」

シコシコシコシコ！

ビュルルルルッ！♥♥

「う～～～～～～！♥♥」

「まだまだいくよ～♥」

「……っ～」

「だ～ぁ！？♥」

「おめでとう、百回達成よ❤」

ビクッ…

「お……お……お……」

ビクッ…

「あ……あ……あ……」

ビクッ…

ドロ…

「どう？こんなに射精したのにまだ
おち○ぽビンビンのままなんてすごいと思わない？」

「これだけ射精してもあなた達はこう思ってるはず…。
もっとおち○ぽシゴいてほしいって」

「でもさすがの私ももう疲れたわ」

「今日はこれにて終了♪
あなた達を解放してあげる❤」

「さ　あとはこれまで通りプリキュアを
続けなさい❤」

「ふふふ…」

ピク…

ピク…

ピクッ…

ピク

二人は気がつくとプリキュアの変身が解けた状態でもといた場所に横たわっていた。

「奏…大丈夫…？」

「…う…うん…なんとか…」

全身精液でベチョベチョだった。

「ひっ…!?これ…！」

「～ッ…！」

二人の股間には、さきほど付けられた大きなペニスがあった…。

翌日…。

セイレーンに敗れたものの、町は平穏で何も被害はなかった。

唯一の被害は、二人の股間にペニスが生えてしまったことだけだ。

「おはよう響っ！」

「えっ…!?あっ、うん！おはよう！」

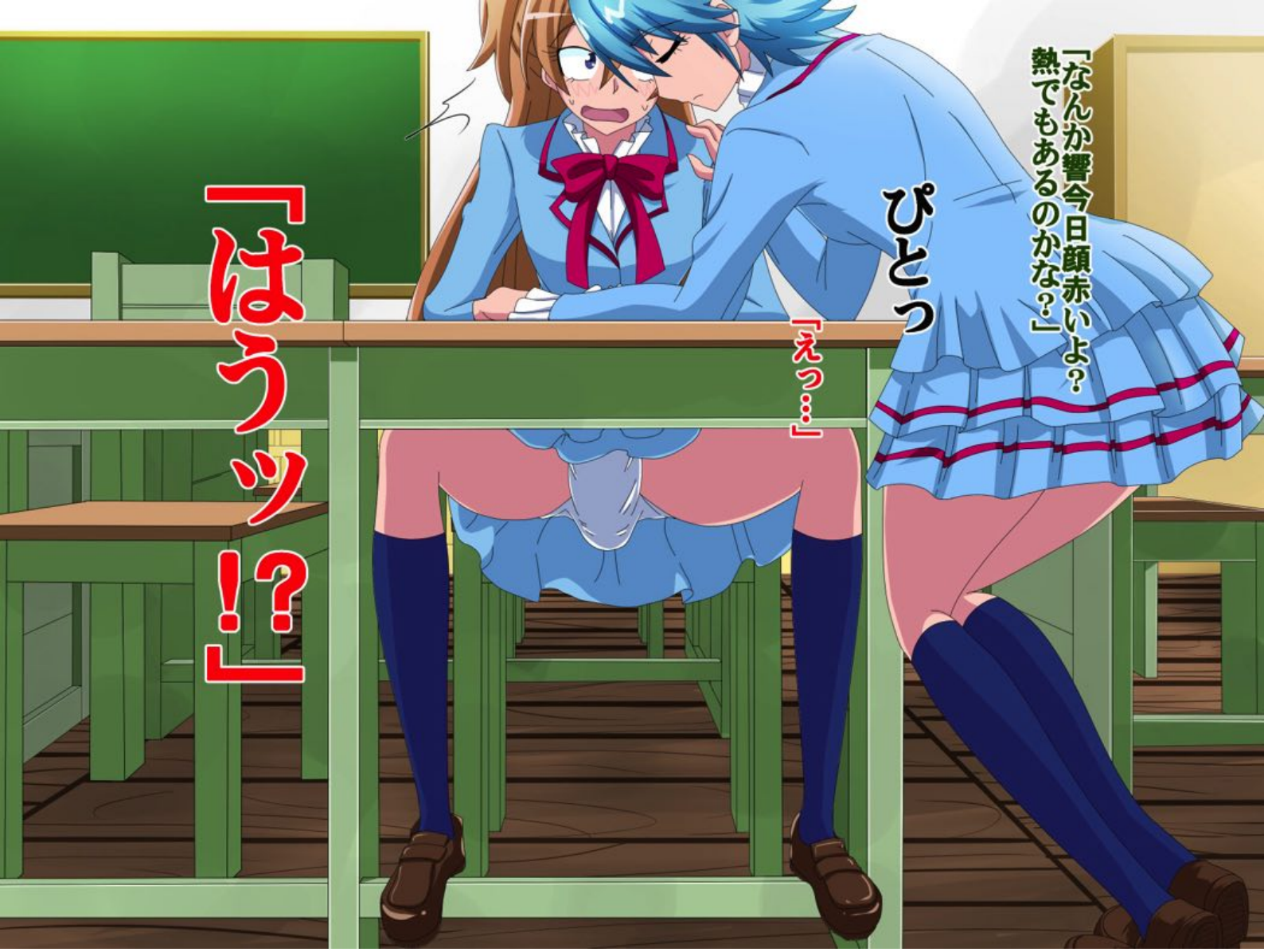
クラスメイトが来て、響はとっさに股間を押さえる。

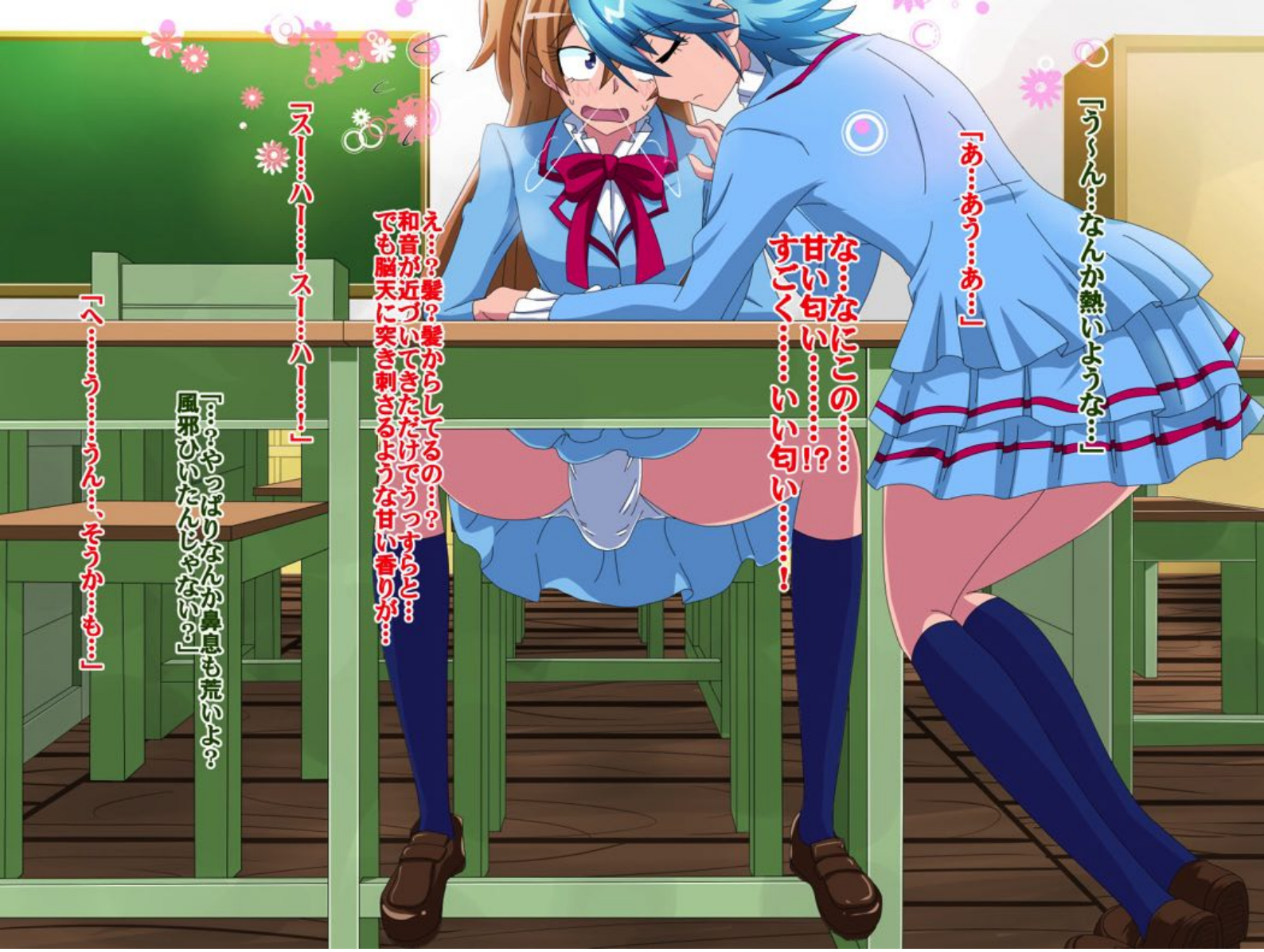
響のイチモツは、平常時でもパンツに収めることが難しかった。

あまりに大きすぎて、お尻の方まで捻じ曲げて収めないといけない状態だ。

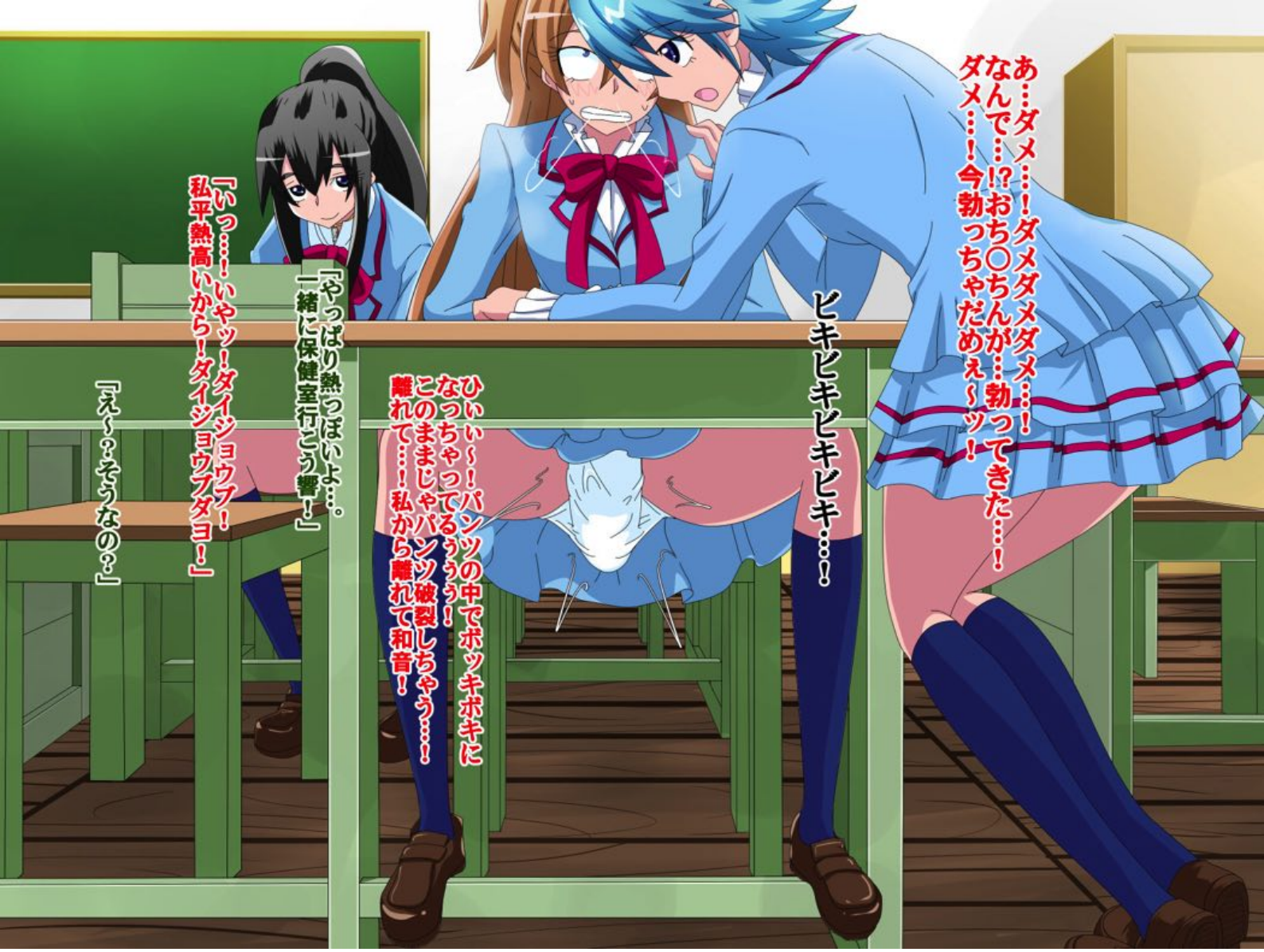
しかし、もし一度勃起させてしまうと、もうパンツには収まらない。

昨日の夜はずっと勃起が止まらなかった。
何度射精しても、三秒もすればまた興奮してきて、
激しい…気の狂いそうなほどの、ペニスをシゴきたい
欲求に駆られる…。
「うぅ……」
そしてそれは今も同じだった。
シゴきたい…シゴきたい…シゴきたい…！
その欲求は股間から脳髄に染み渡るように激しく燃え上がる。
下腹部にドロリとした熱い欲望がうずまき、
なぜか唾液が溢れてくる。
「（だめ…！ここは学校…！今日家に帰るまでは…！）」

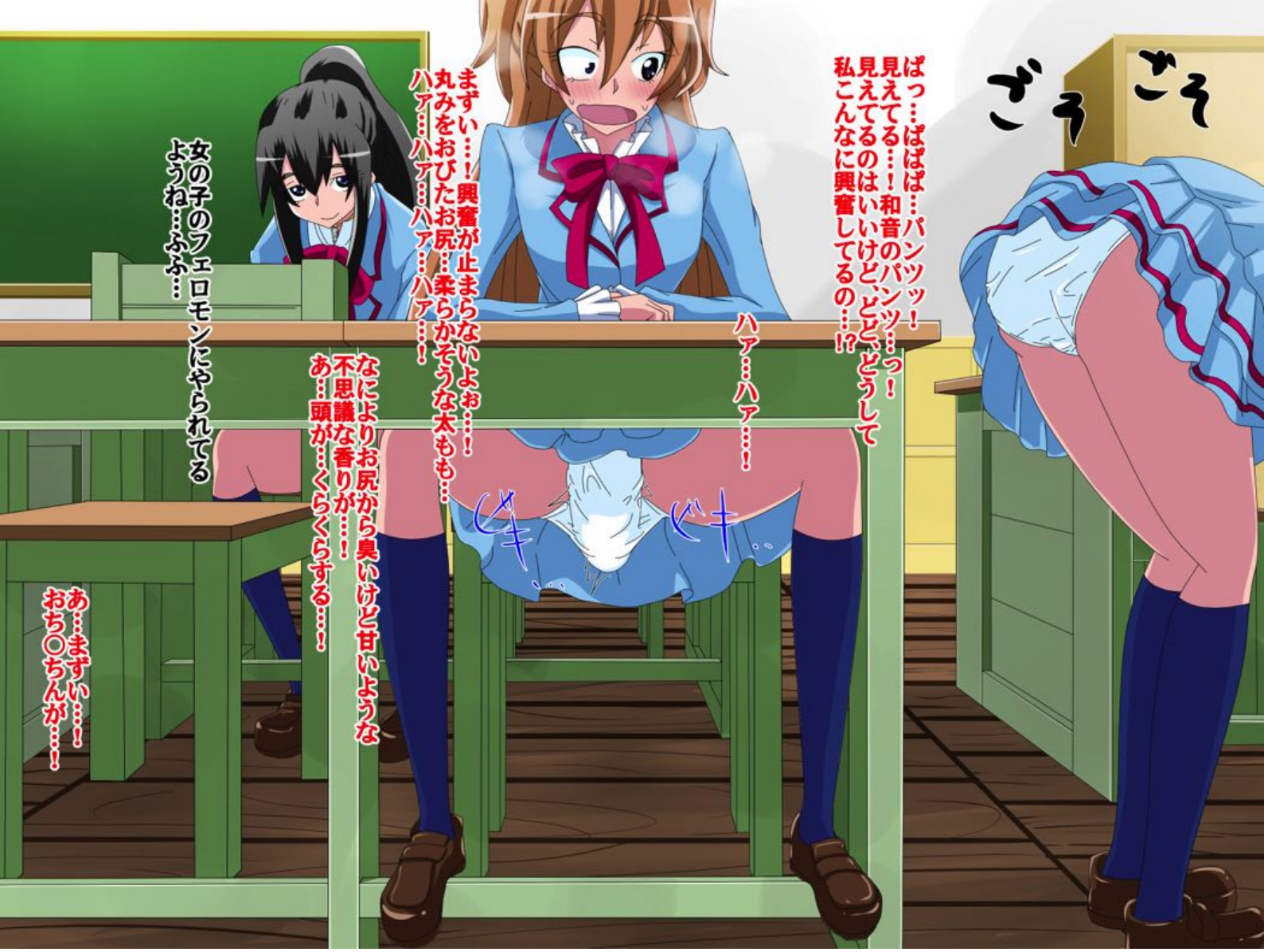

「なんか響今日顔赤いよ？熱でもあるのかな？」
ぴとっ
「えっ…」
「はうッ!?」


「う～ん…なんか熱いような…」
「あ…あう…あ…」
な…なにこの……甘い匂い……!?すごく……いい匂い……!
え…?髪?髪からしてるの…?和音が近づいてきただけでうっすらと…でも脳天に突き刺さるような甘い香りが…
「スー…ハー……!スー…ハー……!」
「…?やっぱりなんか鼻息も荒いよ?風邪ひいたんじゃない?」
「へ……う……うん…、そうか…も…」

うふふ…昨日あれだけ射精したおかげでペニスの種はしっかりと根付いたようね
スーッ
ハーッ
スーッ
ハーッ
ペニスの根っこは神経をたどって脳へと辿り着く…そして男性特有のホルモンを脳内で出して男の子と同じように女の子に発情してしまうようになるのよ
うふふ…同性相手に発情なさい！変態ち○ぽ女！


あ…ダメ…！ダメダメダメ…！
なんで…!?おち○ちんが…勃ってきた…！
ダメ…！今勃っちゃだめぇ～ッ！
ビキビキビキビキ…！
ひぃぃ～！パンツの中でボッキボキに
なっちゃってるぅぅ！
このままじゃパンツ破裂しちゃう…！
離れて…！私から離れて和音！
「やっぱり熱っぽいよ…。
一緒に保健室行こう響！」
「いっ…！いやッ！ダイジョウブ！
私平熱高いから！ダイジョウブダヨ！」
「え～？そうなの？」

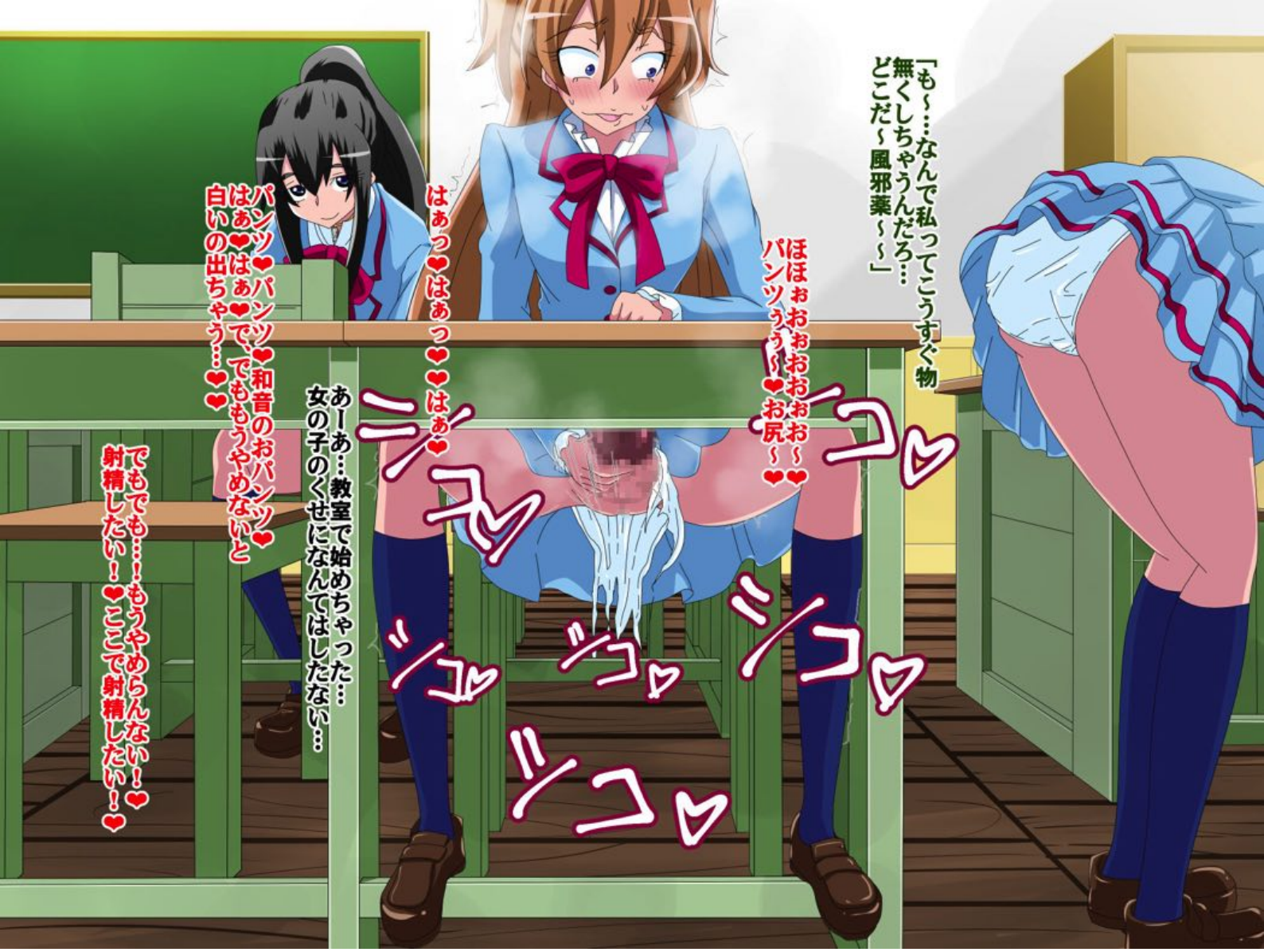
「あっ、そういえばカバンに風邪薬入ってたはず。え～っとたしか…」
ごそごそ
ビクッ
「!?」

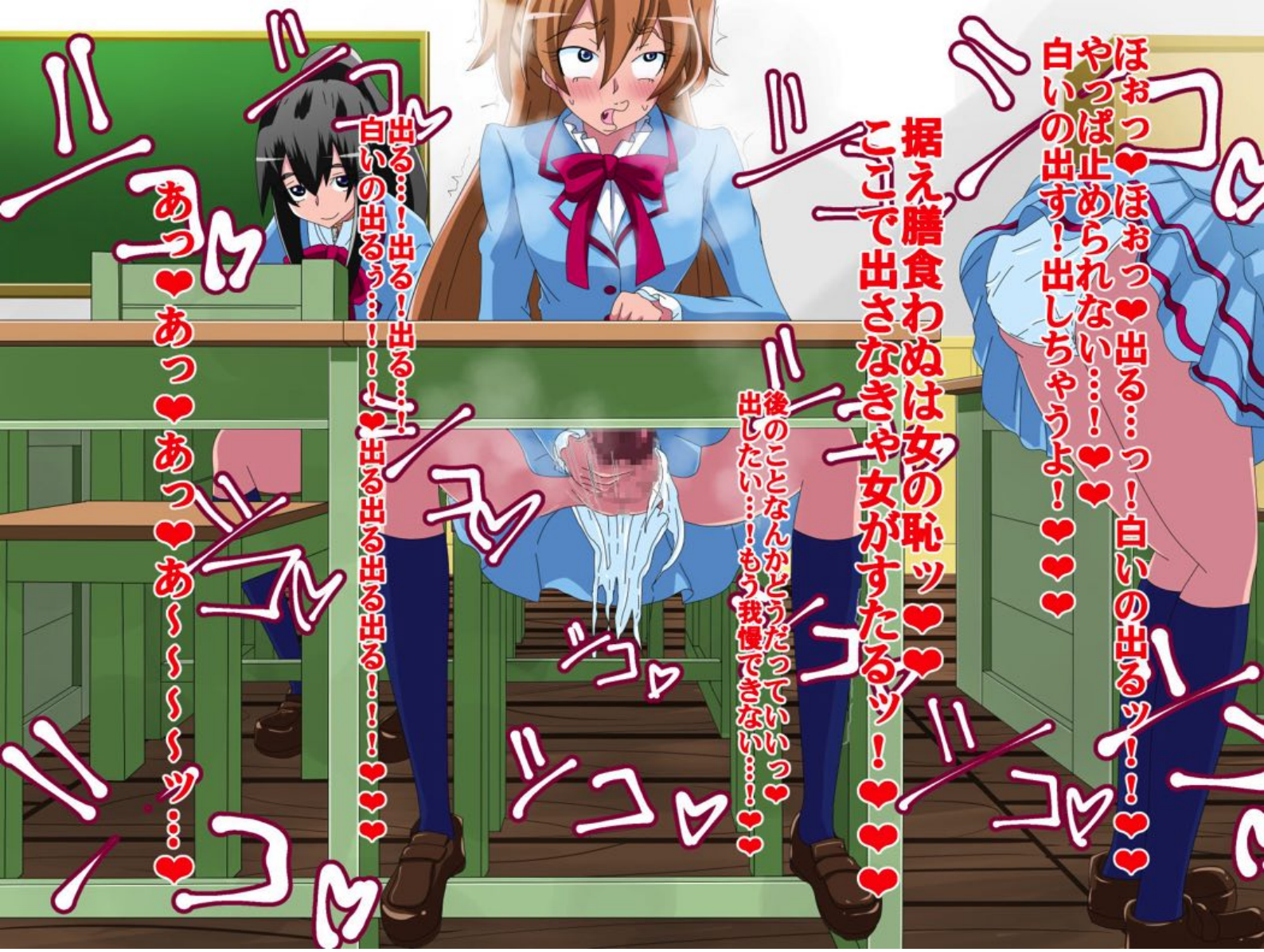

ぱっ…ぱぱぱ…パンツッ！
見えてる…！和音のパンツ…っ！
見えてるのはいいけど、どど、どうして
私こんなに興奮してるの…!?
ハァ…ハァ…！
ビキ…ビキ…
まずい…！興奮が止まらないよぉ…！
丸みをおびたお尻…柔らかそうな太もも…
ハァ…ハァ…ハァ…ハァ…！
なによりお尻から臭いけど甘いような
不思議な香りが…！
あ…頭が…くらくらする…！
女の子のフェロモンにやられてる
ようね…ふふ…
あ…まずい…！
おち○ちんが…！
ごそ
ごそ

バッツンッ！
あああっ～！！！
「クスッ…」

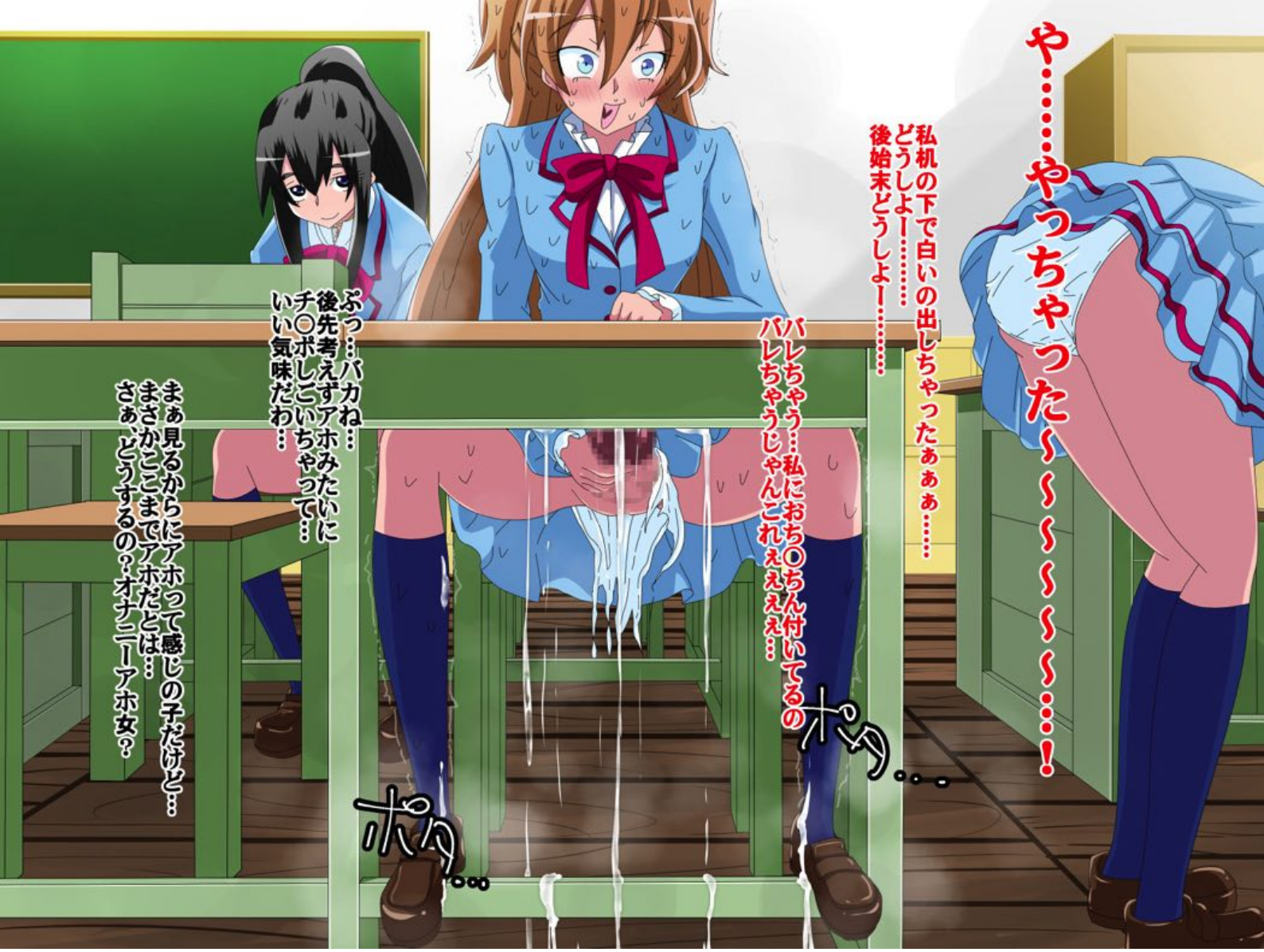
「はぁ…っ！はぁ…っ！」
まずいまずいまずい…！
パンツ破けちゃった…！
ふぅ…！ふぅ…！だめっ…もう…！
これじゃ席から動けない…！
助けて奏…！奏助けてぇぇぇぇっ！
アハハハ！苦しんでる苦しんでる！
男の子の抑えられない汚れた劣情…
存分に苦しみなさい！
ふぅっ…！ふぅっ…！
はぁ…！はぁ…！❤

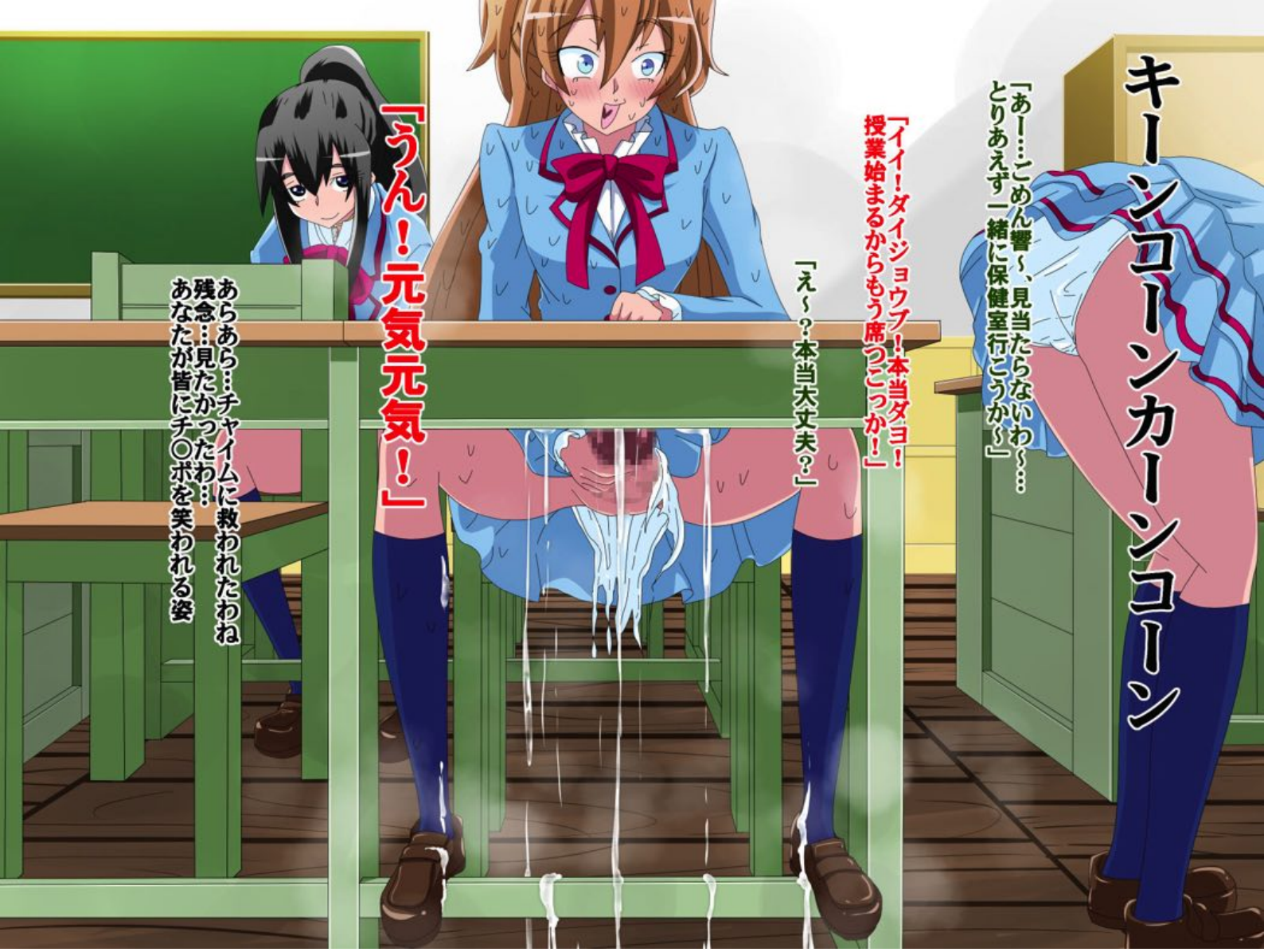
「あっれ~？おかしいなぁ…
確かカバンの中に入れてたはずなんだけどなぁ…」
「ふへっ…ふへへ…」
もうダメ…！
ちょっとだけ…
ちょっと触るだけ…
イジイジ…
そうだよ…！白いの出るまでやらなきゃ
いいんだよ…！
ちょっと触るだけなら今でもできる…！
シコシコシコシコ…

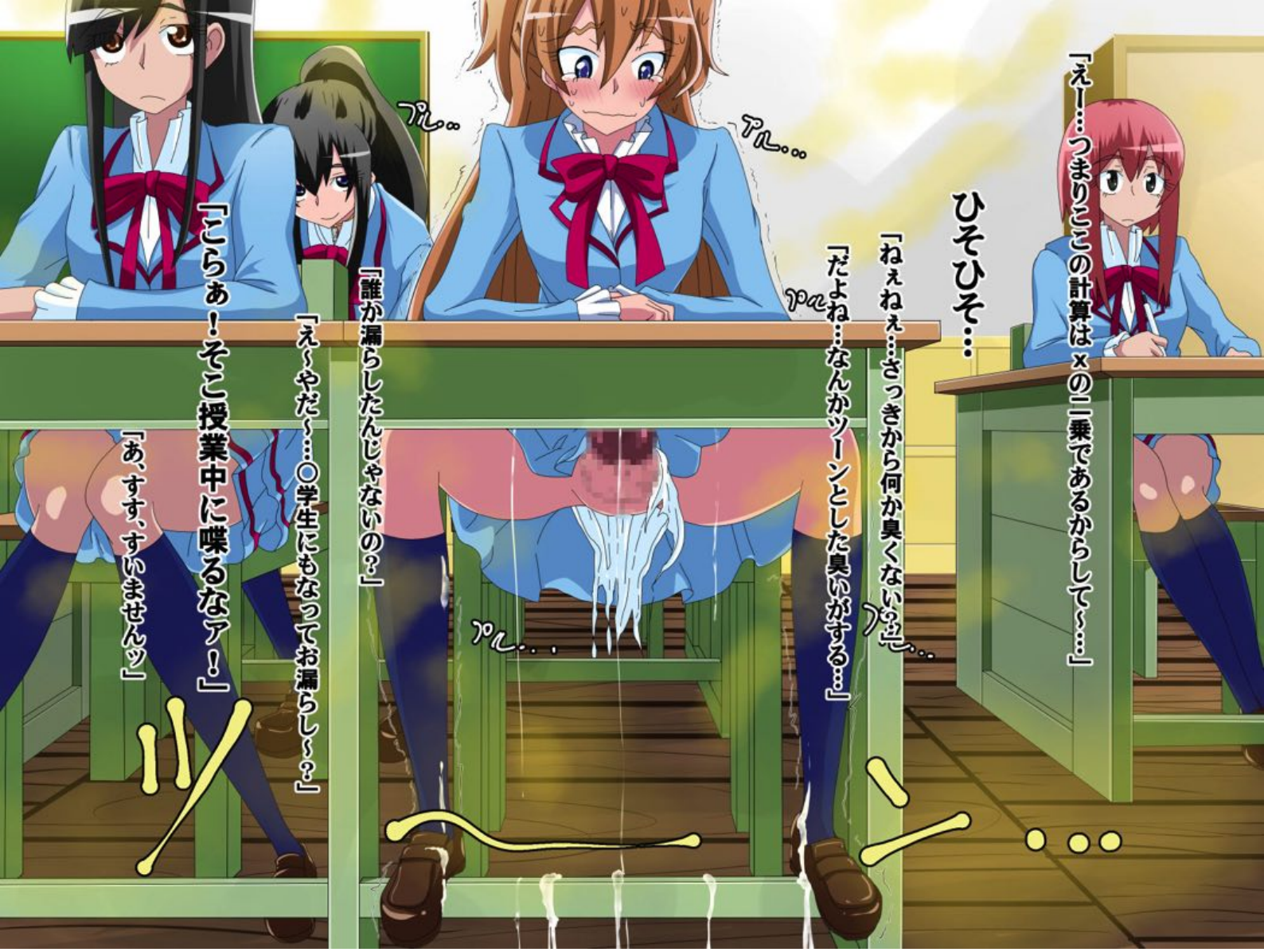

「も～…なんで私ってこうすぐ物無くしちゃうんだろ…どこだ～風邪薬～～」
ほほぉおおおおお～♥パンツぅぅ～♥お尻～♥
はぁっ♥はぁっ♥♥はぁ♥
パンツ♥パンツ♥和音のおパンツ♥はぁ♥はぁ♥で、でももうやめないと白いの出ちゃう…♥♥
あーあ…教室で始めちゃった…女の子のくせになんてはしたない…
でもでも…!!もうやめらんない!♥射精したい!♥ここで射精したい!♥
シコ
シコ
シコ
シコ
シコ
シコ

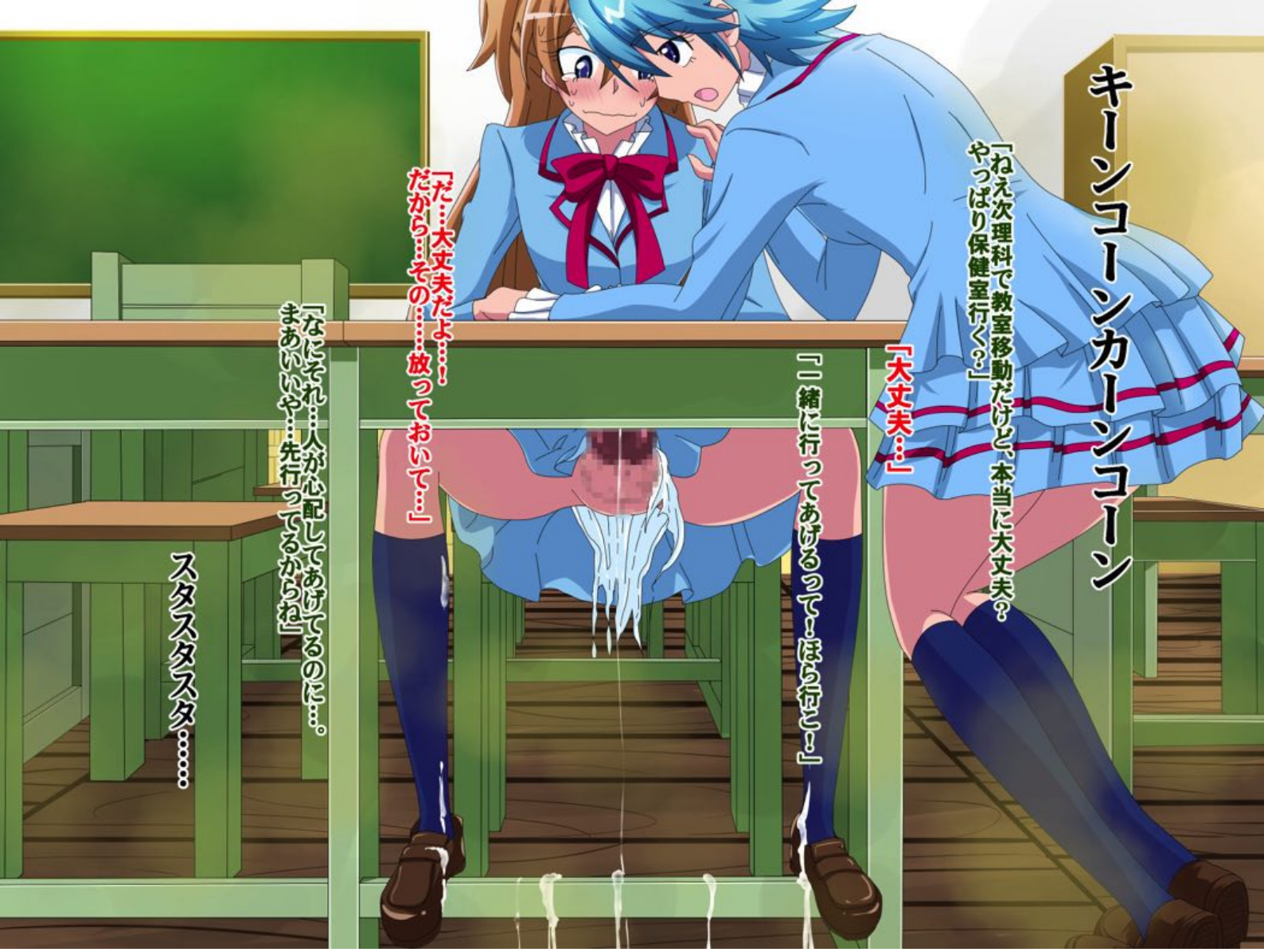

ほぉっ❤ほぉっ❤出る…っ！白いの出るッ！！❤❤
やっぱ止められない…！❤❤
白いの出す！出しちゃうよ！❤❤❤
据え膳食わぬは女の恥ッ❤❤
ここで出さなきゃ女がすたるッ！❤❤❤
後のことなんかどうだっていいっ❤
出したい…！もう我慢できない…！❤❤
出る…！出る！出る…！
白いの出るぅ…！！！❤出る出る出る出る！！！❤❤
あっ❤あっ❤あっ❤あ～～～～ッ…❤

どぴゅっ❤


や……やっちゃった～～～～～～…！
私机の下で白いの出しちゃったぁぁぁ……
どうしよー……
後始末どうしよー……
バレちゃう…私におち○ちん付いてるのバレちゃうじゃんこれぇぇぇぇ…
ポタ…
ポタ…
ぷっ…バカね…
後先考えずアホみたいにチ○ポしこいちゃって…
いい気味だわ…
まぁ見るからにアホって感じの子だけど…
まさかここまでアホだとは…
さぁ、どうするの？オナニーアホ女？


キーンコーンカーンコーン
「あー…ごめん響～、見当たらないわ～…
とりあえず一緒に保健室行こうか～」
「イイ！ダイジョウブ！本当ダヨ！
授業始まるからもう席つこっか！」
「え～？本当大丈夫？」
「うん！元気元気！」
あらあら…チャイムに救われたわね
残念…見たかったわ…
あなたが皆にチ○ポを笑われる姿


「えー…つまりここの計算は×の二乗であるからして～…」
ひそひそ…
「ねぇねぇ…さっきから何か臭くない？」
「だよね…なんかツーンとした臭いがする…」
プル…
プル…
プル…
プル…
「誰か漏らしたんじゃないの？」
「え～やだ～…○学生にもなってお漏らし～？」
「こらぁ！そこ授業中に喋るなァ！」
「あ、すす、すいませんッ」


キーンコーンカーンコーン
「ねえ次理科で教室移動だけど、本当に大丈夫？やっぱり保健室行く？」
「大丈夫…」
「一緒に行ってあげるって！ほら行こ！」
「だ…大丈夫だよ…！だから…その……放っておいて…」
「なにそれ…人が心配してあげてるのに…。まあいいや…先行ってるからね」
スタスタスタ……

「んも～…！和音のやつこういう時に限って
親切すぎるんだから…！
一方奏はどこ…!?私がこんなになってる時に休むだなんて…！」

誰も居なくなった教室、響は急いで精液をハンカチでふき取り、
破れたパンツをポケットにしまった。

そして、教室を後にした。

行き先はもちろん理科室……
…ではなかった。

「ふぅ…♥ふぅ…♥」

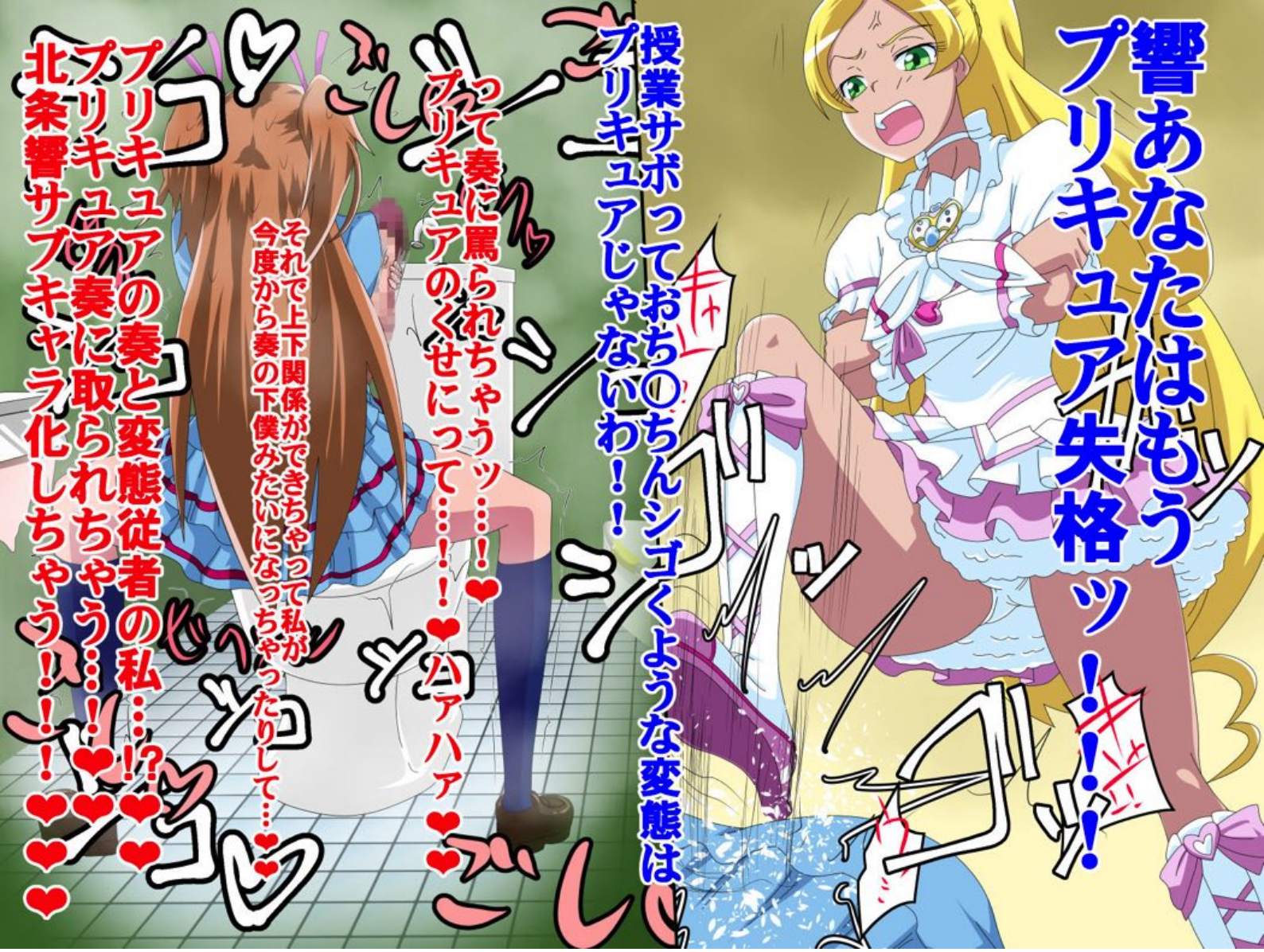
シコシコ……

「ふぅ…ふぅ…!♥」

シコシコシコシコシコ……!

おほおおおおおおおおおッッッ!!!!
おち○ちん!♥♥
おち○ちんんッッッ!!!!♥♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ

おち○ちん気持ちいいよぉぉぉ～～！❤❤
もうやだぁぁぁぁ～～！！❤❤
授業サボってトイレでおち○ちんシゴいて…
これじゃまるで私変態じゃない…！！ハァ❤ハァ…❤
今の私は変態…！
くぅ…！❤私は授業サボって
おち○ちんシゴいてる変態…ッ！！❤❤
ふぅ…❤ふぅ…❤こんなの学生として最悪だよ…！
ううん…人として最悪……！ハァハァ❤
こんなことしてるの奏にバレたら…
きっと笑われて罵られちゃう…ハァ…❤ハァ…❤


響あなたはもう
プリキュア失格ッ！！！
授業サボっておち○ちんシゴくような変態は
プリキュアじゃないわ！！
って奏に罵られちゃうッ…！
プリキュアのくせにって…！！
ハァハァ
それで上下関係ができちゃって私が
今度から奏の下僕みたいになっちゃったりして…
プリキュアの奏と変態従者の私…!?
プリキュア奏に取られちゃう…！！
北条響サブキャラ化しちゃう！！！

だって…！

だってじゃありません！

ほんっと響ってだらしないんだから…！小学生だって授業中におち①ちん触ったりなんかしないのに…！変態！

ガッ！ガッ！ガッ！

こめんなさいっ！蹴らないでええ…！

うるさい！これは教育です！犬よりおバカな人間を躾けるにはもう暴力しかないの！ほら！もっと謝りなさい！はい！

こめんなさいこめんなさい…！

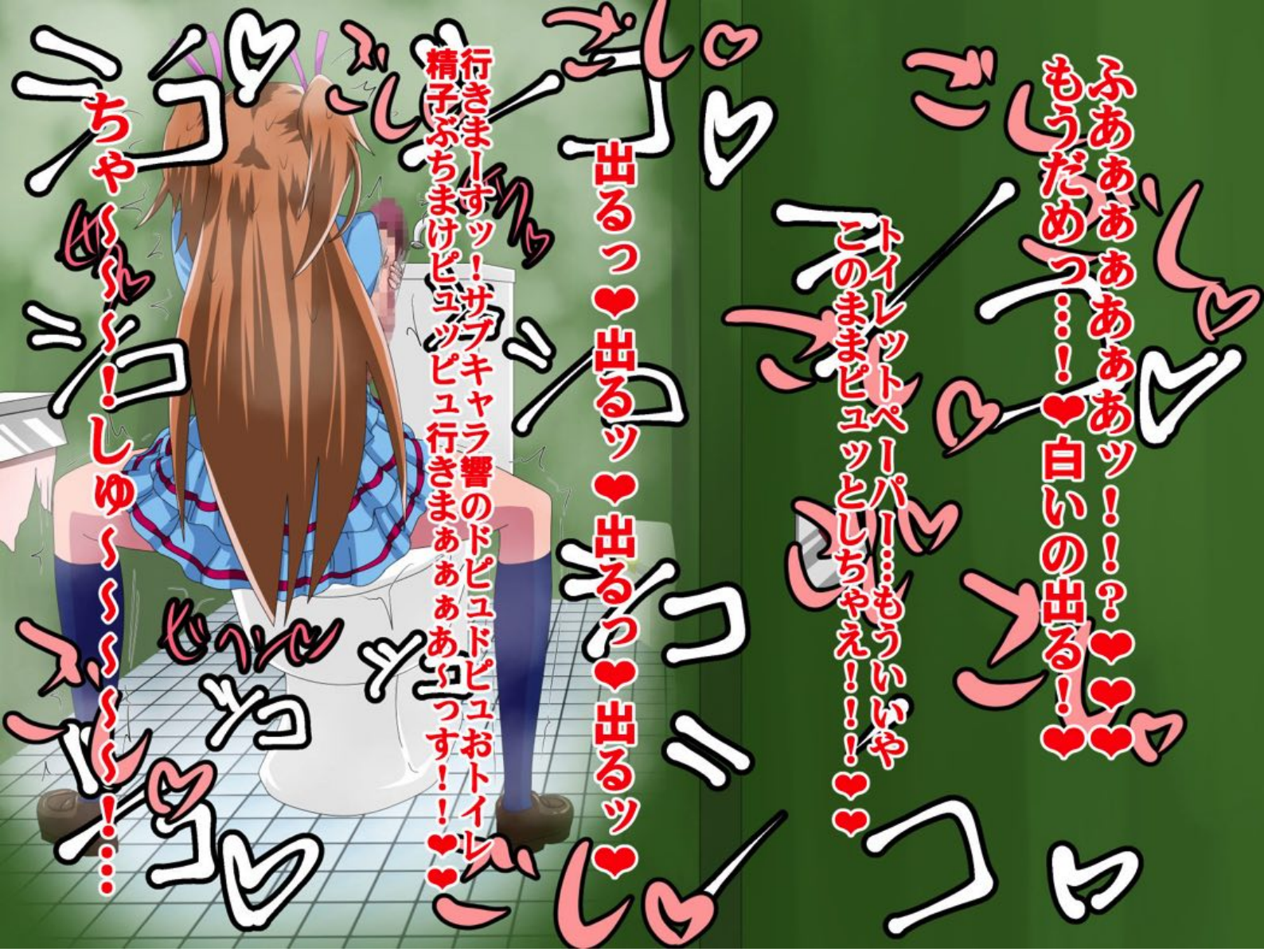
あと百回！

こめんなさいこめんなさいこめんなさい…！

今日から私が一人前の人間になれるように教育してあげる…！感謝しなさいよ、駄犬！

ハァ…ハァ

ハァ…ハァ


ふあぁぁぁぁぁぁぁッ！！？❤❤❤
もうだめっ…！❤白いの出る！❤
トイレットペーパー…もういいや
このままピュッとしちゃえ！！！❤❤
出るっ❤出るッ❤出るっ❤出るッ❤
行きまーすッ！サブキャラ響のドピュドピュおトイレ
精子ぶちまけピュッピュ行きまぁぁぁぁっす！！❤❤
ちゃ～～～！しゅ～～～～！…

みえええええssssん……!!!

あああ～っ…白いの壁にぶちまけちゃったあぁぁ～～…
まぁいっか…
それより全然おさまらない…！今日はもうこのまま授業出ずにこれやっとこー…
シコシコシコシコ…

おおおおほおおおおおおッ〜〜！
ちんぽ気持ちいいいいいッ！！♥♥
ほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！♥♥♥

おっ…男の子オナニー最高ーーッ！！❤❤
やめられなーいッ！！❤❤

パパママごめんなさぁぁ～～っい！❤❤
私学校サボってオナニーする不良になっちゃいましたぁ～❤❤

奏太ごめんね！❤お姉ちゃんもう奏太を叱る資格ないよね！❤
奏太ですら今ちゃんと授業受けてるんだもんね！❤
お姉ちゃんはクズでぇ～っす❤オナニーバカでぇ～っす❤

でもやめられな～～いッ❤❤
射精しても射精しても興奮がおさまらないのぉぉぉッ❤❤
私これじゃまるでサルみたい…❤
センズリ覚えたサルみたいだひょおおおおっ！！？？❤❤❤

たひゅけてえええええ～～～ッ❤❤❤

ほおぉおぉおおぉっ❤❤またイクッ！❤❤
男の子イキするッ！！❤❤
イクッ！❤イクッ！❤イクぅぅうううぅうッ！❤❤
くそぅう！❤セイレーンめぇぇぇぇぇぇッ！❤❤
私達をこんな体にして…
絶対許さないぃぃぃぃぃッ！！！

びゅっ❤❤❤❤
くぅ～ッ❤たまんない❤
でもまだおさまらないよ……❤
もう一回……！もう一回だけやったら授業出よう……！❤

キーンコーンカーンコーン
「やっと帰れる！…」
「アンタ部活は？」
「今日は行かない」
「…ていうか、ここなんか臭くない？」
「まあ…トイレだし？」

おほほぉおぉおぉおぉッ❤❤❤
皆が居なくなった後の男子トイレおち〇ちんシュッシュ❤❤❤
臭っさい！男子トイレって臭っさい！❤
男の子のおち〇ちん汁が便器にこびりついて悪臭放ってる！❤❤
頭がクラクラする❤臭すぎて頭がクラクラするぅぅぅぅッ！❤❤
そこに私出しちゃうよ！❤白い汁ドッピュンしちゃうよ！❤❤
いいよね！？❤おちん〇んから出るんだからここに出すのが当然だよね！❤
シコシコシコシコシコシコシコ！❤❤
興奮するっ❤変態お〇んちんシコシコ❤男子便器に変態シコシコする
変態女子の私❤❤❤
この臭さクセになるぅぅぅぅぅぅッ！❤❤

私がこんなになったものこのおち○ちんのせい
なんだからね！❤❤
おち○ちんが私をこんな変態にしてるの！❤おち○ちんの
魔力すごすぎッ！！❤❤
シコシコ止まらないだけじゃない…！❤完全に脳を変えられちゃった…❤❤
男子みたいにスケベになっちゃってる私！❤イっちゃってる！❤
もう男子のこと気持ち悪いとか言えない…！❤
私も変態！❤男子と同じおち○ちんの奴隷になっちゃった❤
今なら解る！男の子が女子の体操服盗んだりレ○プしたり
しちゃう理由が今なら解る！❤❤
おち○ちんの魔力には敵わない！❤❤
ちん○んシュッシュ♪❤
ちん○んシュッシュ♪！❤❤

おっ❤おっ❤おっ❤
白いの出る！❤白いの出ちゃう！❤
出しちゃう！？❤出しちゃうの！？？❤❤
変態男の子ち〇ちんシュッシュで白い汁をあろうことか
男子便器に出しちゃうの！！？？？❤❤❤
いいでぇ～～～っす！❤❤
出しちゃっていいでぇ～～～っす！❤❤❤
汚物は便器にピュッしちゃうのが正解でぇ～っす！
あはぁッ！出るッ！出るぅ！
白い変態男子汁出ちゃうッ～～！！！❤❤❤
出します！変態響の変態男子汁、男の子用激クサ便器に
白い汚物ピュッピュ出しちゃうんでぇぇっす！！❤❤
ごめんなさ～～～いッ！！！❤❤❤

ビュッ❤❤
…っはぁぁあ～～っ❤❤
っきもぢいいいいいいい～～ッ❤❤❤
男の子ってこんな気持ちいいこと…
セイレーンにこんなもの付けられたのは腹立つケド
男子の快感を知れたのは良かったかな…❤
将来お嫁さんになったら旦那様にいっぱい
気持ちいいことしてあげれるしね❤これも勉強勉強❤❤
言ってたらまたうずいてきたぁぁ～ッ❤もう帰りた～～いっ❤❤

うへへ…❤
おち〇ぽ牛乳入れま～～す❤
ブル…ッ
うふふ…❤響のやつきっといつも通りこれ食べるわ❤
私の精液ミルクで作ったケーキだとも知らずに…ハアハア…❤
響が私の精液を食べる…なんかそう考えたら興奮してきちゃった！❤
知らずに食べろ～❤私の精子～❤お腹の中で溶かされて
響の養分になれ～～っ❤❤毎日食べさせて私の精子が響の
血となり肉となり…
おっきな響精子の出来上がり！❤❤

ビュッ❤ビュッ❤
はぁ~い❤一発目~~❤❤
うっわぁ~臭っさいっ❤❤精子ってほんと臭っさい！❤
でもその精子の臭いですら興奮しちゃう❤❤❤
私はこの精子を臭わないように調理して、響はおいしそうに
これを召し上がる…❤はわわぁぁあ~っ❤❤
考えただけでゾクゾクが止まらないよぉ~❤❤
おいしく召し上がれ❤栄養満点私の精子入りだとも
知らないでおいしく召し上がれ響❤❤
もう一発❤もう一発くらい入れようか…！
いや待って！そんなことしちゃダメ！
精子一発入れて響に食べさせるなんてダメ！❤❤❤
私ダメよ！❤

響には10発くらい入れないとダメ！❤❤
あの子には特濃ザーメンケーキじゃないとダメ！❤
だって親友だもの❤一発入れるだけなんてあまりにも不親切❤
私の精子の味しかしないくらい精子を入れて…ううん
入れるなんて発想がもう不義理だわ❤
精子で作るの！そうだわ！精子を焼いて固めてスポンジ代わりにして、
精子を片栗粉でプルプルに固めてそれに塗りましょう！❤
少しレモン果汁も入れてみよう！❤
新しい！❤新しすぎるわ！❤
ブリブリ
ズブズブ
ズブ
私の才能が今うねりをあげてる！❤お菓子作りの才能が輝いてる！❤
おいしく食べてもらいたい…！❤
響に私のザーメンケーキおいしく食べてもらいたい！❤
全身身震いしちゃう❤
もっともっとザーメン入れるゾ！❤私頑張っちゃうゾ！❤
おほぉおっ❤またイク！❤またイっちゃう！❤
響への友情で精子出るッ❤❤友情精子出ちゃうッ！！❤
ああっ！❤イクイクイクイクッ！❤❤

友情精子イクぅぅぅぅぅぅぅぅッッッ!!!
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
ビュッ
二発目ぇぇぇぇ～～～～❤❤❤
私の精子と卵がくっついて赤ちゃんできちゃうかも～❤❤❤
はやく完成させないとパパやママが起きてきちゃうっ❤❤❤
早く二発目入れないと❤
シコシコシコシコ！

どぴゅっ❤

「三発目え～❤」

シコシコシコシコ…

どぴゅっ❤

「四発目～～っ❤❤」

シコシコシコシコシコ…

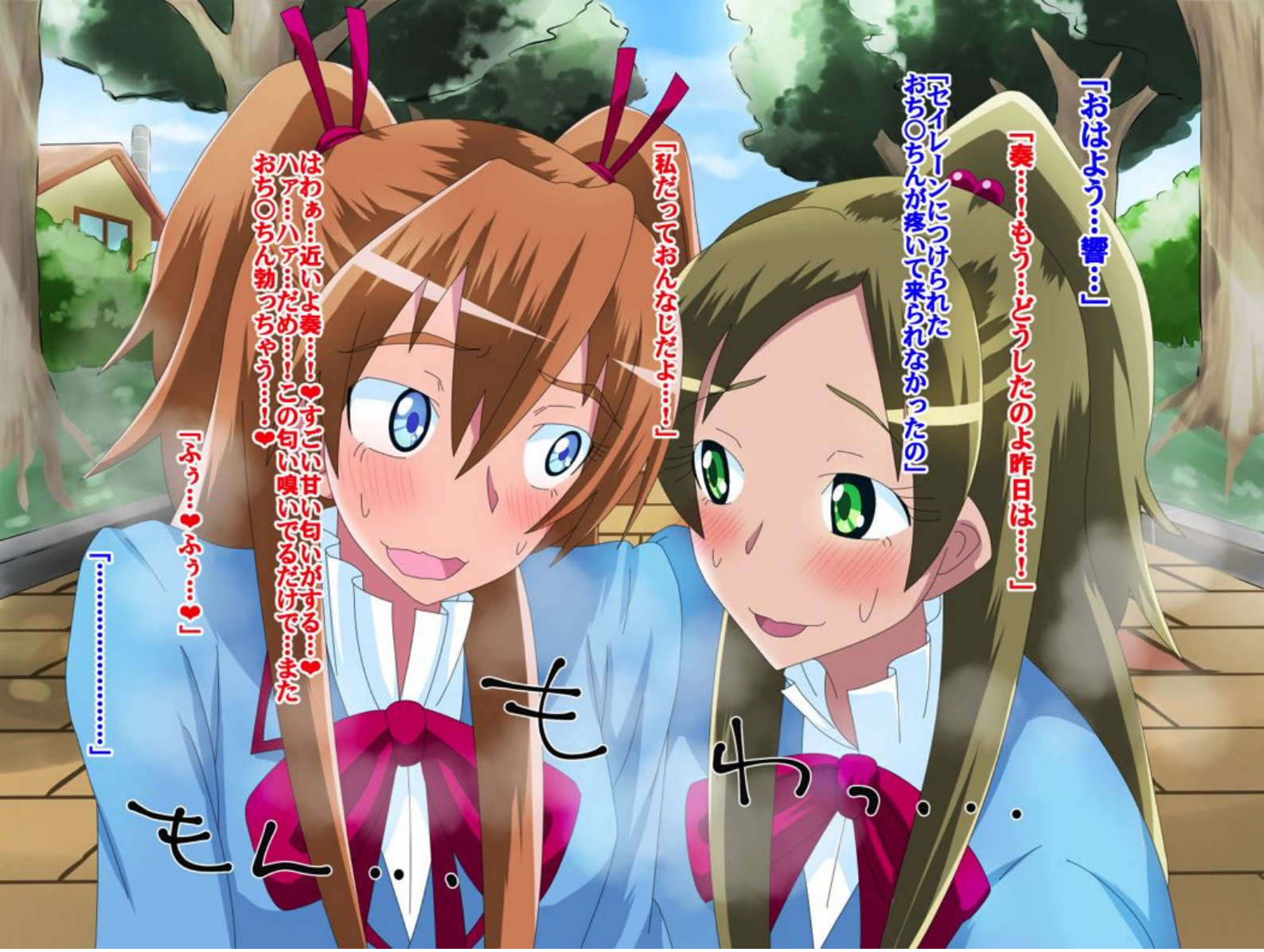
どぴゅっ❤

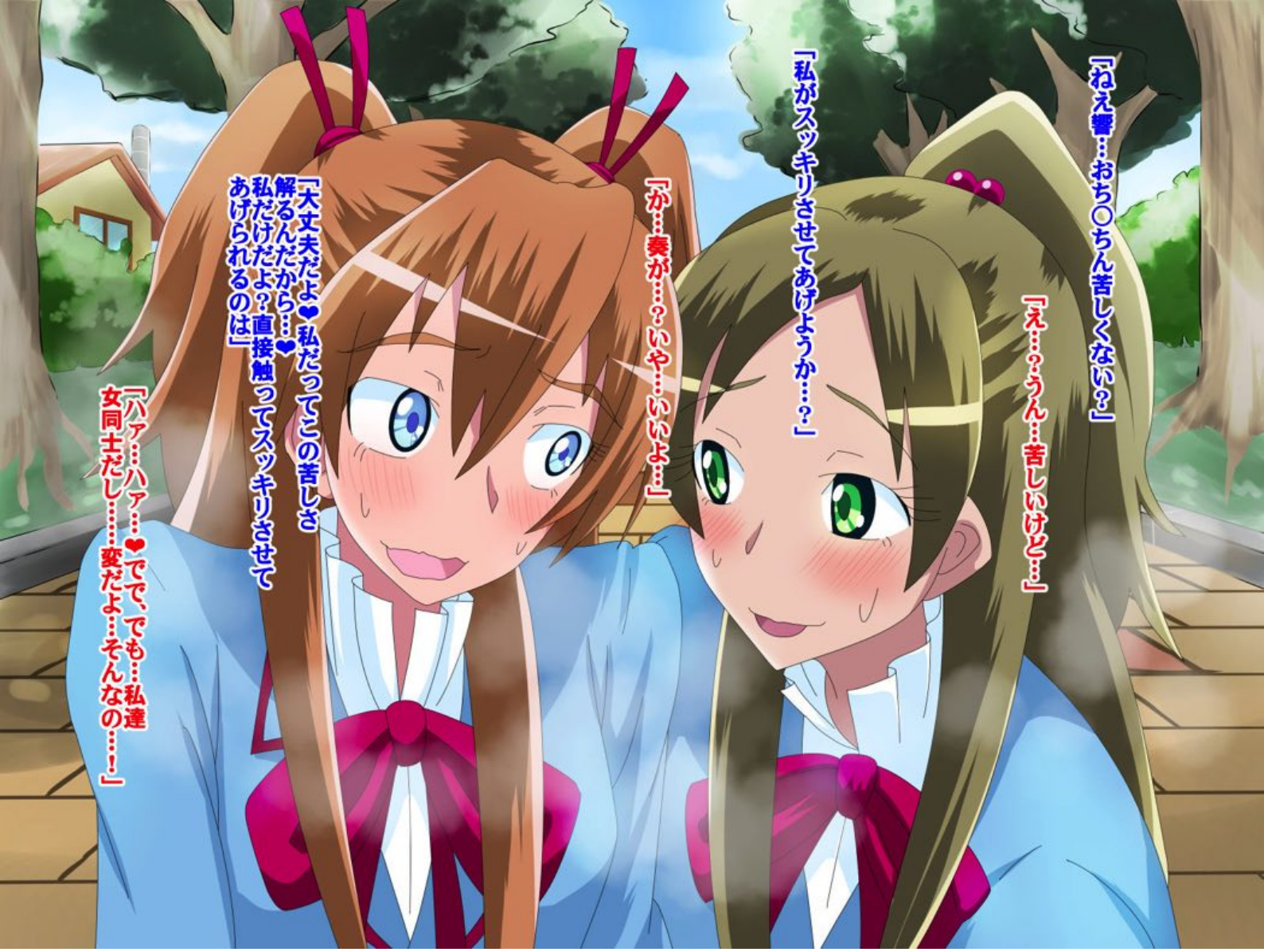
「えへっ…えへへ…
五発目え～～っ❤❤」

シコシコシコシコシコ…

シコシコシコシコ…

「えへへへ～❤いっぱいになっちゃった…❤
今日は徹夜になっちゃいそう…❤」
「待っててね…響❤」
たぷん…


「おはよう…響…」
「奏…！もう…どうしたのよ昨日は…！」
「セイレーンにつけられた
おち○ちんが疼いて来られなかったの」
「私だっておんなじだよ…！」
はわぁ…近いよ奏…！❤すごい甘い匂いがする…❤
ハァ…ハァ…だめ…！この匂い嗅いでるだけで…また
おち○ちん勃っちゃう…！❤
「ふぅ…❤ふぅ…❤」
「……」
もん…
もち…


「ねえ響…おち○ちん苦しくない？」
「え…？うん…苦しいけど…」
「私がスッキリさせてあげようか…？」
「か…奏が…？いや…いいよ…」
「大丈夫だよ❤私だってこの苦しさ
解るんだから…❤
私だけだよ？直接触ってスッキリさせて
あげられるのは」
「ハァ…ハァ…❤でで、でも…私達
女同士だし……変だよ…そんなの…！」

「しょうがないじゃん…だって他の人に頼むわけにはいかないでしょ…？❤」

「はうっ…!?❤❤ちょ…奏…!?❤❤」

「ふふ…響すっごい厭らしい顔してる…❤変態男子みたい…」

「しっ…仕方ないでしょ…!!こ…これはおち○ちんのせいで…!」

コスコスコスコス…

さわ♡

さわ♡

「あひんっ!?❤か…奏…ッ!❤❤だだだ、ダメだよ…!こんな所で…!❤」

「そんなこと言って、ここは嬉しそうに硬くなっていってるわよ…?❤」

「そ、そうだけど…!❤う～～ッ…!❤❤」

「ほら…授業出るのはやめて私と旧校舎のトイレに行きましょ?ね?」

「ハァ…ハァ…ハァ…!❤」

ハァ…♡

ハァ…♡

「この口におち○ちん舐めてほしくない?」

ベロベロちゅばっ❤

「っ…!?❤❤」

「ね？ほらほら…❤やわらかくって
ネチャネチャだよ？❤
生暖かい唾液でぐちょぐちょの
ベロがこのお○ちんにねちっこく
絡み付いてやさしく包み込むよ？❤」

ハ…ロ…

「今だけ私が口でやってあげる…❤
どうする？」

コス♡

コス♡

ハア…ハア…❤
口でする…❤❤奏の口…❤
生暖かい息が吐き出されてる…❤
ハアハア…！❤唾液の匂い…❤
奏の甘い匂いと唾液の匂いが混ざり合って
すごくエッチな匂いになってる…！❤❤

こんな口の中に入れたら私の
お○ちんきっと10秒ももたない…❤❤
温かそう…！❤ドロドロの唾液が…❤❤

ハア♡

ハア♡

ドキ♡

でも奏は親友…同性でそんなこと…
その一線を越えちゃったらもう…私達
いつもの二人には戻れない気がする…！❤
ハアハア…❤そういうの…レズビアンって
言うんだよね…？❤私たちレズビアンになっちゃうの…？
でも…将来もずっと…？ずっとレズビアンのまま…
奏と二人で住んで…歳とっても…？
いや…いくらなんでもそれは……

ドキ♡

ドキ♡

「ね？響❤」

ぷるんっ❤

ビンビンッ♡

「あッ!?ちょ…奏…!やめて…!こんな所で出さないで…!」

「大声出さないの。大声出したら皆に見られるよ」

「お願い…しまって…!」

「大丈夫❤後ろの人には見えないし、前の人は後ろを向かない限り見えないから」

ドキ…ドキ…❤

ハァ…ハァ♡

ドキ♡ドキ♡

な…なんで私…興奮して…おち○ちんバッキバキになっちゃってる…!❤こんなこと…恥ずかしいのに…!こわいのに…!!❤❤ハァハァ…!❤❤興奮するよぉぉぉぉッ~~!❤❤

ゴシゴシゴシゴシ…❤
「はうっ！❤はうううッ……！❤はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…ッ～！❤❤」
「あははは❤こんなところでおち○ぽまる出しにされてコスられて興奮してるの？響」
「ハァ…❤ハァ…❤」
「変態❤」
ドキン…❤

「あれ？…さらに硬くなった…もしかして響って罵られて興奮するの？」

「マゾ？」

「ちッ違うよ…！」

「本当に？」

「マゾ。マゾ響。皆の前でち○ぽ晒して興奮するマゾ響。マゾ、マゾ、マゾ～～♥♥」

ゾクゾクゾクッ

「ッ……～～～～！！♥♥♥」

「あはは♥すごいギンギン！♥ふともも らへん鳥肌すごいよ？やっぱマゾなんだ響って！♥はじめて知った～♥♥」

「ちっ…ちがうの…これは……！」

「こんな所でおち○ぽ晒して興奮した挙句、罵られてビンッビンにするなんてド変態マゾね。変態響さん♥」

ゾクンッ♥

「おち◯ぽ気持ちいいでちゅかぁ～？ほらしっこっしっこしっこ♪あはっ❤赤ちゃん言葉で言ってあげたらもっと硬くなりまちたねぇ～❤」

「フ～…❤フ～…！❤フ～…！❤」

「ひびきちゃんはおち◯ちんシュッシュッちてあげたら嬉ちいんでちゅもんねぇ～❤赤ちゃんみたいになんでもママにやってもらわないと自分でオナニーもできないんでちゅもんねぇ？❤ダメな子でちゅねぇ～❤」

「ハァ…ハァ…ハァ…❤」

「あはは❤お顔が蕩けてきちゃいまちたねぇ…もう思考停止でちゅかぁ？本当の赤ちゃんみたいに何にも考えることができなくなっちゃいまちたねぇ～❤可愛いでちゅよ～❤ママが与える快感に身も心もゆだねて赤ちゃんのようにだされるがまま…❤」

「ひびきちゃん❤ほらあんよが上手♪あんよが上手♪あはは❤本当に赤ちゃんになっちゃった❤」

「ハフ…ハフ…ハフ…❤」

「ふ～…！❤ふ～…！❤」

なんで…私…ゾクゾク
奏の言葉で脳が揺れて…身体がゾクゾクなる…！❤

「ほらひびきちゃん❤そろそろシーシーしたいんじゃないの？❤出しちゃいなさい❤ほらほらほら❤❤」

「そ～れぴゅっぴゅっぴゅっ♪そ～れぴゅっぴゅっぴゅっ♪❤❤」

「ッ～～～～！！！！！❤❤❤」

もうだめぇッ～～～～！！！！❤❤❤

ビュッ！❤

「は～いいっちょあがり❤こんな道のどまんなかでイっちゃいまちたねぇ～❤こ～のおもらし響！❤」

「どう？白いお汁おもらしビュッビュ気持ちよかった？あは❤目が蕩けてる❤可愛い響❤こんなに罵られて感じる変態だなんて知らなかった❤面白い❤すっごく面白い❤変態響❤センズリ大好きマゾ豚響❤」

「うわわぁ～❤また勃ってきた!?❤これからいっぱいなじってあげる❤もっと響を感じさせるように口汚く罵ってあげるね響❤」

「じゃ…行こっか…♥」
「…こくん…」

「さ♥じゃあさっそくはじめよっか♥」

「…あの…奏…？
お口でしてもらえるんじゃないの…？
私なんで座らされたんだろう…」

「え？だって響はさっき射精したじゃない？」

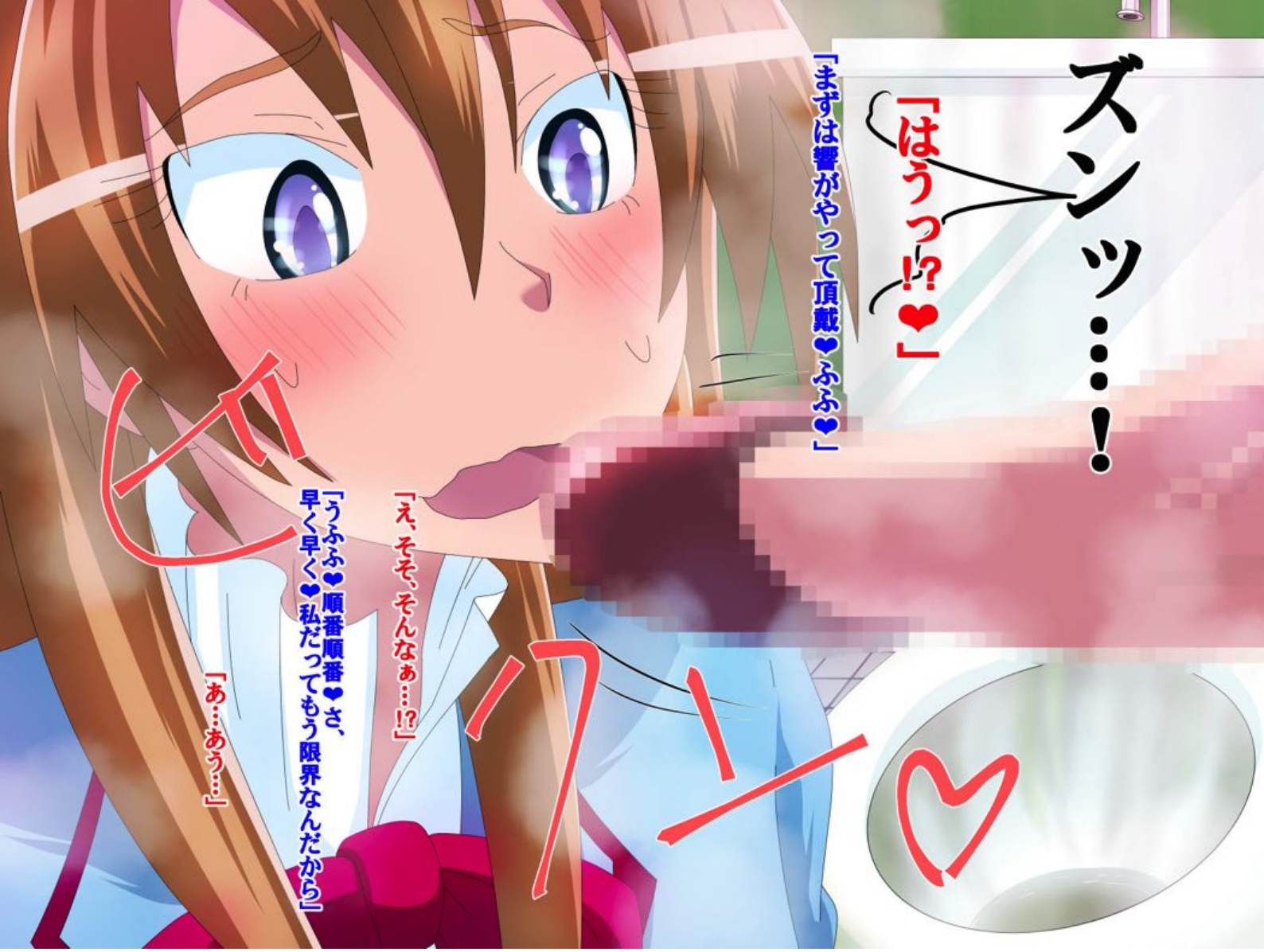
「で…でも…約束…」

「約束だよね、いいよ、やってあげる。
でも順番的には私だよね。
響はさっき射精したんだから…」

ふぅ…♥

ハァ…♥

ハァ…♥


ズンッ…！
「はうっ!?❤」
「まずは響がやって頂戴❤ふふ❤」
「え、そそ、そんなぁ…!?」
「うふふ❤順番順番❤さ、早く早く❤私だってもう限界なんだから」
「あ…あう…」

「ねえほら早く♥」

ぐいぐいっ

「あ…っ♥」

スンスン…
この匂い…♥ハァハァ…♥
イカ臭い…けど……スー…♥ハー…♥
スーハー…♥香ばしい匂い…♥

「スーハー…♥スーハー…♥」

「あれ？どうしたの響？
そんなにおち〇ぽの匂い嗅いで…
あっ、もしかして気に入ったの？」

そんなまさか…気に入るわけが…
スーハー…♥スーハー…♥

「あはは♥気に入ったんだぁ～♥」

「ほらいいよ❤もっと嗅いでごらん❤」

スンスン…スンスン…！❤❤

ふぁっ…ふぁぁッ…❤この匂い…❤
すごくエッチな香り…❤
和音や奏の甘い匂いも興奮したけど
この男の子の匂いもイイ…！❤すごくイイ！❤

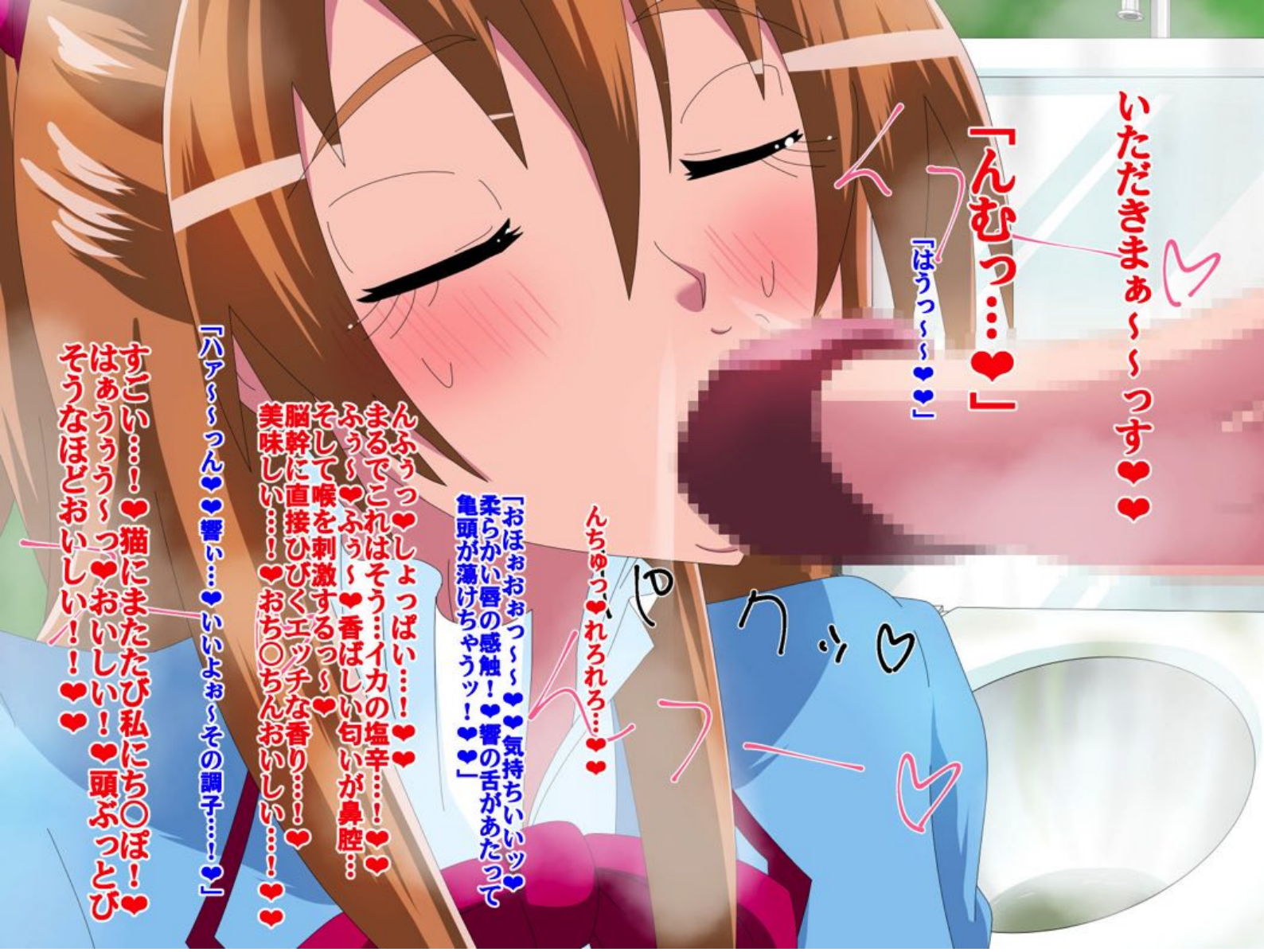
「あはは❤響ったら夢中になっちゃって…」

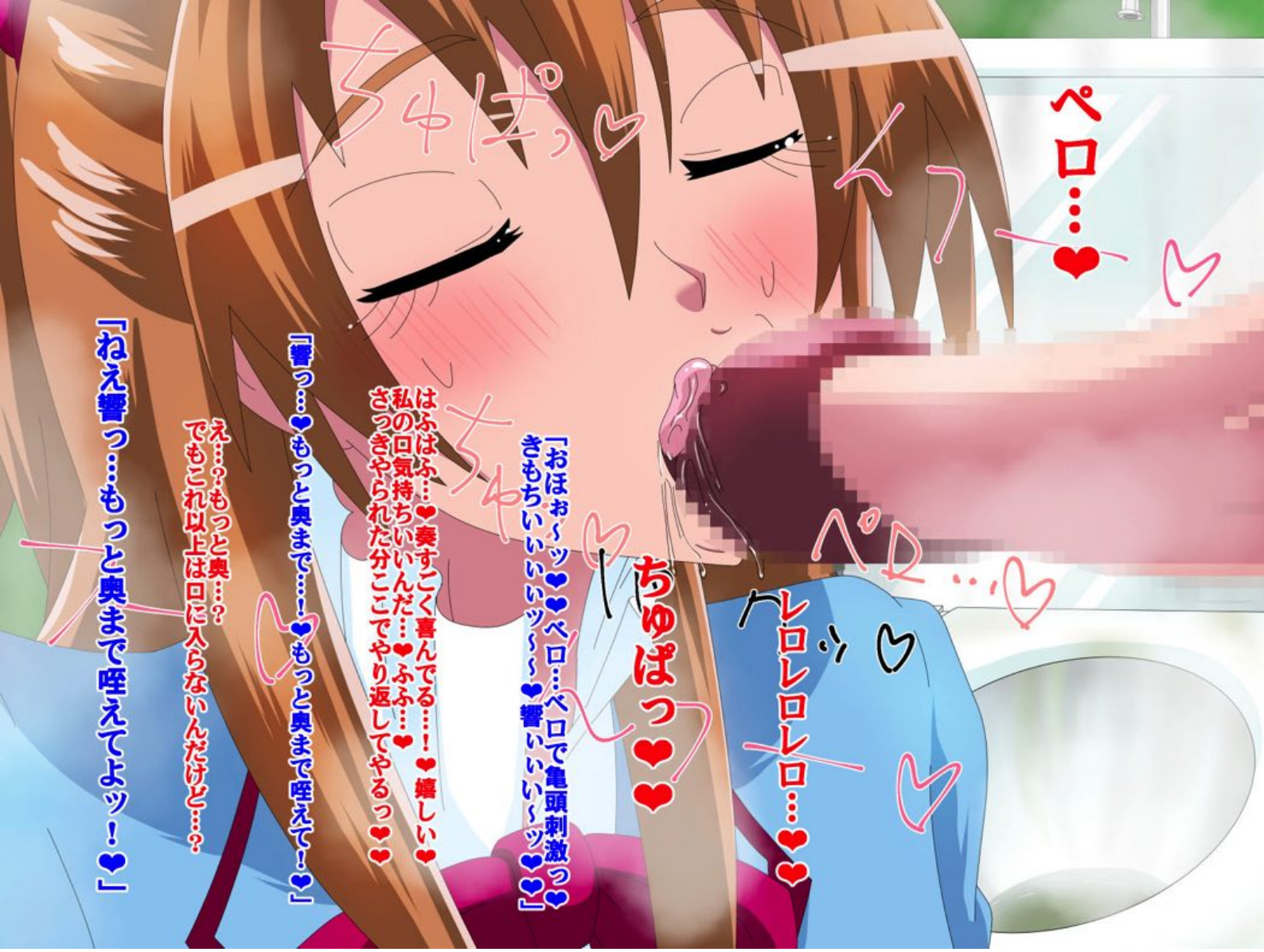
嗅いでるだけで本能に訴えかけられるような
強烈な匂い…頭に染み渡ってくる…❤

はふ…❤はふ…❤

だめ…ッ❤この匂い嗅いでると頭が
真っ白になって何も考えられなくなる…❤
好きっ❤この匂い好きっ❤
とりこになりそう…！❤❤おち〇ちんって
こんな…クセになる匂いしてたの…!?❤

すごい…っ❤❤私の中の女の子の部分がこの匂いを嗅いでると
はしゃいでるっ❤はしゃぎまわってる！❤❤
ハァ…❤ハァ…❤クンカクンカ…❤❤はわぁぁッ❤❤❤
私幸せ…！❤すっごく幸せな気分…！❤❤
女性ホルモン大量放出っ！❤❤奏のおち〇ちんから出る
男の子の匂いに女性ホルモン大歓喜っ！❤❤❤


いただきまぁ～～っす❤❤
「んむっ…❤」
「はうっ～～❤❤」
んちゅっ❤れろれろ…❤❤
「おほぉぉぉっ～～❤❤気持ちいいッ❤
柔らかい唇の感触！❤響の舌があたって
亀頭が蕩けちゃうッ！❤❤」
んふぅっ❤しょっぱい…！❤❤
まるでこれはそう…イカの塩辛…！❤❤
ふぅ～❤ふぅ～❤香ばしい匂いが鼻腔…
そして喉を刺激するっ～❤
脳幹に直接ひびくエッチな香り…！❤
美味しい…！❤おち〇ちんおいしい…！❤❤
「ハァ～～っん❤響ぃ…❤いいよぉ～その調子…！❤」
すごい…！❤猫にまたたび私にち〇ぽ！❤
はぁうぅう～っ❤おいしい！❤頭ぶっとび
そうなほどおいしい！！❤❤


ペロ…❤
ちゅぱっ♡
ペロ…♡
レロレロレロ…❤❤
ちゅぱっ❤❤
「おほぉ~ッ❤❤ペロ…ペロで亀頭刺激っ❤きもちいいいッ~~❤響いいい~ッ❤❤」
はふはふ…❤奏すごく喜んでる…！❤嬉しい❤私の口気持ちいいんだ…❤ふふ…❤さっきやられた分ここでやり返してやるっ❤❤
「響っ…❤もっと奥まで…！❤もっと奥まで咥えて！❤」
え…？もっと奥…？でもこれ以上は口に入らないんだけど…？
「ねえ響っ…もっと奥まで咥えてよッ！❤」

ぐもっ！

「んむうッ！？？」

「はぁっ❤響ッ！❤響ッ！❤」

「んんんっ…！？？❤」

奏ちょっ…口の中に無理やり…！アゴはずれちゃう…！！

「もっと奥…！❤もっと奥まで咥えてっ！❤❤」

ぐっ！ぐっ！

奏…！やめて…！これ以上は無理…！！

ビクッ

ビクッ！

ズリュリュウウッ！！！

ぬぬぬ

「はぁあぁぁあっん❤響のノド最高ーーッ！❤❤」

ズッ

ズッ

ズッ

おえええええッ！？？うげえええええッ！！
やめて奏…！おえええええッ！！！！！
ぐるじい！！！うえええええええッ！！！！！

「響のノドま○こっ！❤響のノドま○こぉおおぉおッ～！❤」

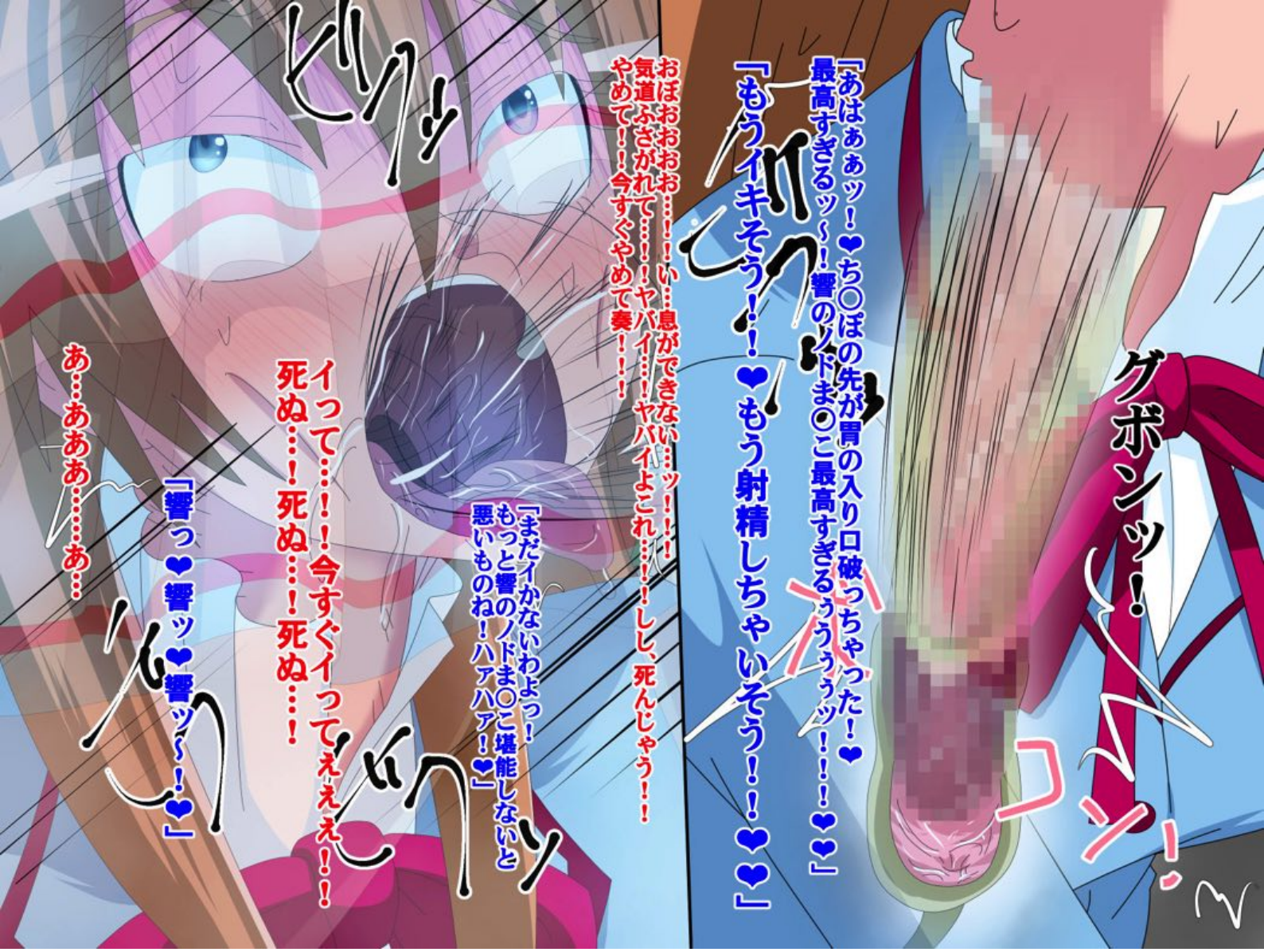
ボッ

ボッ

ボッ

ボッ

おおぼおおおおぼおおぼおおーーッ！！！！
やめて奏えええええッ！！！！


グボンッ！
コン！
「あはぁぁッ！❤ち〇ぽの先が胃の入り口破っちゃった！❤
最高すぎるッ～！響のノドま〇こ最高すぎるぅぅぅぅッ！！！！❤❤」
「もうイキそう！！❤もう射精しちゃいそう！！！❤❤」
おぼおおお…！！！い…息ができない…ッ！！！
気道ふさがれて…！！！ヤバイ…！！ヤバイよこれ…！！！し、死んじゃう！！
やめて！！！今すぐやめて奏！！！
「まだイかないわよっ！
もっと響のノドま〇こ堪能しないと
悪いものね！ハァハァ！❤」
ビクッ
イって…！！！今すぐイってぇぇぇ！！
死ぬ…！死ぬ…！死ぬ…！
「響っ❤響ッ❤響ッ～！❤」
あ…あああ……あ…

なにこの感じ…！？
意識が白ばんできて身体が軽い…！！？❤❤
ふぁぁあっ…❤❤吹っ飛びそう…！！❤❤

こんなに苦しいのに…こんなに息苦しくて
死にそうなのに…！
意識が飛びそうになればなるほど気持ちよくなってる…！！❤

ほあぁぁぁぁぁぁあッ❤❤❤

気持ちいい…！❤意識飛びそうなの気持ちいい…！❤❤
失神するッ…！❤失神しちゃう！！？？❤❤

ドユクドユクドユクドユクー

ビュッ

おぼおおおおおおおおおおお！！！？？？？

やったぁ！響の胃に直射精！！！！❤❤

特濃ザーメン召し上がれ❤❤❤

グリンッ…

っ～～～❤❤……

「あっ…気絶しちゃった…

少しやりすぎちゃったかな…」

ゴボッ……ゴボボ……

ゴボッ

「あーあ響ったら…せっかくの精液吐き出しちゃった…もったいない…」

「響気絶しちゃったし、次も私の番でいいよね？」

「うふふ…♥」

3.「腐蝕」

ち○ぽの根っこは二人の脳へとつながり
確実に二人を変態へと染めていった。

前回セイレーンと戦って以来、一ヶ月以上
ネガトーンの襲撃がなくなっているため、
二人はプリキュアに変身することもなく
過ごしていた。

町は平和そのものだった。

しかし……

「響ッ！❤響ッ！❤響のマ〇コ最高だよっ…！❤❤」
「ひぃっ…！❤ひぃぃ～ッ！❤❤」
「すごいよ響❤もう私のチ〇ポ全部飲み込むようになったよ！❤がんばったね！❤」
「へぇッ❤へぇぇッ❤❤」
「今日も膣内に射精すからね❤」
「に…妊娠しちゃう…！奏の子供できちゃうッ～～！！！」
「ん～？嫌なの？」
「…っ…！そ、そういう訳じゃないけど…ッ～！！」

町は平和そのものだったが、二人は落ち着いてはいられなかった。

二人のペニスは常に発情状態で、射精を求める。

二人は学校にも行かない日が増え、お互いの家に通っては一日中セックスを繰り返していたのだった。

「じゃあイクねッ！❤射精するよ！膣内に射精するからね！❤❤」
「ふぇぇぇぇッ～～！！❤」
私女の子に妊娠させられる…ッ！！？❤今日こそ奏の子供孕んじゃう…！！！？？？❤❤そんなの人類にはいないよね…！？女の子の子供妊娠する女なんて私だけだよね…！！？❤❤
「大丈夫！❤そんなに簡単に妊娠なんかしないから！」
「そ…そうなの…？」
「うん、普通にセックスしてたって子供なんか全っ然できないから安心して！」
「う…うん…！じゃあ射精して…！❤❤じゃあ膣内に射精してもいいよ…！❤」
「射精するよっ❤響の赤ちゃんのお部屋に今日も私の特濃精子射精するよ！❤❤」

「んっ…!!♥♥♥」
ビュッ!!
ビュッ!
ビュッ!!
ビュッ!!
「ッ~~~~~!!!!♥♥♥」

「うふ❤今度は響の番ね♪
胸でこすってイかせてあげる❤」

「あひっ…❤わ、私も膣内…っ！
私も奏のなかに入れたい…ッ！❤❤」

「ほ～れほれ❤」

「あへぇぇ～～！？？❤❤❤」

「あ、もう蕩けちゃった♪
響ってほんと感じやすいのね❤」

「じゅっ…じゅるいい～～ッ！❤
奏だけじゅるいよぉぉおぉおッ～～！！❤❤」

「一回は一回でしょ❤
そんなに不満なら……」

「文句言うお口も塞いじゃうぞ…♥」

「んぷっ！！？♥♥」

「んっ…んちゅっ…♥ちゅぱっ…♥♥」

グリグリ…

グチュグチュ…

ちゅっ…♥ちゅぱっ…♥ちゅ…ちゅぱっ…♥ちゅっ…♥

「んっ…♥ちゅぱっ…♥」

「んっ…♥んんっ…～♥ふぅ…♥ふぅ…♥ちゅぱちゅぱ…♥ちゅっ…♥」

ゴシゴシ

ゴシゴシ

「ふぅ…ッ…！♥ふぅ…！♥ちゅぱっ…♥ぷちゅっ…♥ちゅっ♥」

ハァ…♥ハァ…♥ちゅっ♥ぷちゅっ…♥ちゅぱっ…♥ぷちゅっ…！♥

はぅぅぅぅぅぅぅッ～～～！！！❤❤❤
脳内イクぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ～～ッ！！！？❤❤❤

ほぅぅっ❤ほぅぅぅぅっ❤
口から…手から、身体から愛が
伝わってくる…ッ！❤❤
おおおおおおおおっ！！❤❤❤

奏が上下するたびにオマ〇コの中
おち〇ちんで掻き回される！！❤❤
さっきイッたばっかなのにまた
絶頂しちゃう…！！？❤❤❤

もうだめぇぇぇぇぇッ～！！❤❤
気が狂いそうッ～～～！！！❤❤❤

おち●ちんもイキそう！！❤もう出そう！！❤
入れたいのに…っ！私も奏の膣内に入れたいのに…ッ！❤
こんな胸でぴゅっぴゅしちゃう…！！！
奏の中に出すべき精子を我慢できずに胸で出しちゃう…！❤

口もオマ〇コもおち〇ちんも…
全部を同時に攻められて完全崩落しちゃう…ッ！？❤
奏のオマ〇コに入れてヒィヒィ言わせてやりたかったけど
ここで私の完全敗北決定しちゃう…ッ！！❤

いいでぇすッ！❤私の負けですッ！❤
奏に完全敗北しちゃいま～すッ！！！❤
だからイキますッ！❤オマ〇コもおち〇ちんも
全部イキます！！❤奏の膣内入れること叶わず
イカされちゃいますッ…！！！❤

ビュビュッ！！❤❤
ビュッ
ビュッ
ビュッ
「あうっ……！？❤❤また膣内に出てるっ！！？？❤奏の精子また膣内に出てるッ～～！！❤❤」
「えへへ❤ごちそうさま❤可愛かったよ、響❤」
「えへぇぇ～……？❤はうううぅ……❤❤」
「……❤」

「あぁ～～♥♥どう響？気持ちいい？♥♥」
「おっ…♥おおっ…♥おおおおっ～～！♥♥」
「そう、それは良かったわ♥私も響のお尻の穴すっごく気持ちいい♥」
「へっ♥へぇっ♥はっ…はっ♥ほおおおっ～～♥♥」

それからさらに一ケ月が経ったが、ネガトーンの襲撃はなかった。

二人はプリキュアに変身することもなくなり、さらに、学校に行くこともなくなって、一日中、夜眠るまでセックスを繰りかえすようになっていた。

「お尻の穴犯してチ○ポ射精させたげる…❤これで響も一回、私も一回…ふふ❤公平に一回ずつだよね？❤」
「はぅっ…❤ず…ズルいよっ…奏…！❤わた…ひんっ！❤私も奏に入れたい…ッ！❤奏の中に入れたいよぉ～～ッ！！❤ひんっ…❤」
「だったら私を先にイカせてみせなさい❤お尻の穴でトコロテンになっちゃわないで、私が射精するまで耐えてみせなさい❤」
「うんっ！❤耐えるっ！❤たえてみせるぅぅ～～～ッ！！❤❤ハァ…❤ハァ…❤」
「あはは❤響が頑張るなら私も頑張らないと❤じゃあいくわよ～❤」
「がんばるッ！❤わたしイかないようにがんばるひょおぉぉぉッ～～！！❤」

「ずんっ❤ずんっ❤ずんっ❤」
「おっ!?❤おっ!❤おおぉッ!❤」
「あはっ❤もうお尻の穴から直腸まで性感帯として開発されちゃってるね❤おま○こと同じように」
「私の度重なるチ○ポ攻撃で響は肉体改造されちゃったんだよ?お尻の穴でセックスできる改造人間になっちゃったの❤どう?お尻穴人間さん❤」
「ハァ…ッ❤ハァ…ッ❤やめて…苛めないで…❤」
「あはは!❤だって響ったら罵れば お尻の穴がキュッと絞まって気持ち良いんだもん♪ マゾ響さんにはこれが一番いいんだよね…ね?お尻穴マゾ響さん❤」
ゾクゾクッ
「はぁぁぁッ~~❤❤」
「うわぁ~❤全身に鳥肌がたった!❤❤ すごい!❤響って本物のマゾだったんだぁ~❤ あはははっ❤❤」
「ちっ…ちがうよぉおぉおっ!!!」

「ねえ、背中に文字書くから、なんて書いたか当ててみて」

「うっうん…❤」

「え～っと～」

「ひぁッ！！？？？❤❤」

「もう、動かないで響」

「ただ、だって…！❤背中…っ…❤せめて、せめてお尻の方とめて…！❤」

「それじゃ意味ないじゃん♪響がお尻の快感に負けてないってことの証明になるんだから❤」

「うう～？そんな意味があったの…？」

「ひゅ～～～っ♪」

「これは…な～んて…書いてあるでしょ～か？♪」

「ひんっ…！？❤ハァ❤ハァ❤くくすぐったいよ……！❤」

「ひ…っ…❤はぁぁんっ……！❤」

「え…えっと……私は……」

「…マゾ…？」

「私はマゾです…？」

「ピンポ～ン❤正解～❤」

「それそれそれそれ❤背中にいっぱい書いてあげる❤」

「マゾマゾマゾマゾマゾマゾ」

「あはは❤」

ゾクゾクゾクッ！

「ッ～～……！！」

「やめて奏ぇぇ～！そんなに書かないでぇ～～！！」

「書けば書くほど自分がマゾであることが肌から身に染みていくでしょ？❤マゾ響さん❤」

「だから私マゾなんかじゃ…」

「それそれ♪マゾマゾマゾ❤」

「はぁぁんッ！❤背中ぁぁぁぁッ～！❤❤」

「もうダメぇぇぇぇぇッ～～～！！♥♥」

びゅっ

「あはは！♥イっちゃったね響…
私チ○ポまったく触ってないのに、お尻の穴責める
だけでピュッと出ちゃったね♪
お腹の下でおもらしピュッピュしちゃったね♥」

「うぅぅぅ～～～…」

「私まだまだイかないから♥うふふ♥
ここで回数稼いで後でたっぷり膣内射精
させてもらお♥」

「ずるいよぉぉぉぉ～～ッ！♥」

「うふふ…♥」

パンパンパンパン！

「おうっ♥おうぅッ♥おおっ♥」

ふふ…やってるやってる…
チ○ポの種の効果で二人ともすっかり
変態行為にドはまりしてるわね…
この調子ならそろそろ
堕とせそうね…❤

『うわー！怪物だぁー！』

「響…！敵だよ！行こう！」

「う…うん！なんだか久しぶりだね…！」

「そうね…。ちゃんと戦えるかしら…」

二人が現場に駆けつけると、そこでは町を破壊するネガトーンと、それを操るセイレーンの姿があった。

「セイレーン！あんたまた悪さして！」

『久しぶりね。おち〇ちん取れた？』

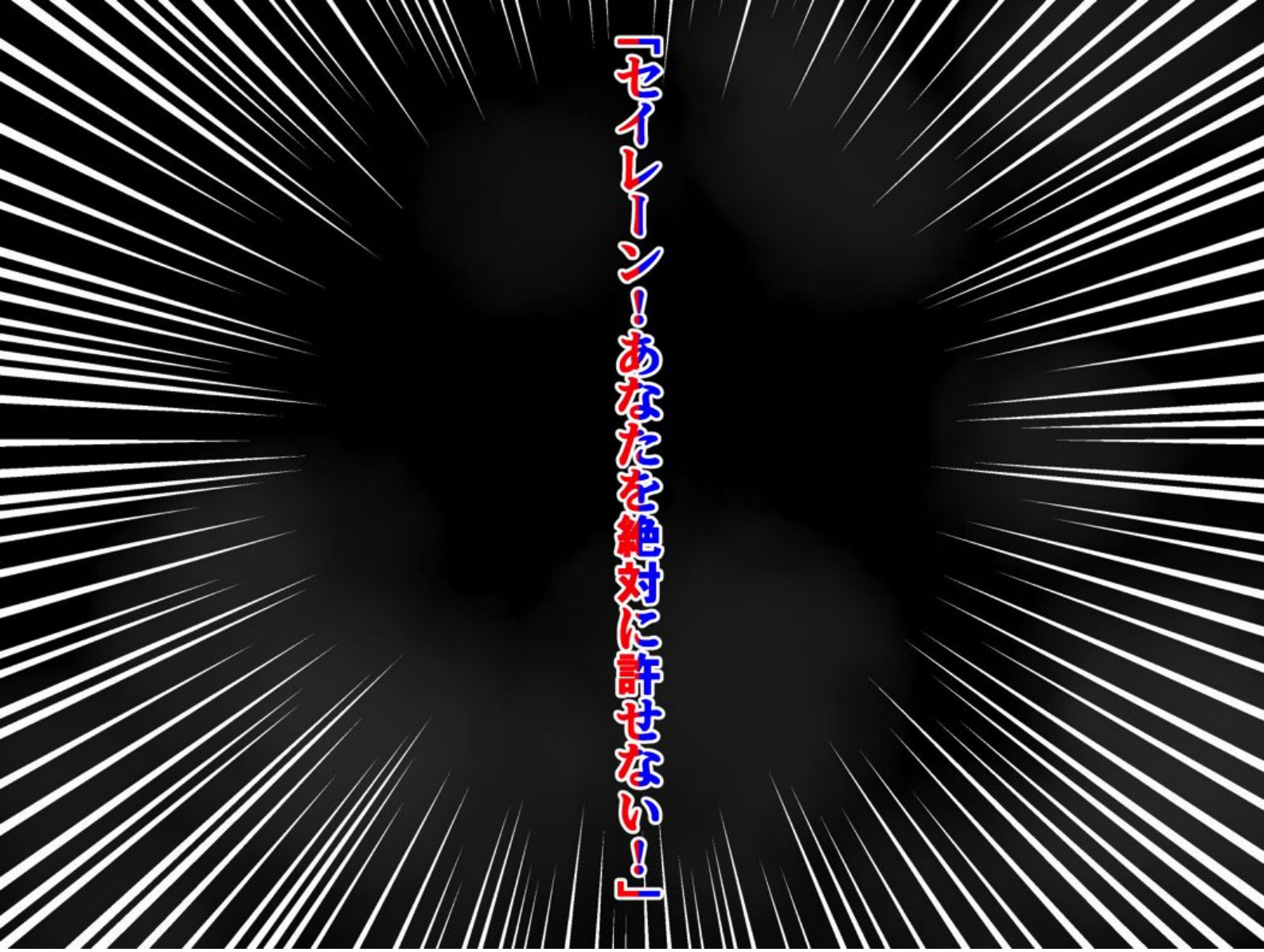
「ぐっ…！」

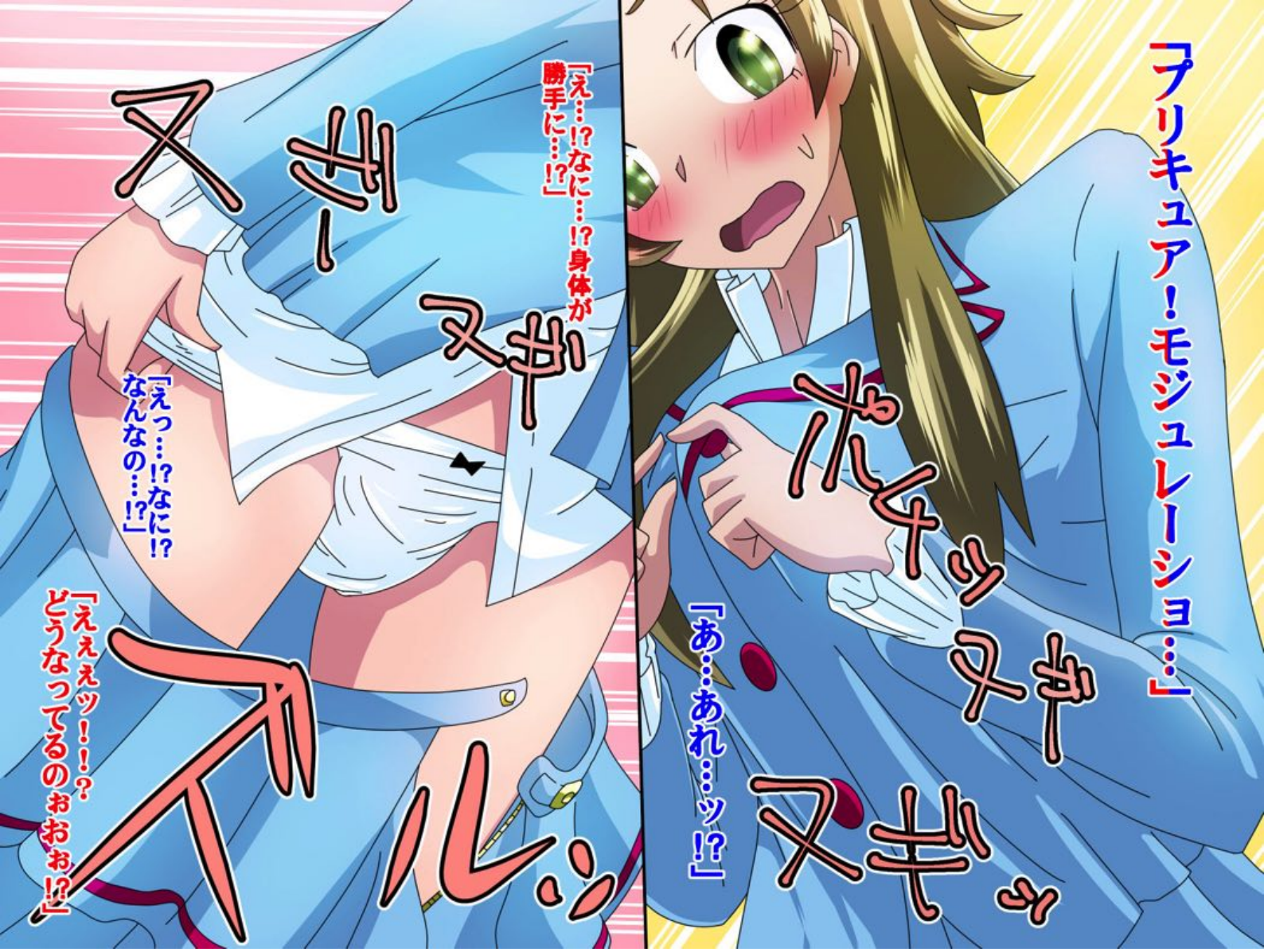
「そうだった…今日はあなたをとっ捕まえてこれを取ってもらわないといけないんだった」

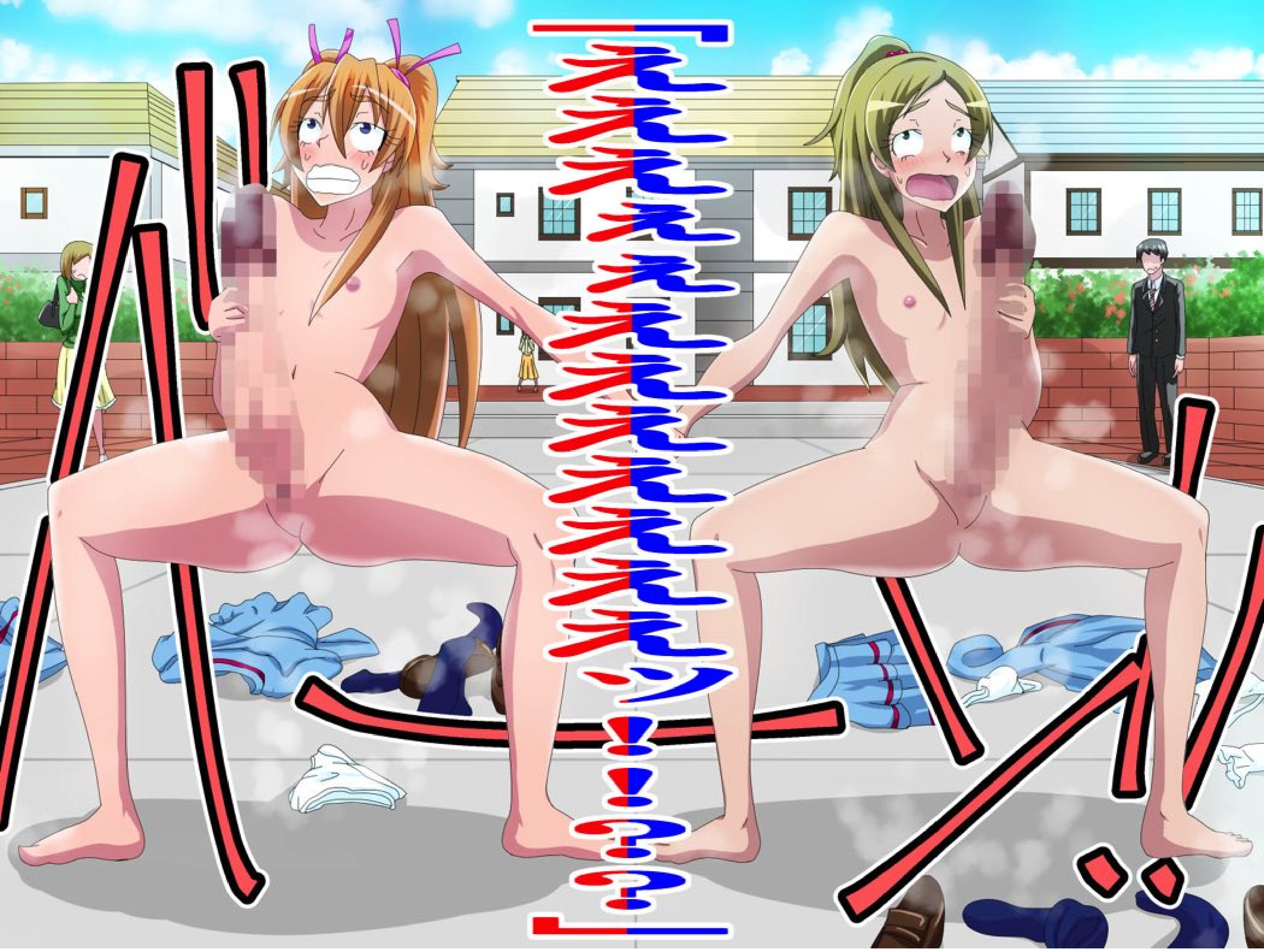
『あはは！できるかしら？』

「響！」

「うん！」


「セイレーン！あなたを絶対に許せない！」


プリキュア！モジュレーショ…」
ポケットッヌギ
ヌギッ
「あ…あれ…ッ!?」
「え…!?なに…!?身体が勝手に…!?」
ヌギ
ヌギ
ヌギ
「えっ…!?なに!?なんなの…!?」
「えええッ！！？どうなってるのぉおぉ!?」


「えええええええええええええッ!!??」
バッ

「あはははッ！！大成功！！❤」

「ひぇぇッ！？どうなってるの…!?
身体が動かない…！？やだ…！皆が見てる…！」

「セイレーン…あんた…！
これは一体どういうことよッ！？」

「この前あなた達二人にチ○ポをつけた
時に、変身のための条件を改ざんさせてもらったの」

「変身の条件を改ざん…!?」

「そう♪魔法といってもプログラムだからね、
いくらでも書き換えられるのよ。
普段は二人が声を合わせると
自然にプリキュアの衣装に変身がされていくわ。
だけど、それを私好みの変身シーンに
変えさせてもらったの…」

「あなた達がプリキュアに変身するには…
二人が同時に射精しないと変身しないように
してあげたのよ❤」

「な…なんですってぇぇぇぇぇぇぇぇッ！！？？」

「あひっ…❤手っ…手が勝手に動き出した…!?」
「ひぃッ…!?」
「さあ、そこで皆が見てる前でシコシコなさい！プリキュアに変身して皆を守るためにね！」
「や…やだっ…！み…見ないで…ッ…！」
「あわわ…ここ、こんなことって…」
「ねえ見て…あの二人…なにやってるの…？」
「あの脱ぎ散らされた制服って…」
「わ…わぁぁあっ！！！見られてる…！見られてるよ奏ッ！！！」
「バ、バカ響！名前出さないでよ！？」
「かか、奏だって…！ど…どうしよう…！！！やだ…！こんなの絶対やだぁぁぁぁあッ！！！」
「私だって…！ひんっ…❤ひぃ…❤手…手止まらない…！❤」

「アハハハハ！とんだブザマな姿ね！正義の戦士プリキュアが変身するために股間の大きなオチ○ポを公衆の面前でシゴくなんて！」

「い…いやぁぁ…」

「おやおやぁ～？南野奏さんのほうはずいぶんと顔を真っ赤にして恥ずかしそうねぇ～。お友達には恥ずかしいこと沢山させたけれど、自分は初めてなのかしら～？あはは、友達には勝てても このセイレーン様には勝てなかったわね❤」

「あくッ…！！」

「ほぉら、北条響さんもイっていいのよ？あなたずいぶんとマゾだからこういう羞恥的なプレイ大好きなんじゃないの？」

「だッ…誰がマゾよっ…！！」

「ほら、皆があなたの痴態を見てるわよ❤前は女の子のくせに生えた大きなチ○ポを、後ろからはあなたのお尻の穴を❤」

「はうぅぅぅッ…！？❤」

「あはははは！オチ○ポもっと大きくなった！❤本当にマゾ豚なのね！❤」

「はうっ！！❤❤❤」

「響！こんな時にマゾ発揮するのやめなさい！」

ビクウ!?

「あはは！奏さんに叱られてまたち○ぽギンギンになったわ！❤ほんっと呆れるほどのマゾなのね」

「響のバカぁぁぁ～！！なんで怒られて興奮するのよぉ！変態マゾ！変態！変態ドマゾ響！！」

「ひぎぃッ～❤❤ひゃ…ひゃめてぇきゃなでぇぇ～…❤わらひ…ののひられたらあたまくらくらなっひゃう～～…❤❤」

「もぉおぉぉおおッ～～！！！」

「一ケ月以上チ○ポの根が脳に絡みついて成長してるからね。心の奥底にある本来の性癖が解放されちゃってるの。北条響さんは超絶ド変態マゾ豚に。一方、南野奏さんは超サディスティックに、ね❤」

「だから響はいつもダメなのよ！ダメ響！今度私が鍛えなおしてあげるわ！チ○コにリングして射精できなくしてシゴき倒してあげる！豚みたいに卑しく泣き喚くまで許してあげないんだから！」

「ぎょ…ぎょめんらはいかなでぇぇ～～…❤」

「あはははは！変態同士収集つかなくなっちゃってるわね♪」

「ほら、もうイっていいのよ？変態マゾ豚響さん❤あなたの汚ったない激クサせーしシコシコぴゅっぴゅってしちゃいなさい❤公衆の面前でおしっこみたいにザーメン漏らしちまえこのマゾ豚！！」

「ダメ！イっちゃだめ！マゾはマゾらしく我慢なさい！響！」

「あへぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～…❤❤❤」

「ごめんらはぁぁぁいっイきまぁぁぁぁぁすっ～～～！！♥♥♥」
「ああっ響ッ！！」
びゅるっ
「あはははは！いい子いい子♥
そうよ、イきたい時にイケばいいのよ♥
響ちゃんはいい子でちゅね～♥」
「え…えへへへへえええ～～…♥」

「んくっ…！私もイくっ！！」

ビュルルッ！

「はいざんね～～んっ❤同時に射精しないと変身は完了しないんでぇ～す❤ふふふっ❤」

「えっ…そそ…そんなぁ…！」

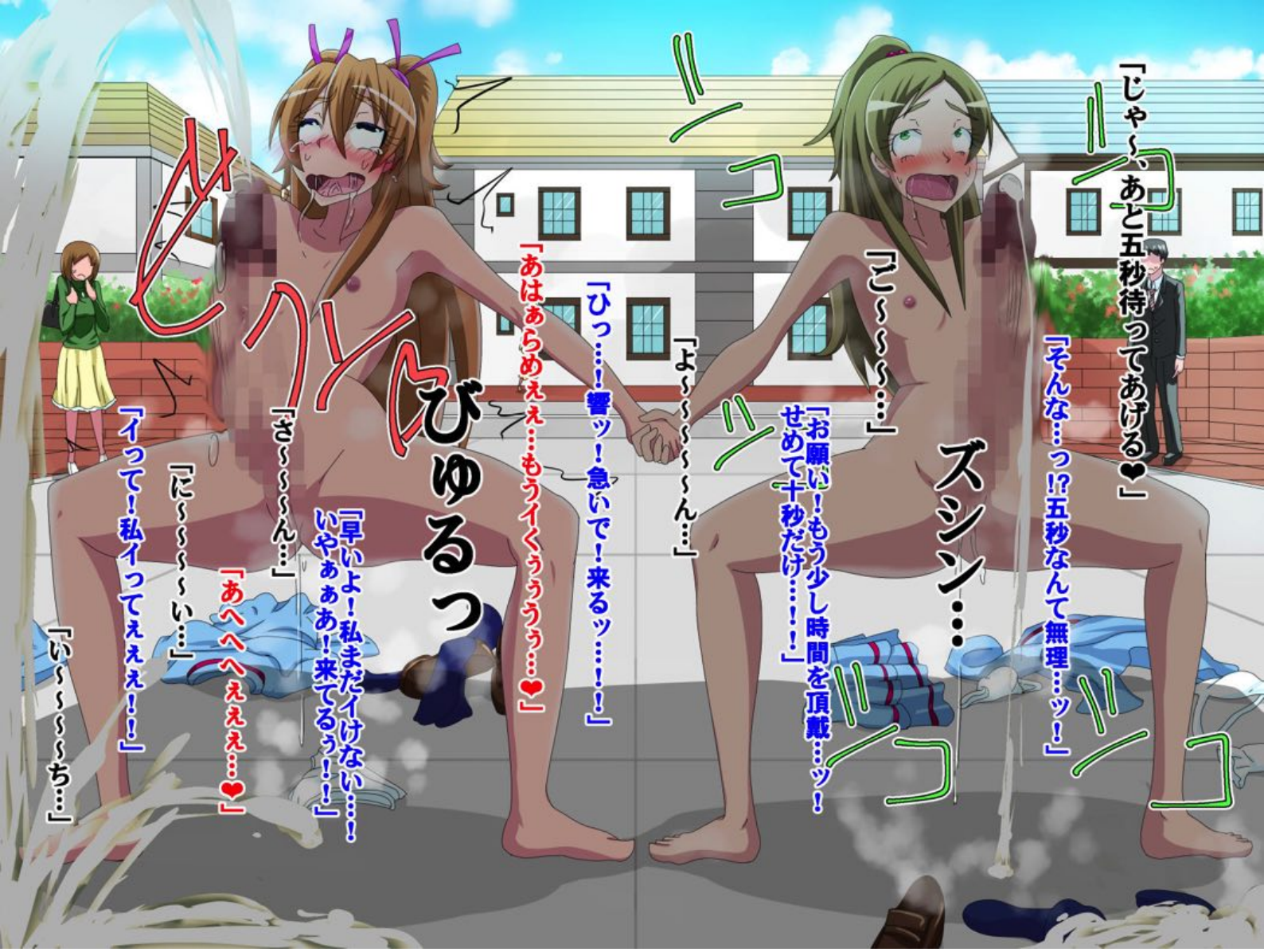
「だいじょうぶらよ…かなで…っ❤次はいっしょにいこっ❤いっしょにシーシーしよっ❤ふへへ…❤」

「そ、そうね！イったばかりだけどがんばって…シコシコシコ…！！」

「あはははは❤もうなりふり構わずね。で～も、いい加減そっちのターンが長すぎるから、今度はこっちからいっちゃおっかなぁ～？ふふっ❤」

「ひっ…！ま、待って…！もう少しだけ待って…！！」

「う～ん、どうしようかなぁ～…」


「じゃ～、あと五秒待ってあげる❤」
「そんな…っ!?五秒なんて無理…ッ！」
ズシン…
「こ～～～…」
「お願い！もう少し時間を頂戴…ッ！せめて十秒だけ…！！」
「よ～～～～ん…」
「ひっ…！響ッ！急いで！来るッ…！！」
「あはぁらめぇぇ…もうイくぅぅぅぅ…❤」
びゅるっ
「早いよ！私まだイけない…！いやぁぁあ！来てるぅ！！」
「さ～～～ん…」
「あへへへぇぇぇ…❤」
「に～～～～い…」
「イって！私イってぇぇぇ！！」
「い～～～ち…」

「ブー！時間切れ～！」
ドゴンッ
ぷち？
「ぷぎゃっ!!」

「あはははははは！
勝負あり、ね❤」
ビク…ッ
「あ……あ……」
ビクッ…
ビク…
「あ……あ……」
ビクッ…

「クスクス❤ブザマな姿ねぇ～！
プリキュアに変身することもできないまま
大股おっぴろげて敗北だなんて」
「あはは❤それでもチ◎ポだけは
ビンビンね❤痛気持ち良かった？」
「あなた達終わってるわ。
嫌悪するほどの変態プリキュアね」
「ほ～んと、女の子としても人間としても
終わってる。こんなのがプリキュアだと知れたら
町の人たちはがっかりするでしょうね」
「でも今回は…」

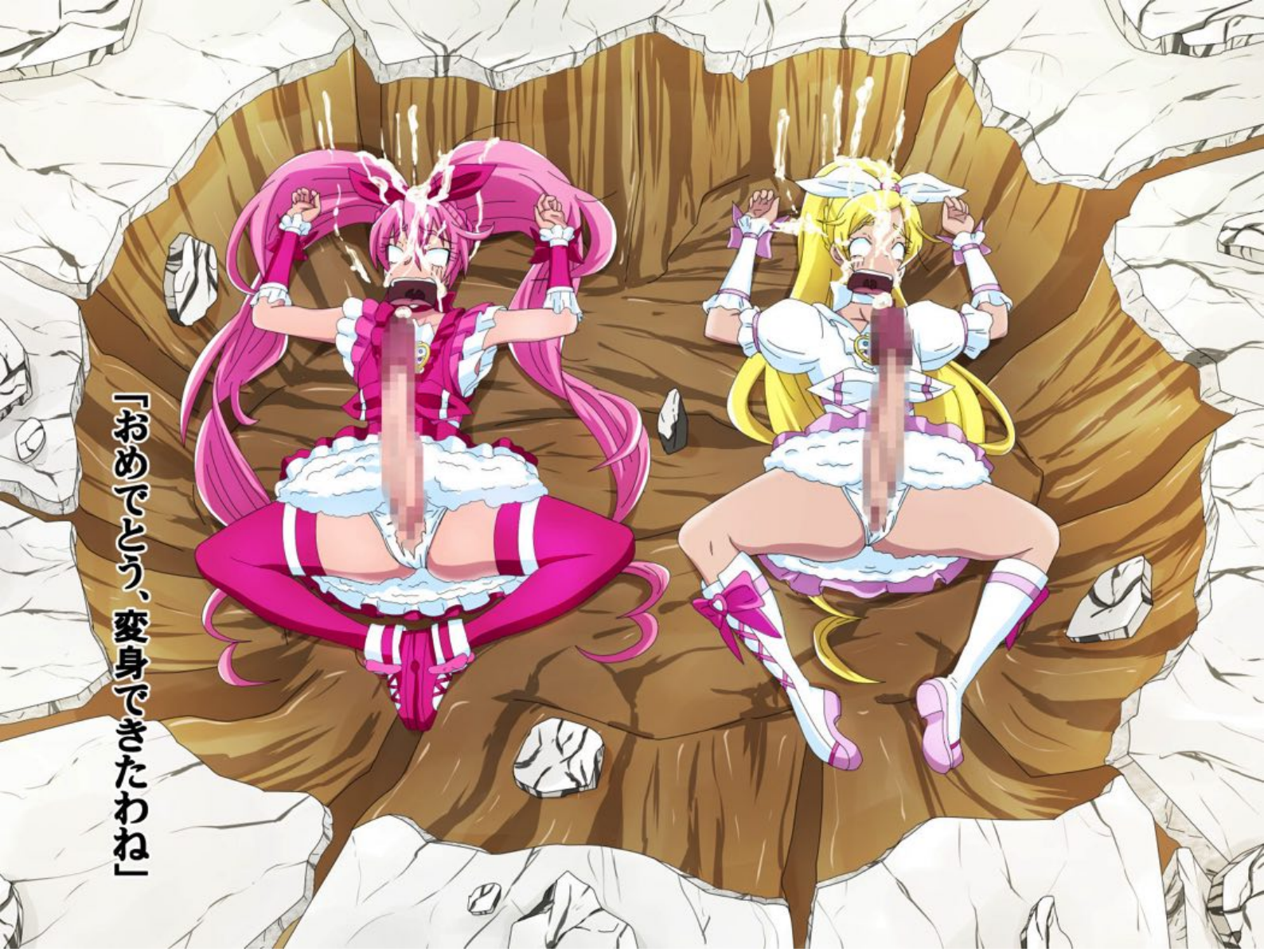
「あえて皆の前で変身させて
プリキュアの正体をバラしちゃいま～～っす♥♥」
ぶちんっ
「もげぇッ!!」

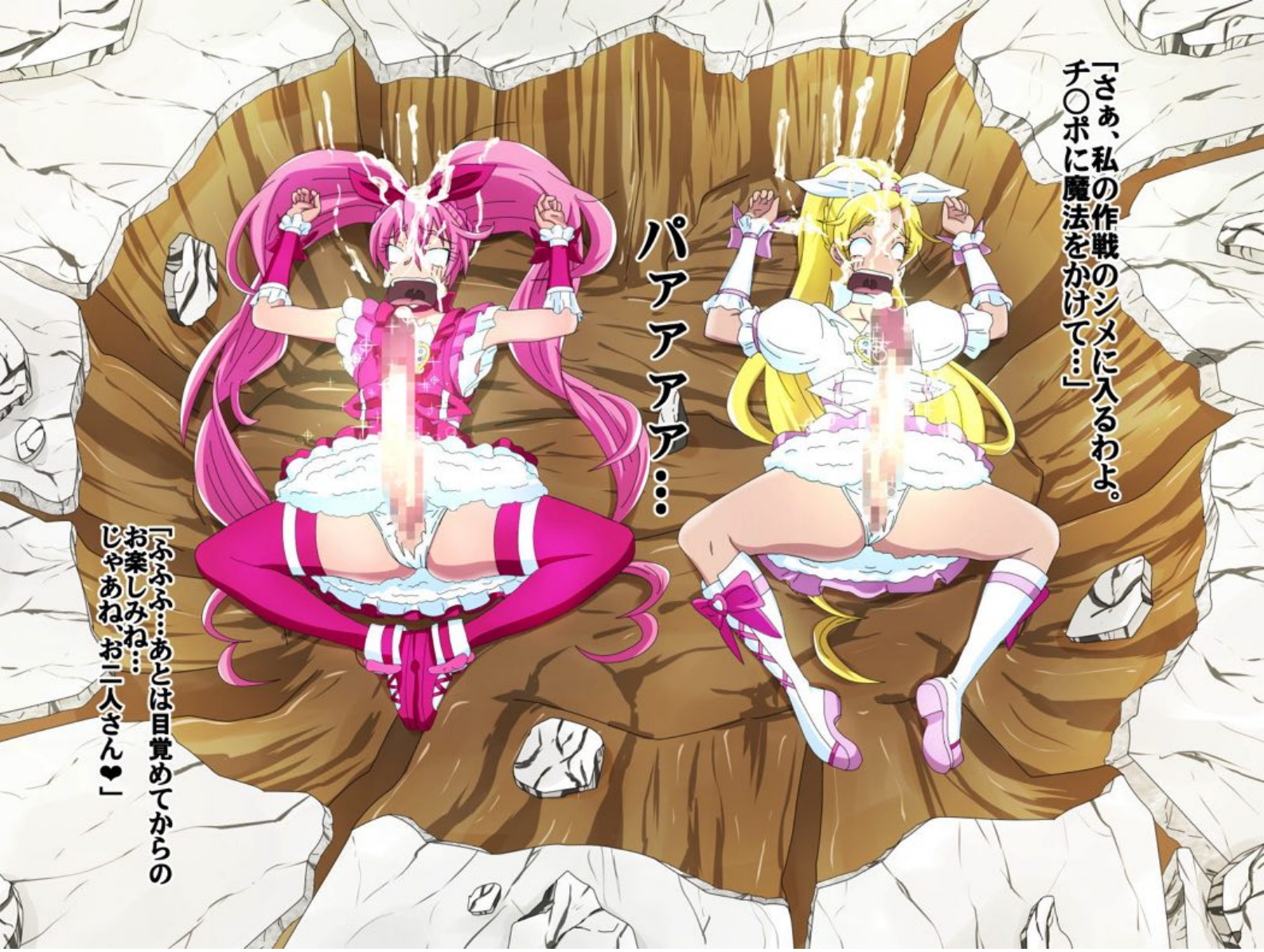
ドゴンドゴン!
「ぶべっ!?おごっ!!」
「ごっ!?ごっ!?ごぉおッ!?」
「きゃっ!!きゃっ!?」
「ネガトーン!チ○ポだけうまく刺激するように殴りなさい」
「…ッ~~!!」
ボコ
ボコ
ボコ
ボコ

ボコ
ボコ
ボコ
ボコ
ボコ
ボコ
ボコ
ボコ

びゅっ
びゅるっ…

ア
ア
ア


「おめでとう、変身できたわね」


「さぁ、私の作戦のシメに入るわよ。
チ○ポに魔法をかけて…」
パアアアア…
「ふふふ…あとは目覚めてからの
お楽しみね…
じゃあね、お二人さん❤」

二人が公衆の面前で巨大なペニスをシゴいている写真と、プリキュアに変身して気絶している姿の写真が、瞬く間に世界中に拡散されてしまった。

二人は外出するのが怖くなり、家にひきこもってしまう。

だが、その間ももちろん、股間のペニスは疼いたままだった。

「ハァ…！ハァ…！ど、どど、どうして…!?
擦っても擦っても射精できない…！！」

ハァ…！

ハァ…！

「ハァハァ…！」

「イってぇ～～…！！
気が狂いそうよぉ～～…！」

「どうなってうのぉぉぉぉぉ～…！！」

ぜェ…

ぜェ…

「ぜぇぜぇ…！」

「イかせてぇぇぇ…！イかせてよぉぉぉぉ…！」

二人はどれだけ擦っても射精できなかった。
セイレーンがかけた魔法は「射精禁止」。
お腹の底からこみ上げるどうしようもない性欲…。
唯一の発散のすべである射精ができなくなった
二人は、他の何事も手をつけることができなくなる。
一日中、射精を求めて、ペニスをシゴき続けた。

「おま○こイキじゃ満足できないの…！
ち○ぽイキたいのよぉぉぉぉぉぉ！」

「ち○ぽ…！ち○ぽ…！ち○ぽ…！
ち○ぽぉぉぉぉぉぉ～～ッ！！」

「頭おかしくなっちゃうよぉぉぉ…！！
お願い…イって…！！ち○ぽイってぇぇぇ…！！」

「だめだぁぁ～～！！イケない！！
助けておち○ちん助けてぇぇぇぇ～～！！」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁッ～～！」

「イけないいいいいいいいッ～！！」

何日も射精できないままペニスを擦り続け、
それでも射精することはできない。

数日経ち、ふたたび町にネガトーンが襲撃してきた。
二人は射精したい欲求で足もとフラフラのなか、
ネガトーンと、それを操るセイレーンのもとに出向いた。

「セ…セイレーン…！」
「おやぁ？北条響さんと南野奏さん。
ご機嫌いかが？」
「い…いい加減にしなさいよ…！私達のおち〇ちんにかけた
魔法を解きなさい…！」
「うーん、どうしよっかな～？」

「ちゃ～んと手をついてお願いできたら
魔法解いたげる♥」

「ふっ…ふざけんじゃないわよッ！」

「そうよ…！いい加減にして！」

「チッ…なに？その口の利きよう。
別に私はこのままでもいいのよ？どうせ
私が許可しないとあなた達は変身できない、私にとっては
その方が都合いいんだから」

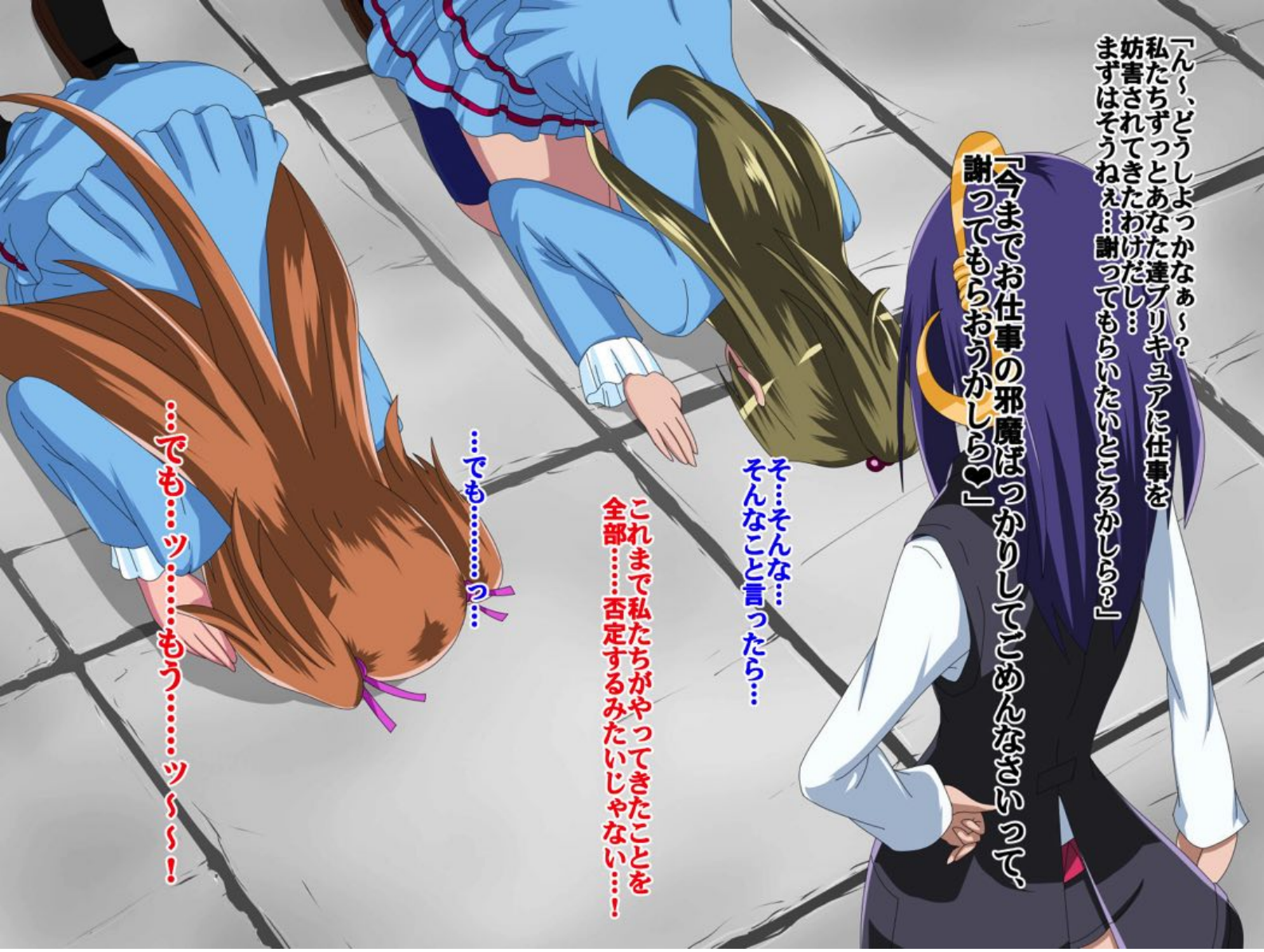
「ッ～……」

「このまま一生射精できないまま、ツラ～イ一生を
送ってくれてもいいんだよ？ん？」

「う……ッ…」

「さ、どうするの？
今なら魔法を解いたげる。ちゃ～んとお願いすることが
できたらね？」

「おっ…お願いします…ッ！！！
おち○ぽにかけた魔法を解いてください…！！」
ガバッ！
「お…ッ…お願いします…ッ！！！！」
ガバッ！


「ん～、どうしよっかなぁ～？
私たちずっとあなた達プリキュアに仕事を
妨害されてきたわけだし…
まずはそうねぇ…謝ってもらいたいところかしら？」
「今までお仕事の邪魔ばっかりしてごめんなさいって、
謝ってもらおうかしら❤」
そ…そんな…
そんなこと言ったら…
これまで私たちがやってきたことを
全部……否定するみたいじゃない…！
…でも……っ…
…でも…ッ……もう……ッ～～！

「今までお仕事の邪魔ばかりしてごめんなさいッ!!!!!」

「あっははは❤声がしっかりそろったわね。さすがだわ。じゃあもうプリキュアは辞めるわね？」

!?…ど、どうしよう……！
ねえ…響…！

響…!?

「ハァ…！❤ハァ…！❤」

「ひ…響……ま、まさか…」

「辞めますっ！わ、私プリキュア辞めます！」

「い、今を持って辞めますっ！だ、だから…射精させてくださいっ…！！」

「ひ…響イ…！」

「ハァハァ…！❤❤」

ヘブ…

だ…だめだ響はもう完全に堕ちてる…！

「うふふ❤はい響ちゃんは降参ね❤そっちはどうするのかしらぁ？」

「ッ……～～！！」

あ…抗えない…！
抗えるわけないじゃない…ッ！

だって性欲ってこんなにも
苦しいんだよ…！

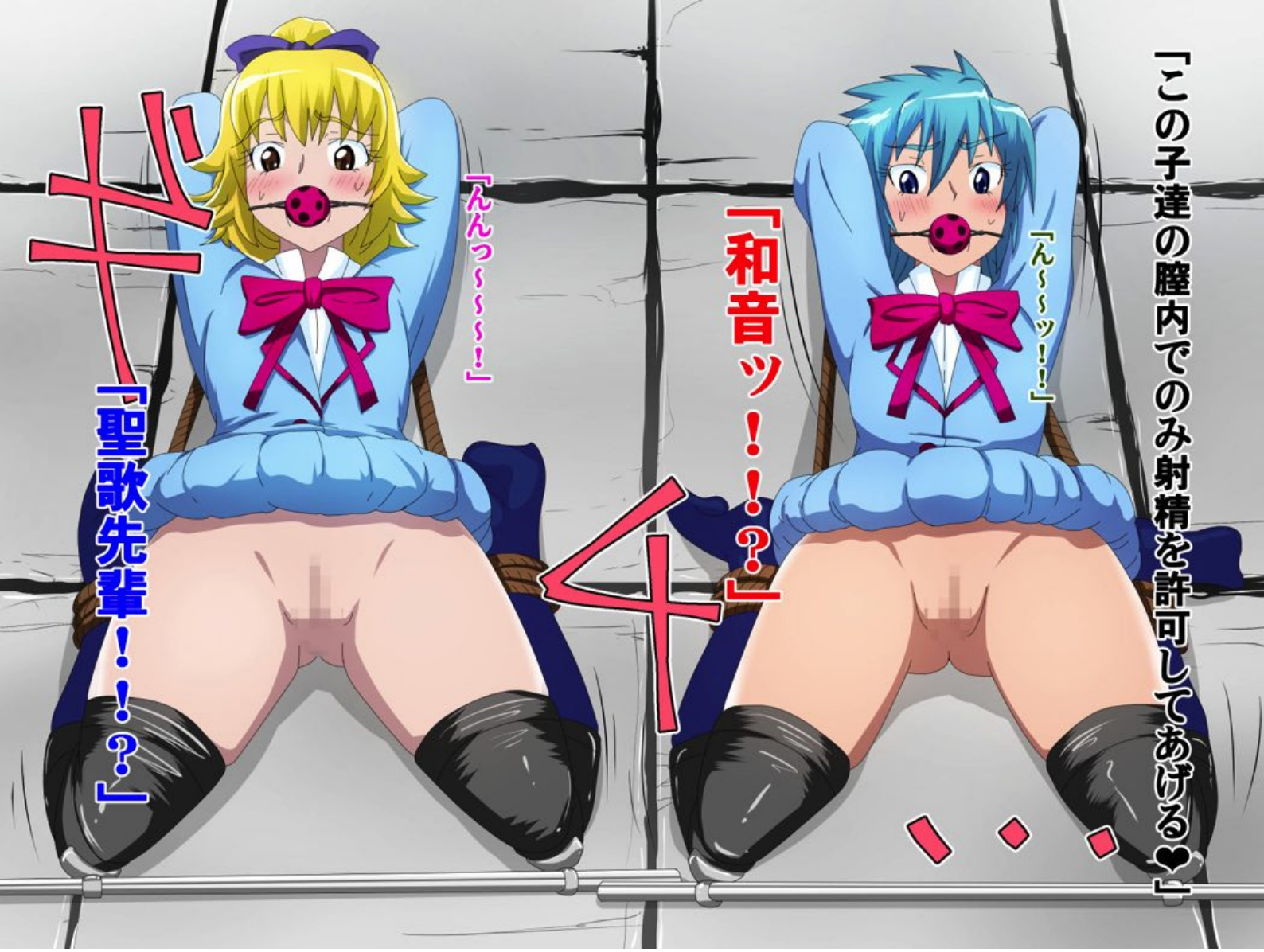
おち○ぽの先から…根元からお腹へと…そして
脳髄へと突き刺さるような強力な焦燥感…
この何日かそれを発散できずに今ドロッと豚骨スープの
ように私の中に溜まった濃厚な性欲…！

これは全てセイレーンの作戦だったんだ…！
私たちはまんまと嵌められた…！

なんて人…
この人は策士…

私もこんな人になりたい…❤

「…はい…。私もプリキュアを今日で辞めます…！だから…私も射精させてください…！！」
「あは❤決まりね！いいわ！二人とも射精させてあげる❤」
「……❤❤」
「ハァ…ハァ…❤❤」
「つきて来なさい」


「この子達の膣内でのみ射精を許可してあげる❤」
「ん～～ッ！！」
「和音ッ！！？」
「んんっ～～～！」
「聖歌先輩！！？」

「さぁ、どうしたの？この子達の膣内でしか射精させてあげないのよ？ふふ…❤」

「で…でも…っ……」

「ふぅ…！ふぅ…！」

響…！最近様子がおかしかったのはそういうことだったんだね…！でも惑わされないで…！

響ならそんな奴の魔法くらい打ち勝てる…ッ！！

南野さん…！その姿はいったい……

まさか…その大きな男性器を私たちのヴァギナに入れたりしないわよね…？

「だ…っ…ダメだよ…こんなの…！
和音の大切なところに突っ込むなんて…！」

「あらぁ…それは残念ねぇ…」

その調子響！そんな奴の顔面
グーパンチしちゃえ！！

「でもホント～にいいの？見てごらん？
あのクサそうなオマ〇コ❤」

「…っ…!?」

ッ…～!?

「スポーツ少女なんでしょうね、
すっごく恥垢が溜まってる…。
きっと汗で濡れてるのを放置して
発酵したんでしょうね、ほら、
ここまでにおってくるわ…」

ッ～～！！！

「身体も汗臭いわ…。彼女の体液が
服に染み付いて女の子のにおいがほら、
むんむんと漂ってる

「ハァ…ハァ…ッ❤」

響…響ダメッ…！！

「彼女に挿入したら彼女のにおいを
嗅ぎ放題よ？彼女の首筋の汗のにおいから
お尻の穴のにおいまで、ね？❤」

「ハァ…ハァ…ッ❤❤」

「えへへ…ごめんねぇ…和音…❤
でも…和音なら許してくれるよね…❤」

「んん～～～ッ！！！！」

「すいません…聖歌先輩…❤
でも…先輩のそのお姿……とってもスイートです…❤❤」

「んんん…ッ…」

「さあ！やりなさい！二人とも！」

「えへ…❤じゃあ…和音…挿入するよ❤」

「ん～～～～～ッ！！！」

やめて…！響！やめてぇ！！

「大丈夫だよ…❤ハァハァ…❤私のカウパーでおま○この中ネチョネチョにしてあげるから…❤すぐ痛くなくなるよ❤」

ぐちゅ…

「んっ…!!」

「聖歌先輩…❤こっちも入れますよ❤」

「っ!?」

だ…だめです…！南野さん…！

グニュッ…

「あはぁ…❤この挿入する前って最高…❤これからこの肉穴にち○ぽ突っ込んで掻き乱せると思うと…❤聖歌先輩の女の子の秘穴…私の巨大ち○ぽで犯してさしあげますね…❤」

「っ…！」

「えいっ！！❤❤」

ズンッ

ホホホ

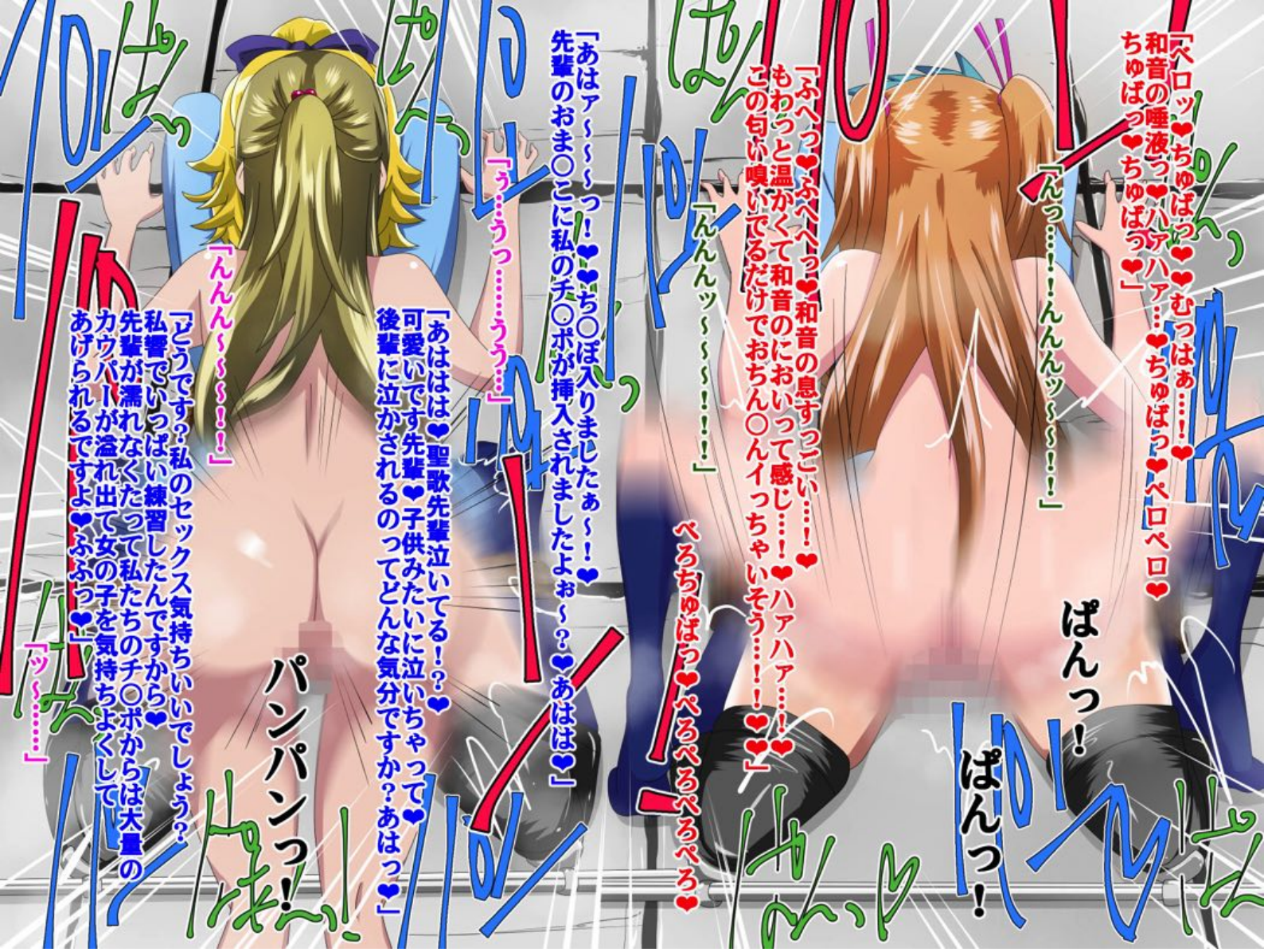
「ギニャアアアアアア！！！」

「それえっ❤❤」

グジョッ！

チョン！

「んあああああッ～～～！！！」


「ペロッ❤ちゅぱっ❤❤むっはぁ…！❤
和音の唾液っ❤ハァハァ…❤ちゅぱっ❤ペロペロ❤
ちゅぱっ❤ちゅぱっ❤」
「んっ……！んんんッ～～！！」
ぱんっ！
ぱんっ！
「ふぺっ❤ふぺぺぺっ❤和音の息すっごい……！❤
もわっと温かくて和音のにおいって感じ…！❤ハァハァ…！❤
この匂い嗅いでるだけでおちん○んイっちゃいそう…！！❤❤」
「んんんッ～～～！！！」
ぺろちゅぱっ❤ぺろぺろぺろぺろ❤
「あはァ～～～っ！❤❤ち○ぽ入りましたぁ～！❤
先輩のおま○こに私のチ○ポが挿入されましたよぉ～？❤あはは❤」
「う…うっ……うう…」
「あははは❤聖歌先輩泣いてる！？❤
可愛いです先輩❤子供みたいに泣いちゃって❤
後輩に泣かされるのってどんな気分ですか？あはっ❤」
パンパンっ！
「んんん～～～！！」
「どうです？私のセックス気持ちいいでしょう？
私響でいっぱい練習したんですから❤
先輩が濡れなくたって私たちのチ○ポからは大量の
カウパーが溢れ出て女の子を気持ちよくして
あげられるですよ❤ふふっ❤」
「ッ～……」

「うっひょぉぉぉぉッ～～和音わおんっベロベロ！❤❤」
「ッ～～～！！」
響…これが響なの…？
これじゃただの変態…！
「おいしい～！❤和音の生臭い唾液おいしいよぉ！ベロベロベロ！❤」
「鼻息もっとフハフハさせていいよぉ❤全部私の鼻で吸い込んでアゲルから！❤」
き…気持ちわるい…！
「ベロベロベロベロッ！❤んはっ❤ちゅっ❤フハフハフハっ❤❤和音の匂いも味ももう全部サイコ～ッ！❤」
「ッ～～～！！！！」

「先輩❤目を瞑ってないで、私の眼をよ～く見てください❤ほら、眼を開けて❤」
「…っ…」
「あはっ❤先輩の瞳、すご～く綺麗…❤先輩が気持ちよくなれるように催眠術かけてあげますね❤」
さ…催眠術…？
「そう❤私やったことないけど得意なんです❤」
な…なに言ってるの…？
「あなたは段々眠くな～る…❤あなたは段々眠くな～る～❤」
そんな古典的な…かかるわけないじゃない…

「もも、もうダメっ❤イきそう……！！❤だって考えたら私…はじめてオマ○コに…っ❤私卒業しちゃった！❤私いつの間にか童貞卒業しちゃってる！❤嬉しいっ！❤射精しちゃうよっ！❤和音の膣内に出しちゃうからねっ！❤」

ブビュ

やめて…！やめて響！！！

「もうダメッ～！❤イクっ❤最高だよぉ～！❤何日も溜め続けた特濃精子を和音の膣内に爆発させられるなんてッ！❤」

「するのかなぁ～？女の子の精子でも妊娠ってするのかなぁ～？❤❤」

「んんんッ～～～～～～！！！！！」

「出しちゃうっ！大丈夫だって！❤そう簡単に妊娠なんかしないって奏が言ってた❤だから出すよ！❤」

パンパンッ！

助けて……！いやだ……！妊娠なんかしたくない……！

「イクぅううっ！❤イクよっ❤射精すからねッ！❤」

「ん～～～～～ッ！！！！！」

「あはあああッ～～～！！！❤❤」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおっ～～～！！！！」

ビューーーーーッ！！！

ビューーー！！！

「んんんんんんッーーーー！！！！？」

ビュッ！！ビュッ！ビューーッ！！

ビュッ♡

ビューッ！ビューッ！ビュッビュッ！

ビュッ♡

ビュッ♡

…ビュッ❤

「ッ～～～…」

ビクッ♡

「っんは～～～～～～っ…❤」

「あなたはも～っと気持ちよくなる～❤
あなたはも～っともっと気持ちよくなる～～❤」

「ん～～～～ッ！！❤❤」

かかっちゃった！❤
私南野さんの素人催眠術に
かかっちゃってる…！❤

「んふぅ～～！❤んふぅ～～！…❤」

「私の瞳を見つめれば見つめるほど気持ちよくなる～❤あは❤」

んん～！いやぁぁ！なぜか目が離せない～！！

だめぇ～～！❤やめてぇぇ！❤これ以上気持ちよくなったら
壊れてしまいそう…！❤もう催眠術かけないでぇ～～！❤

「私がひとつ数えるごとに快感は増していき
3つ数えた時に先輩は絶頂しちゃう❤」

「んん～～ッ！！！」

やだ…！おかしくなっちゃう…！❤
数えないで…！❤私壊れちゃうぅぅ！❤

「さ～～～ん❤」

「ん～～～ッ…！❤」

「に～～～～～っい❤」

「い～～～～ち…」

ッ～～～～～！！！！❤

「ゼロっ！！！！」
ビクビクンッ！❤
「ンッ～～～！！！！！❤❤」
「あはっ!?❤ほんとにイった!?
すごい！でもまだまだ終わりませんよ！
ゼロっ！！！！！❤」
「ンンン～～～～～～～ッ!?❤❤❤」
ビクンッ！！❤❤
「ゼロッ！！ゼロッ！！！！❤❤❤」
「ンッ！？❤ンンッ！！？？？？❤❤」
ダメッ…！頭吹っ飛ぶ…！❤南野さんがゼロと
言うたびに脳内爆発するっ!??❤❤
「あはは！❤もっとイけイけ！❤
ゼロッ！ゼロッ！ゼロッ！ゼロッ！❤❤」
「ンンンンンンッ～～～～！！！！！！！！❤❤」

一時間後…

はい、そろそろ終わり！

「う…ッ……」

「はい…♥」

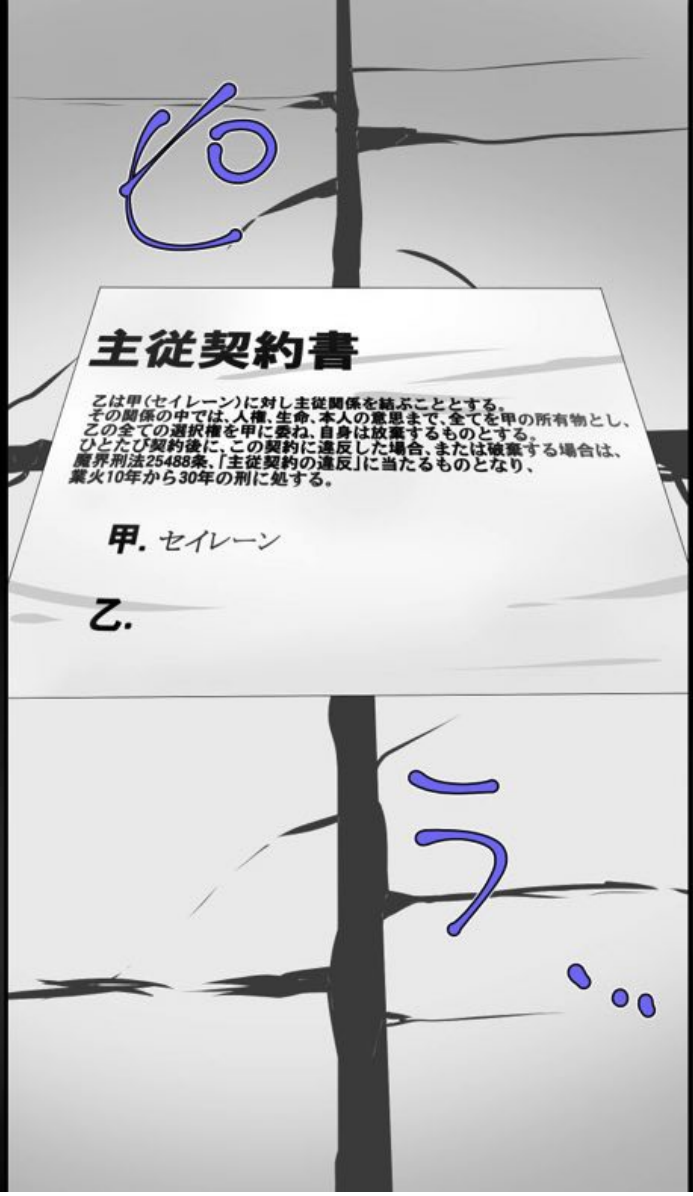
「おお……お……♥」

ビク…

ビクッ…

ビクッ…

「ハァ…ハァ…❤」
「お友達にあれだけ膣内射精してもまだ射精したりないみたいね」
「お願いします…まだ射精させてください…」
「わ…私もお願いします…全然射精し足りない…」
「そうね…だったら、これにサインすれば射精制限の魔法を解いてあげてもいいわよ？」



「これは…」
「魔界契約書」
「魔界の主従契約で、一度契約を交わせば主を裏切ることはできなくなる。つまり、私が今日からあなた達の主になるの。どうかしら？」

「さぁて。どうする？
私への一生の忠誠を誓う？」

「女の子を犯すお仕事や、調教のお仕事…
たくさん与えてあげるわよ？」

「っ～……❤」

「ほかにも…クス…」

「私がた～～っぷり、エッチな技…
教えてあげたりしちゃって？❤」

ハァ…♡

ハァ…♡

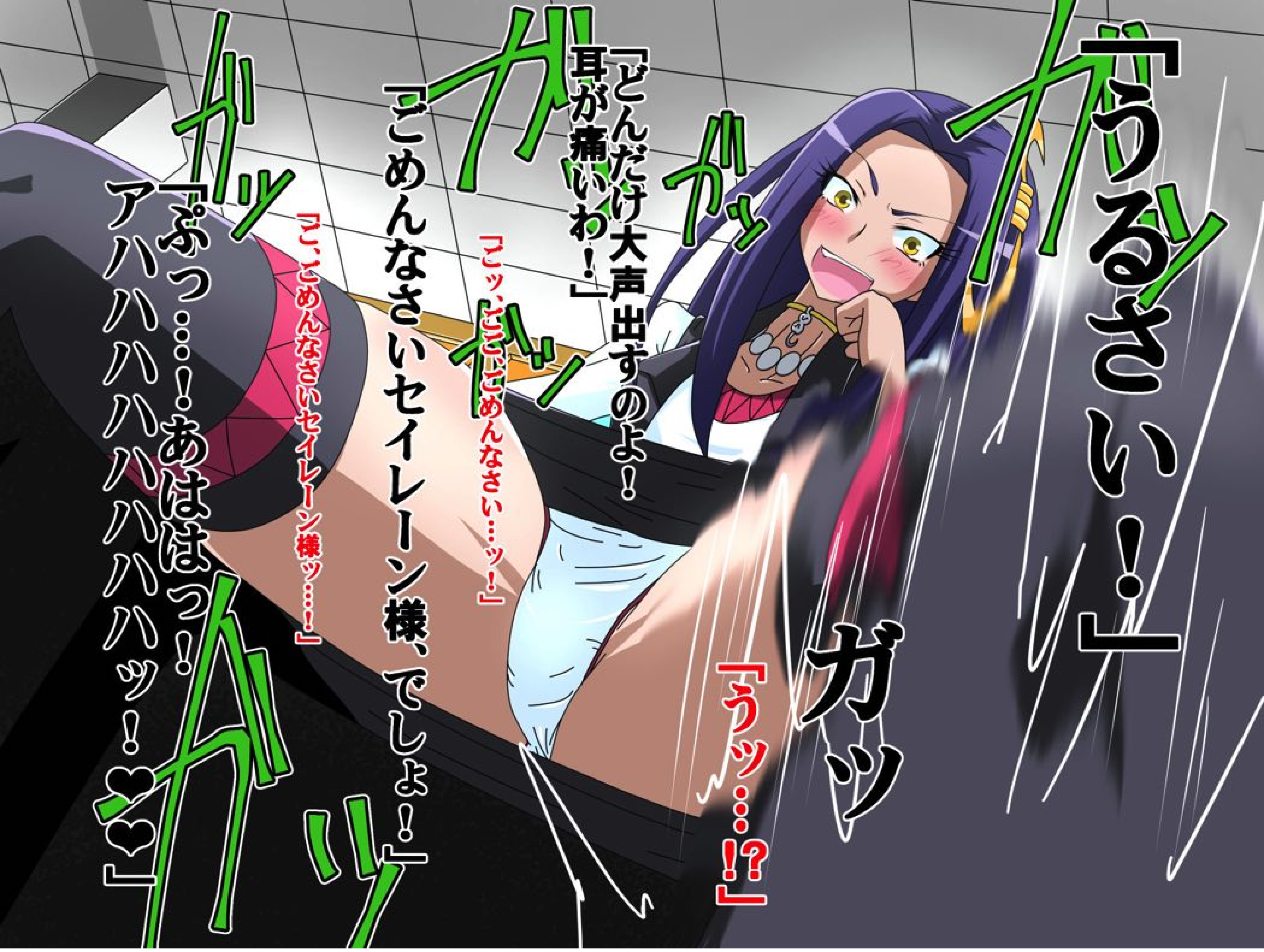
「ッ…！❤❤」

ガバッ
カリカリカリ…
「ふふ…」
グリ…
「決まりね」

「こうして見ると滑稽な姿ね…
ふふっ…オナニーしたさに敵に服従する
そのブザマな姿」
「ふふ…これで二度と私の命令には逆らえない…」
「当然プリキュアは完全廃業❤
これからは私の命令にしっかり従いなさい」
「わかったわね？響、奏」

「はい…❤」
「わかりました…❤」
「私のことはセイレーン様と呼びなさい。ほら、言って」
「…セイレーン様」
「声が小っさい！もっと大きな声で！」

「せ、セイレーン様！」
「もっと！」
「セイレーン様ッ!!」
「んもう！どうしてその程度の声しか出ないの!?いい加減やってると頭踏み潰すよ!?」
「セイレーン様ッ!!」
「もっと出しなさい!!」
「セイレーン様!!」



ガッ
「うるさい！」
ガッ
「うッ…!?」
ガッ
「どんだけ大声出すのよ！
耳が痛いわ！」
ガッ
「ごッ、ごごごめんなさい…ッ！」
「ごめんなさいセイレーン様、でしょ！」
「ご、ごめんなさいセイレーン様ッ…！」
ガッ
「ぷっ…！あはっ！
アハハハハハハハッ！❤」
ガッ

「こんなことされても私に歯向かえない！私ついにプリキュアに勝ったんだ!!」

「私の完全勝利！完璧なる作戦勝ち!!」

「うッ…!!」

「ぐッ…!?」

「ほらほらどうしたの!? 反抗してみなさいよ!? アハハ！できないわよねぇ!? もう契約が締結されてるものねぇ!?」

「私に反抗的な態度が取れないでしょ!? これが本物の主従契約よ！」

「あッ…!!」

「あなた達はもうプリキュアでもなければ人間でもない…私のあやつり人形に堕ちちゃったのよ！」

「どうだ悔しいか元プリキュア！」

「うぅ……」
「あはぁ～？ごめん痛かったよね？
でもこれからはこんなもんじゃ済まさないから❤」
「これまでの分、毎日毎日足と言葉の暴力で
ケツチョンケチョンに踏みにじってあげるから❤」
「……はい…ありがとう…ございます…」
「ちゃんとお礼言えて偉いわねぇ～❤あはっ❤
でも本当はもっと泣く顔が見たいのよねぇ～❤まぁいっか❤」
「これから毎日死ぬほど拷問して痛めつけて、マゾ発揮できないくらい
泣かせてやるから❤ブタみたいに卑しく許しを請いなさい！❤」

「さあ、これに着替えなさい」
奥に連れて行かれた二人は、セイレーンから服を渡された。
「こ…これは…？」
「もうプリキュアには変身できないでしょ？これからはそれを着て仕事なさい」
「……はい…♥」
「…かしこまりました…♥」

「三下には良く似合ってるわ。
さあ、悪のしもべとして生まれ変わった
あなたの働き、期待してるわよ」
う…うわぁ～…
私…プリキュアだったのに……
特撮モノのザコキャラの格好してる…こんな…
でも…なんで…？
私…こんな服着せられてるのに…
興奮して……おち〇ちんが…❤

「あなたもこれで立派な戦闘員ね
しっかり働いてもらうわよ」
「…はいっ❤」
…すごい…本当に私プリキュア辞めて
悪者の子分になっちゃったんだ…！❤
はぁ～❤ワクワクする～！❤
いっぱい働くぞッ！❤

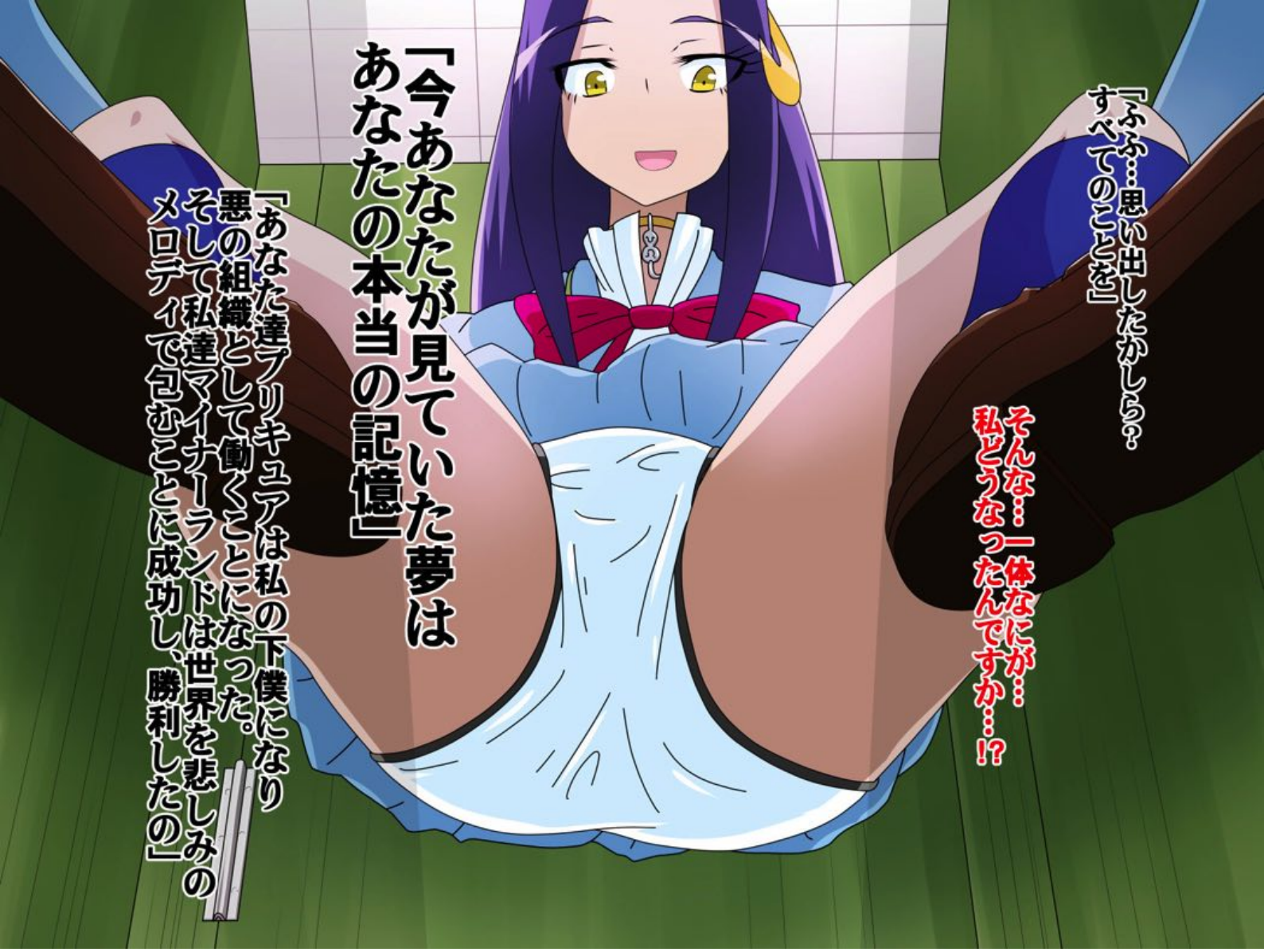
「さあ行くわよ。
これからの仕事、私の補佐として
コキ使ってあげる♥」
「はい…セイレーン様…♥」
「なんなりと…♥」

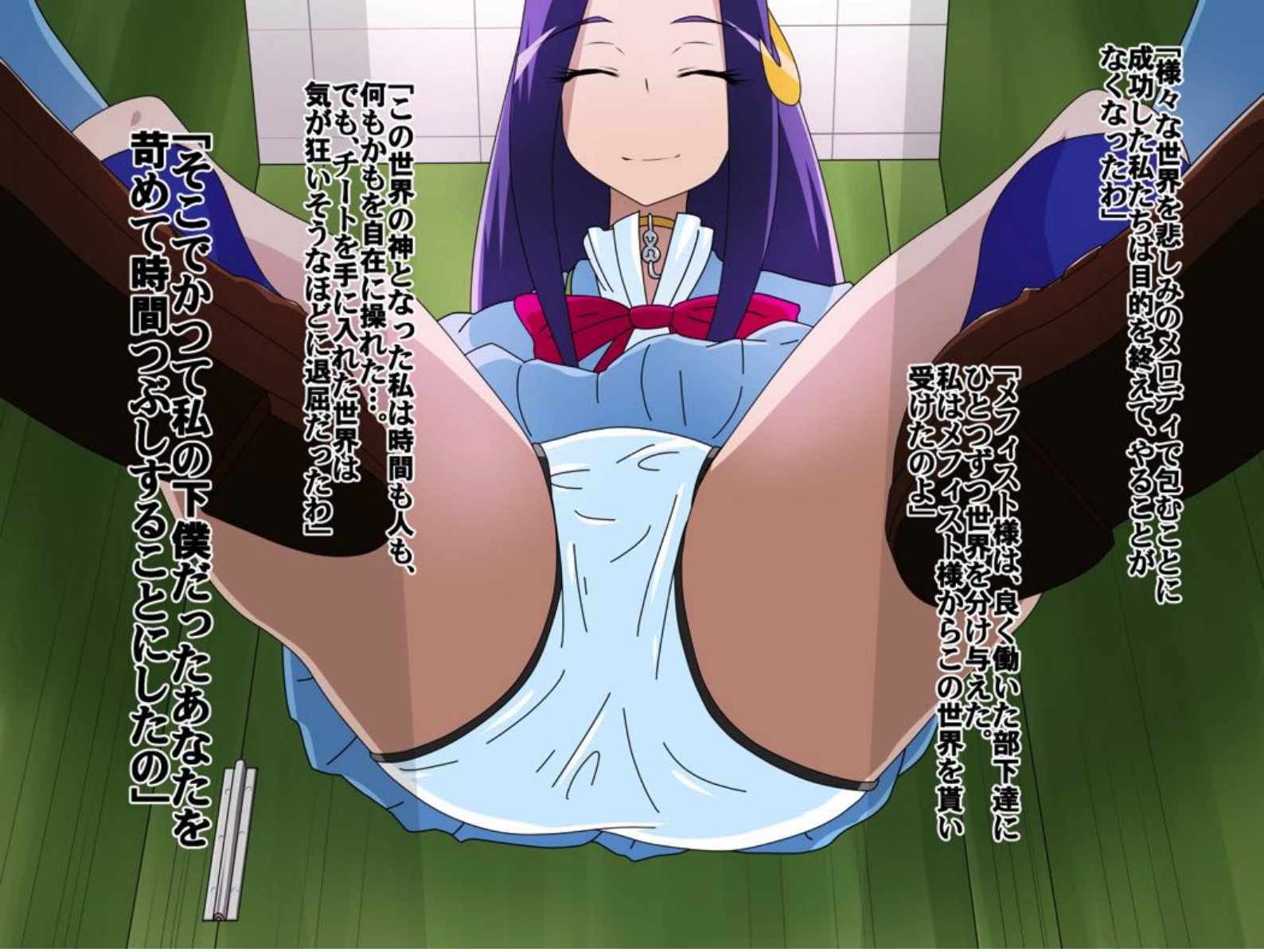
4.「絶望」

「……ら…」
え……？
「……なら…」

「恐れ入りこの鋼ー。」

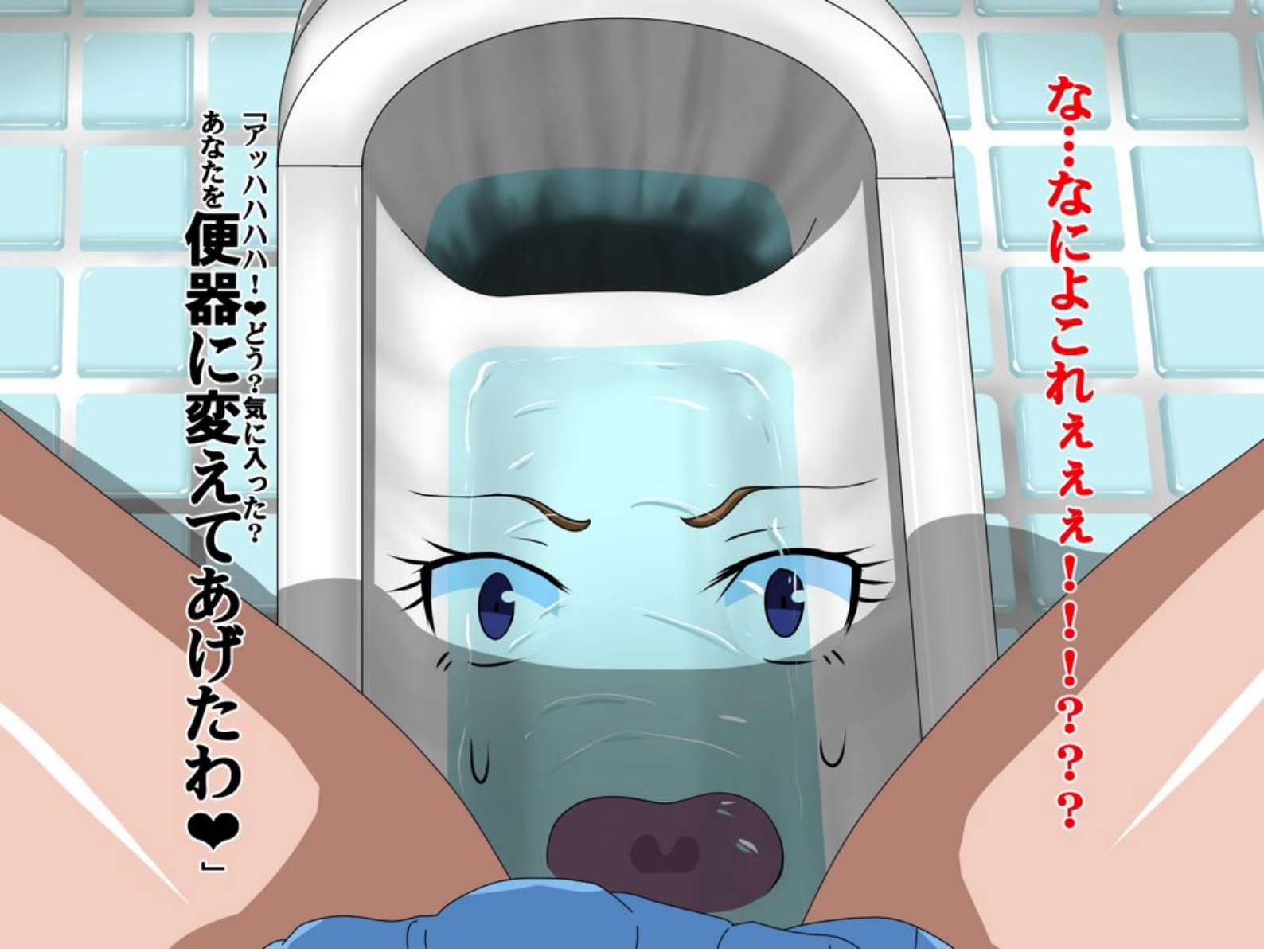
『おはよう響』
ッ…!?
セ…セイレーン…様…?


「ふふ…思い出したかしら？
すべてのことを」
そんな…一体なにが…
私どうなったんですか…!?
「今あなたが見ていた夢は
あなたの本当の記憶」
「あなた達プリキュアは私の下僕になり
悪の組織として働くことになった。
そして私達マイナーランドは世界を悲しみの
メロディで包むことに成功し、勝利したの」


「様々な世界を悲しみのメロディで包むことに成功した私たちは目的を終えて、やることがなくなったわ」
「メフィスト様は、良く働いた部下達にひとつずつ世界を分け与えた。私はメフィスト様からこの世界を貰い受けたのよ」
「この世界の神となった私は時間も人も、何もかもを自在に操れた…。でも、チートを手に入れた世界は気が狂いそうなほどに退屈だったわ」
「そこでかつて私の下僕だったあなたを苛めて時間つぶしすることにしたの」

「あなたがプリキュアになる前まで時間を巻き戻し、
あなたの記憶を奪い、皆の記憶を操作して、
あなたをいじめられっこに作り変えてあげたのよ❤」
そんな…！
「そう」
「この世界のあなたは私によって作り変えられた
ウソの記憶のあなた」
「明るくて皆の人気者でプリキュアをやっていた
あなたではなくて、私の玩具にされるだけのただの
いじめられっこにしてやったの❤」
ッ…～～！

「アハハハ！楽しかったでしょ？だってあなたってドMだものね❤」
ひどい…！ひどいですセイレーン様…！私あなたの下僕として沢山働いたじゃないですか！どうしてこんなことするの!?
「そりゃ私がやりたいからよ❤」
そんなぁ…！
「でももうあなた苛めるのも飽きちゃったから、それも終わり。ほら、わかるかしら？ほら」
っ…！！！！


な…なによこれぇぇぇ！！！？？？
「アッハハハハ！❤どう？気に入った？
あなたを便器に変えてあげたわ❤」

や…嫌だ…！私便器なんかになりたくない…！

「ただの便器じゃないわよ。ちゃ～んと味覚も嗅覚もある」

「あなたはこれから半永久的に、このアリア学園で毎日毎日女生徒たちにおしっこと大便をかけられ続けるの！❤」

ッ～！！

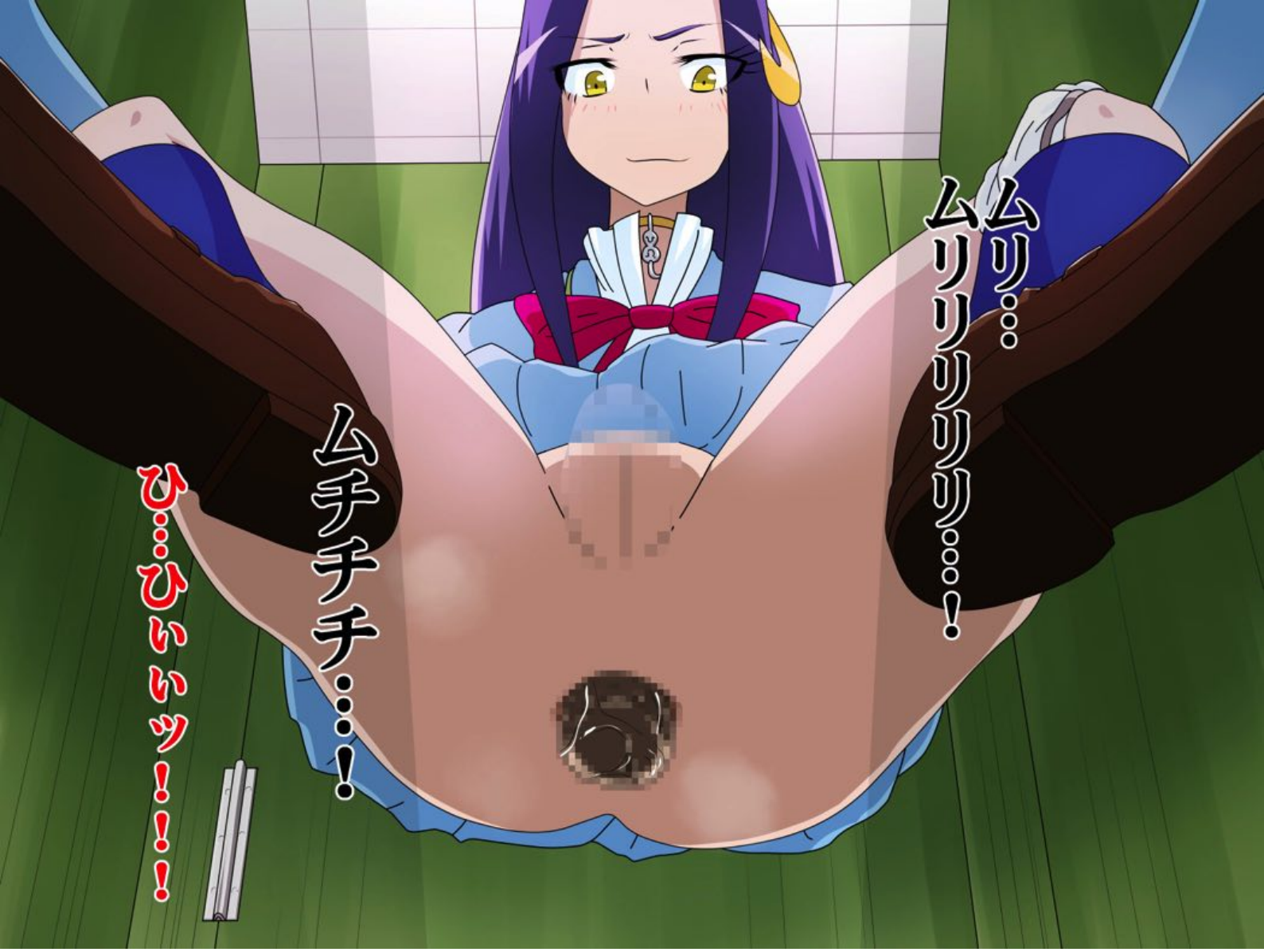
「来る日も来る日もず～～っとね❤アハハ❤嬉しいでしょ？変態マゾさん❤」

い、いやだ！そんなの絶対に嫌だよッ！

「便器には人間みたいに寿命は無いから。あはっ❤つまり、この学園が存続する限り、あなたはそこから逃げられない。可哀想ね❤」

…ッ……

「それじゃ、記念すべき第一発目！❤
昨日からたらふく油ものとジャンクフードを食べた
私の特大一本糞をおみまいしま～～す❤❤」
いやだ！やだ！やめて！！
「だめ～❤」
「さあ、たんと味わいなさい！
私からの餞別ウ〇コ！」


ムリ…
ムリリリリリ…！
ムチチチ…！
ひ…ひいいッ！！！

ぽちゃんっ
んんんッ～～～！！！
「アハハ！どう？私のう〇ち、美味しい？
私の身体から出たカス、美味しいでしょ？」
うぇぇぇッ！！やべてッ！
「アハハハッ！便器の中に味覚も嗅覚も、そして
触覚もすべて入れてあるの！だから私のホカホカ
う〇こを全身で感じられるでしょ？❤」

「さあ、どんどんいくよ！」
もういやぁぁぁぁ！！
やだぁぁぁぁぁ！！！！
「どれだけ言ってもダメ～♥ほ～んと、プリキュアにならなければこんな結末にならなくて済んだのにねぇ～？」
「まぁアンタみたいなドアホにはお似合いの末路だわ」
「ここで永遠に皆の排泄物食わされてるのがあんたにはお似合いよ！アハハハハ！」
ブリブリブリブリブリブリ！
うぇぇぇぇぇッ！
おぼぉぉぉぉぉぉッ！！！

「トドメよ！」
ジャアアアアアアアアア！！
おぼおおおおおおおおおッ！！！
ボ
ボ
ボ
ボ
ボ
ボ

「う○ちとおしっこのバーモニーパワーはどうかしら？最強でしょ!?❤」
がほほほほッ…！
「この世で最も下等生物のあなたにこうして便を受け止めるという崇高な仕事を与えてあげたんだから、感謝なさい！」
「ほら！ありがとうございましたはどうした！ほら！早く言え！」
「この便器女！」

びゅっ……
ビュッ
ッッッポッ
おぼっ……！
びゅっ……
うふっ……！
ッッッポッ
ビュッ
「はぁ～～♥すっきりした♥」

フキフキ…

「私は時間を何度でも巻き返してずーっとこの学園にいるつもり」

「だから、一日一回はここに来て排便していってあげるわ。嬉しいでしょ？唯一便器とお話できる私が来てくれるんだものね♡」

「だからここでしっかりと便器としての役目をまっとうしなさい」

「じゃ～ね、バイバイ」
ニヘッ♡
「もとプリキュアの女子便器さん❤」

ちゃ
ぽん…

END